

日に示寂せし談あり。單に偶合の事實とのみ見るべからざるものなきにあらず、「新著聞集」の傳ふる所は、我は二月二十四日に死すべしとの豫期意向の其人をして終に夢の如くならしめたりといひ得んも、ヘボンの心理學にいふ所は、事、他人に關するが故に自己が心を以て迎へたるなりと云ふ能はず。夢の研究は尙ほ多くの疑團を吾等の前に遺す。

睡眠遊

身は一室に静臥して夢魂遠く千里に飛ぶは夢の常態なれど、世には睡眠遊(Somnambulism)てふ奇異の病癡を有するものありて、夢裡に遊行して諸種の言動を演ず。蓋し夢の意識一部の活動なるが如く、これは意識の大部分并に感覺機能の休止せる睡眠中に於て獨り知覺的運動系統の覺醒せるによりて生ずる現象にして、覺めては全く夢中の行動を忘却し、我自から行つて其の我たるを知らず。寢言の如きは其の最も平凡なるものなれど、中には起き出でて滔々と他と議論し、若くは獨り机上に文を稿し、甚だしきは戶外に出遊して、亂行を試みるものあり、覺

め來りて我我が所業に驚く。此の如きは、第一の我の眠りて第二の我の覺め、平生に現るゝ意識意外の行動を敢てするもの、其の最も近き例は之を催眠術に於て見るを得べし。

催眠と睡眠

睡眠は自然的に誘發せられたる精神状態にして、催眠は人工的に誘發せられたる睡眠状態なり。自然と人工との差はあれ、大體の徑路は之を同じうす。施術者の被術者を眠らんとするや、先づ睡眠の觀念を起さしめ、「眠れ」との暗示を與ふることによつて睡眠状態に入るものにして、普通には被術者をして一の物體——殊に光輝あるもの、赤色なるもの——を凝視せしめ、又は單調なる音聲を聽かしめ、若くは其の皮膚を摩擦する等の物質的誘因を以て被術者の精神を一方に集注せしめて其他の機能を休止せしめ、さて其の一方に集注したる感官も漸次に疲勞して、茲に全部の機能を休止したる睡眠状態に入らしむ。これを吾等が睡眠に見るに、臥床に入りて自から睡らんとする自己暗示に基くものにして、單調なる雨聲、感興を惹かざる讀書等は

常に其の物質的誘因を爲す。されど催眠は、もと外來暗示の感應に基くが故に睡眠の如く自發的にも、外來的にも活動せざるものと異なり、自發的にこそ活動せざれ、心海平靜にして他の觀念の波だつことなければ他の暗示を感受する力強く、被術者の心は全く施術者の心に支配せられ、其の命するがまゝに行動し、又其の暗示によりて諸種の幻覺を生じ、反故を示して紙幣なりといへば紙幣なりと感じ、水を與へて酒なりといへば、之を呑んで微醺を帯び、焼火箸を以て棒なりといへば之を握りて痛さを感じざる等、悉く其の暗示のまゝに動き、右せよといへば右し、左せよといへば左す。此時に當りて彼の心、我心に入り、自發的なる第一の我は其影を隠して、彼の暗示に動く第二の我のみとなる。而して殊に強烈なる暗示を與へたるにあらざる以上は、眠時の状態は醒時に於て記憶せざるを常とす。こは他の暗示によりて自己の分裂を招きたるなれど、彼の睡遊の如きは自己の心的作用によつて此の催眠状態即ち眠中の醒覺を生じたるにあらざるか。

人の天降りし話

奇々怪々たるは心の現象、若し此の眠時に於ける醒覺の比較的長きものに至つては、學者の頭腦を苦むるもの殊に多し。「兎園小説」に人の天降りし話を載す。

文化七年、庚午の七月二十日の夜、淺草南馬道竹門のほとりへ、天上より二十五六歳の男、下帯もせず、赤裸にて降り來りて、たゞすみ居たり。町内のわかもの、錢湯よりかへるさ、これを見ていたく驚き立去らんとせし程に、かの降りたる男は、そのまゝそこへ倒れけり。かくて件のありさまを町役人等に告げ知らせしかば、みないそがはしく來て見るに、そのものは死せるが如し。やがて番屋へ昇ぎ入れて介抱しつゝ、くすしをまねきて見せけるに、脈は異なることもあらねど、いたくつかれたりと見ゆるに、しばらく憩らはせおくこそ善からめといへば、皆うちまもりて居る程に、しばしありて件の男はさめて、かうべを擡げにければ、人みなかたへにうちつどひて、ことのやうを尋ぬるに、答へていは

く、某は京都油小路二條上る町にて、安井御門跡の家來、伊藤内膳が俵にて安次郎といふものなり、先づこゝはいづくぞと問ふ。こゝは江戸にて、淺草といふ處ぞと答ふるに、うち驚きて、頻りに涙を流しけり。かくてなほつぶさに尋ぬるに、當月十八日の朝四つ時比、嘉右衛門といふものと同じく、家僕、庄兵衛といふものを具して愛宕山へ參詣しけるに、いたく暑き日なりければ、きぬを脱ぎて涼みたり。その時のきるものは花色染の四つ花菱の紋つけたる帷子に黒き絹の羽織、大小の刀を帯びたりき、しかるにその時、一人の老僧わがほとりへ出て来て、おもしろきもの見せんに、疾く來よかしといはれしかば、隨ひゆきぬとおぼえしのみ、其後の事をしらすといふ。いとまあやしき事なれば、そのものゝ穿きたる足袋を、あたり近き足袋あき人等に見せて、こは京の足袋なり哉とたづぬるに、京都の仕入にたがひなしといへり。その足袋にすこしも泥土のつかでありけるも、亦いぶかしきことなりき。江戸にてはかゝる事あれば、官府へ訴へ奉るが町法なれば、何と御汰沙あるべきか、その事もはかりがたし。江戸に知音のものなどの有りもやするとたづねし

に、しる人としては絶えてなし、ともかくも掟のまに／＼はからひ給はれといふにより、町役人等談合して、身の皮を拵へつかはし、官府へ訴へまうしゝかば、當時御吟味の中淺草溜へ御預けになりしとぞ。其後の事を知らず、いかゞなりけんかし。(文政乙酉冬十月朔。文寶堂しるす)

愛宕山は太郎坊といへる天狗住めりとは、一般の信憑する所、安次郎、此山に詣でて老杉古檜の中に一老僧に會せしより、自から催眠状態を誘致し、諸方を放浪して江戸に來りしは、全く第二人格の活動にして其の淺草馬道のほとりに醒めたる時、第一人格に復せしにあらざるか。其間に於ける記憶は全く忘失して其の如何にして此處に來れるかを知らざるにあらざるか。當時若し今日の如く變態心理の進歩したるありて、何人か之を研究の資料に供したらんには、發明する所、少からざるものありしも知るべからず。

五百弗の行方

一千八百八十七年一月十七日、米國のアンセル・ポーンといへる一牧師、プロビデンスに在る某銀行より五百弗餘の預け金を引出して、其儘行方不明となれり。當時新聞紙上にも廣告し、警察も亦捜索に力を盡したれど、杳として知る能はず。かくて二月ばかりを経過せしにプロビデンスを距ること遠きノリスタウンの地に六週日ほど以前より雜貨並に菓子等を賣げるブラウンといへる男、或朝、フト眼を覺して不思議に堪へず、我は何が故に此地に來り、かゝる業を營みつゝあるや。我はアンセル・ポーンといふ一牧師にして銀行より預金を引出せるまでは記憶すれど、其後のことを知らずといふ。家主等は先に驚きて發狂者ならんとて醫師に診せしめなどしたれど、餘りに明確に本人の云ふまゝに、電報を以てプロビデンスに照會せしに、其甥なる人の來りて、アンセル・ポーンに相違なきこと判明したりといふ。心理學者ゼームスは催眠術を施して暗示を與へ、ブラウン時代のことを想ひ起さしめしに、彼は歷々とノリスタウンに開店せし當時を語り、醒めては其間のことに就いて何事も知らず、醒中の醒は醒中の醒と連續し、眠中の醒は眠中の醒と連續し、第一人格は常に第一人格に接し、第二人格は又第二人格に接す。此に於て吾等は彼の降神術を行ふ徒の、平時は他と異なるなきも、自から催眠状態に入りて神靈と交感せる事象に就いて説明の曙光を得たるが如きを感じ。されど研究の前途は遠く、不可知の域は依然として大なり。

千里相通ず

予曾て副島種臣氏の『吊阿清文』を讀みて、心と心との千里相通するの事實の報ぜらるゝを見る。文に曰く、

三月某夜、夢に季子お清を見る。撫愛切至平日に異なる、正に知る始めて病を得るの時なり。厥後またお清其姉お堅お直と來り余を拜するを夢む。四月八日夜半、神異眠る能はず、翌朝曉、天神地祇及び祖宗の靈に默禱し、即ち神お清を携へて儼然として前にあるを見る。吾、甚だ之を異とし、諸從士に告ぐ。既にして電報あり、昨夜お清歿すと。即ち客館に位を設け、清酌庶羞を奠むるの時、お清、前に立つを見る。お堅お直、側に立ち來り

享くるものも如し。嗚呼、東京と上海と相去る萬里、中間大海、而して神氣の通ずる一呼吸を俟たず。神界の神界たるなり、何ぞ況んや事を前知するをや。神爲にあらざるよりは焉んぞ能く此の如くならん。唯だ吾、お清と生別離して其の棺殮を親からする能はず、哭して餘りあり。禮に云ふ所、必ず其形を見、必ず其聲を聞くもの、吾今其の證人なり。將た何を用ひてか其靈を慰めん、亦唯だ生々世々人道を保護せんのみ。詩にいふ、

遭二遇 家不造一 變故頻相因。

千憂逼二我心一 百難侵二我身一。

而吾神道説。 啓發從レ此眞。

努力復努力。 胡足レ爲ニ酸辛一。

これは副島伯が目に映じたる幻覺に外ならざるべしと雖も、伯が觀念を刺戟して此の幻覺を生ぜしめたるもの、伯自身の觀念の力のみとは云ふ能はず、父を慕ふ子の一心の伯の觀念を動かすに力あるものあるにあらざりしか。異郷に留學せる學生が鬚髯として父母の幻覺を生じて、

後、其の訃音に接し、戦地にある軍人の家族が夢に其姿を見て、殆ど同時に死せりとの報を受けし如きの例、單に偶合の事實とのみ見る能はず。一方の心的状態が感受的となり、他の心的状態が暗示的となることは彼の無線電信の一方が發電状態となり、他方が受電状態となれる時、相感應するが如きものあるにあらざるか。普通の場合には雜念跳梁して心海平かなる能はず。且つ感官によりて撃縛せられ、自我の意識によりて統一せらるゝが故に、彼他彼此の區別に制限せられて感應することなきも、彼の副島伯が初めには夢裡に見、後には神前に見たるが如く心の平靜なる時に相通するものあるにあらざるか。

● 天眼通

碧潭、澄んで鏡の如く、沿岸の風景、落ちて其中にあり、空飛ぶ雁も其影を宿し、淵に住む魚も點々算すべし。吾等の心、若し此の状態に入るを得ば、彼我の差別、没して千里も亦寸心の中に收むるを得べきにあらざるか。世の所謂千里眼なるもの、亦無念無想の域に入るべき

をいひ、菩薩の天眼通も亦天然の慧性、徹照無碍なるをいふ。吾等は研究未だ精ならざる是等の問題に對して容喙するの權能を有せざれど、世に透視の事實あり、催眠に千里眼の狀態あり。聖者に神通の跡傳へらるゝ以上、隠れたる吾等の力の益々偉大なるを感ぜざるを得ず。瑞典の神祕哲學者スエデンボルグは、ストックホルムを距る三百哩のゴッテンブルヒといふ地に赴きて或紳士の招待を受け、晚餐の卓上、忽ち不安の色を面に現して、突然「今、ストックホルムは焼けつゝあり」といひ、續いて「嗚呼、予の友の家は焼けたり、予の家も危し」といふ。一同は其の意外の言に驚きて敢て慰むるものもなく、唯だ呆然たりしに、宴終るの頃、安心の態にて「漸く鎮火したり、予の家より三軒目の所にて消し止めたり」といふ。當時、兩地の間は通信の便悪く三日を経て初めてストックホルム大火の報告に接し、且つ其の云ふ所のスエデンボルグの語りし所と寸毫の差なきに驚きたりと。吾等は之をも偶合の事實なりと斷却するの大膽を有せず。

感應

感は牽召の義、應は赴接の義。彼牽いて我赴き、彼召して我接す。心は一氣、各人個々の心を貫通して互に脈絡相應するものあり。嘗茶山の『筆のすさび』にいふ、

凡そ天地人は一氣にて、此に呼べば彼に應へ、感すれば通ずる類にて一も驗なきはあらず。肉眼ことごとくを見ることを得ざる故なるべし。或は萌して變じ、或は萌さずして忽然と出で來るもあるべし。故にことごとく之を見ず。見ても信ぜず、意とせざるにや。俗諺に人を誹らばめしるをおけ、呼びにやるより誹るが早きの如き、其人來らんとするの機、既に之に應へて、覺えず知らず其人を思ひ出づるによりて誹謗の言も出すなり。此等のことにても思ひ半に過ぎんか。

心と心との感應、吾等は此にも強烈なる心の常に微弱なるものを支配するを看取せずんばあらず。

怪知るべきか

心霊の怪 得て知るべきか。吾等は一切の怪的现象を抹殺して、現代の智識を以て悉くを解説し得べしとは信ぜず。されど又、怪は依然として怪にして智識の外に出づとするの説に左袒する能はず。解し難き心も、分析せられ綜合せられて紛然雑然たる中にも、一脈の理路の見出されしは研究の結果にして、往日の怪も、今日に於て尋常茶飯の事として説明せらるゝもの少からず。迷妄の間は智識の光を以て照らさざるべからず、神祕の雲は研究の力によつて開かれざるべからず。心霊の怪 今日に於て解説し得ざるもの多し。然れども解説を許さざるにあらずして解説の到らざるなり。未だ到らざる所に歩を進めんとする學者の努力は、刻一刻、靈怪の域を縮小し、日に進み月に歩みて、解説の領土を擴張するを疑はず。今に於て知り了れりとするは妄なり、終に知るべからずとするは痴なり。唯だ知り得られざるものは、研究せんとする吾等と其の境地を異にせる生前死後の問題なり。生前死後は、唯だ推理すべきも、實

験する能はず。想像すべきも證明する能はず。若し信仰の念の其間に逆るなくんば、吾等は千古萬古、生の前に冥く、死の後に冥からん。

うしといひあはれと思ふ種なくば

○ 世にことのはもしげらざらまし (村田春海)

聞くまゝにまた心なき身にしあれば

○ おのれなりけり軒の玉水 (道元禪師)

霊

魂

幽霊と靈魂

幽霊に關する通俗の信仰は死者の靈魂の生者の面前に現るゝものとして信ぜらる。靈魂果して身體を脱出して能く遊離し得るものなるや、抑も亦身體以外別に靈魂なるものありや、若し之ありとするも能く身體死滅の後に於て存在し得るものなるや、存在し得たりとするも、世に傳ふるが如く吾等の感覺に入り來るが如き形體を有するものなるや。これ頗る興味ある問題にして、しかも千古未決の懸案なり。よし多くの幽霊現象は觀念より誘起せる幻覺として説明し得るも、死後の状態は生者の經驗以外に投げ出されて、靈魂其者の存否も容易に決せられざる難解の謎たり。されど吾等の智識は現在の經驗に立脚して其の所謂靈魂なるものゝ通俗の迷信せる如き個體的存在物にあらざるを證明し、幻覺以外に死人の靈の生者の如き状態に於て來往するものに非ざるを論定するに於て支障なきに至れり。

靈魂の觀念

吾等は生時に於ては心のまゝに言動し行爲す。しかも死後に於ては身體の生時に異ならざるものあるに拘らず、毫も言動せず行爲せず。死の當時に於て其の身體生時と何の異なるものがある。唯だ僅に温かかりし身の冷却し、呼吸したりしものゝ呼吸せずなりしのみ。之によつて彼言はず彼動かす。此に於て原始民族は死を以て靈魂の身體より脱出し去れるものとす。彼等が此の身體以外に靈魂なるものゝ存在を假定せしには諸種の因ありと雖も、其の主要なるものはスペンサーの所謂陰影、照影、夢並に癲癩失神等の病的状態を目撃せしに由る。陰影は光線を遮閉せるによるといへども、彼等は其の身體と常に相隨伴するを見て我身と不離の一物ありとし、水に映れる我影即ち照影を見ては、我身に附隨せるものゝ飛んで其中に入りしと見、こゝに現在の我以外に、潜在的なる別我の存在を假定し、殊に身は臥床にあつて遠く山河を跋

涉し、親しく故人に接せる夢なるものを見ては、其の一物の身體を脱出して遊離し來れるなりと想像せざるを得ざりしなり。癡癡失神等の場合に於て全く氣を失へるものゝ暫時にして癒し來るに接しては益々此の觀念を固め、其の失神状態の永續的となりし死を以て靈魂の脱出なりと想到したるは、幼稚なる彼等の推定としては無理ならぬ順序にあらずや。

死後の想像

さて然らば身體を脱出したる靈魂の如何になり行くや。想像は更に想像を生み、或は動物の體內に入りて其の心靈となり、輾轉して終に又人の體に宿るとし、或は死者の靈は死者の靈のみ棲息せる社會、即ち冥土又は幽府黄泉若しくは夜見國なるもの存せりとし、其の道德的因果の觀念の加はりては、生時に於て善を行ひしものは樂しき國に生れ、此世に於て惡を犯せしものは苦しき境に落つとし、こゝに天國(極樂)地獄の想像を描き、一は歡樂の極にして他は苦患の極とし、聖者は之を以て人を導き、人類生存の慾望は又此の死後の生活に想到して、幽界の思

想は古今を貫き東西に亙る。然れども、これ吾等が經驗以外に存し、これを實證する能はず。世には冥府の談を傳ふる少からざるも、多くは其人の催眠状態より生ぜる幻覺に外ならずして、專念佛神を想うて終に其の示現を受け、又は平生意識の下に潜める思想の失神の場合に實現せられ、醒めて冥府の狀を語るの類、皆其人の心的状態と隔離せざるに於て首肯すべきものあるにあらずや。彼のしばしば冥府に來往し、細さに其狀を語るものゝ如きも彼等が心より産み出せる夢幻を語ると見る以外、吾等は何の信憑すべき根據を認めず。唯だ變態心理の研究に多大の資料を供するを見るのみ。

神界物語

紀州和歌山西瓦町黒江屋辰右衛門四男幼名を善竟といひて、西要寺といへる淨土宗の小僧たりしが、嘉永四年三月十日(時に年十七歳)、夢に尊き神仙來り、翌日又來りて花山といふに連れ往かれ、雲に乗じて日向の赤山といふ仙境にて清淨利仙大神といふに合し、歸りて島田幸安

と號して醫を營み、しばし幽界に來往し、死者の靈に會して問答せる事蹟を記述したる「神界物語」なる一書(寫本)世に行はる。彼は楠公と語り、家康と會したるなど眞面目に示されたが、同書の中に、或人問ふ、

「汝、毎々神仙の幽塔へ往來せる由、其時は何様の術あつて行き候や。」

幸安いふ、

「いつにても闇き夜、又曉の頃に仙人の方より御指圖ありて行き申し候。大抵一六の日に參る定めなり。私より行きたしと思ひて行く術は御坐なく候。參るべき用事出來る時は必ず現界のことを御察しなされ候。御案内がある故に參り申し候。尤も山人と申すに伴はれ、雲へ登り虚空を歩き、暫時に仙境へ行き申し候。其時は私の體も持ちたるものも皆人間の目には見えぬ様に成り申し候。又此中に私が形骸は家内に寢て居ながら魂氣ばかりが抜け出で參ることもこれあり候。」

問ふ、

「然るときは身は死體と相成候や。」

答ふ、

「深く寝入りて何程ゆすり起すとも起き申さず候。然れども呼吸ありて生きたる骸なり。」
これ豈幸安が眠中に於ける醒覺を語るものにあらずや。事、若し幸安の山師的行動にあらざれば、心の變態より幻出したる物語のみ。

スエデンボルグ

スエデンボルグは尊敬すべき碩學なり。彼の生活は清淨に、彼の研究は精緻にして殊に其の前半生に於ける數學科學の造詣は一代に雄たるものありし。彼に此の素養あり、而して後半生に於て彼は更に眼を靈界に注ぎ、一隻の靈眼、塵界を超絶して幽界と交通するに至りて、一千七百四十四年、彼は倫敦にありて深遠なる思索に耽りつゝ、形而上學の著述に心力を注げる或日の事なりき。彼は平生の如く晚餐を喫せんとて食卓に向ひ、將に終らんとする時、朦朧とし

て我眼の掩はるゝを覚えしが、やがて復び明かとなりて、突然室の一隅より「食を過すこと勿れ」と聲かけし異形の人を見、翌夜も亦其人の現れて「我は神なり主なり、世界の創造者にして救済者なり、我は聖的の靈的主義を人間に傳へんとて汝を擇みたり」といひ、次いで天國地獄の狀況は彼の前に展開せられ、爾來彼はしばしば靈界に來往して、其の觀察を記述したる「天國と地獄」の如きは實に宗教史上に一異彩たり。彼の云ふ所は精細にして其の論ずる所は深遠、整然たる系統は其の哲學の上に現れ、敬虔なる宗教的靈感はその記述の上に迸るも、吾等は其の謂ふ所の天國地獄を以て、實在のものとする能はず。皆これスエデンボルグが主觀の反映にして、彼の人格の之を造り上げたるものを疑はず。人若し是れ汝の凡眼の見る能はざるのみ。靈眼に於ては確に存すと云はゞ、吾等は暫く其の凡眼の名に甘んぜんのみ。

地獄極樂

人類の富贍なる想像は苦の極を寫して地獄となし、樂の極を寫して天國とす。天國も地獄も

皆其の思想の上の幻影なりと雖も、敬虔なる宗教的信念を有するものは、之を實有の境として以て自から戒飾す。惠心僧都の「往生要集」は地獄中の最も苦境たる無間地獄を寫象して凄慘を極む。

彼の阿鼻城縱廣八萬由旬、七重鐵城七層鐵網下に十八の隔あり、刀林周匝四角四銅狗あり、身四十由旬、眼電の如く、牙劍の如く、齒刀山の如く、舌鐵荆の如し。一切の毛孔より皆猛火を出す。其烟の死惡なること世間に喻ふるなし。十八獄卒あり頭羅刹の如く、口夜叉の如し、六十四の眼あり、鐵丸を迸散し、鉤牙上に出で、高さ四由旬なり。牙の頭より火流れて阿鼻城に滿つ。頭上八牛頭あり、一々の牛頭に十八角あり、一々の角頭より皆猛火を出す。又七重城内に七鐵幢あり、幢頭火踊猶ほ沸泉の如し、其炎流迸して亦城内に滿つ。四門闍上八十釜あり、沸銅涌出して亦城内に滿つ。一々の隔て間口八萬四千、鐵鋒大蛇あり、毒を吐き、火を吐き、身城内に滿つ。其蛇哮吼すること百千雷の如し、大鐵丸を雨らし亦城内に滿つ。五百億蟲あり、八萬四千嚙あり、嚙頭火流れて雨の如く下る。

此蟲下るとき猛火彌々盛んにして八萬四千由旬を照らす、又八萬億千苦中苦は集りて此中にあり。

といひて苦の極を寫し了る。而して之に赴くものは皆これ現世に於て惡業を重ねしものと説く。畏友鈴木大拙氏の著「スエデンボルグ」は、彼が地獄觀を紹介していふ。

或地獄は岩間にある窟の如く、洞穴の如くにして内に向ひ、其後轉じて斜めとなり、或は直下して遂に無底の淵に入る。或は猛獸の森中に住める如き洞穴及び窟に似たるあり、或は鑛穴の如く孔道下に通じて地窖及び窟穴に似たるあり。大率地獄は三層となれり、上層は黑暗々なり、そは此處には惡よりする諸僞に在る者住めばなり。下層は火に似たり、そは此には惡そのものに在る凶靈住めばなり。何となれば黑暗々は惡よりする諸僞に相應じ、火は惡そのものに相應すればなり。地獄の深き處には、其の行動惡に基きて其の内分より之を爲せるものなり、されど深からざる處には其の行動亦惡に基けども、只その外分よりせるものなり、これ即ち惡よりせる虚偽に基きて行動せるものなり。或地獄には恰も

火災後の家屋及び市街の焼け残りの如きものありて、凶靈此中に隠れ住めり。寛かなる地獄には恰も粗造の小屋に似たるものあり、或は連接して一箇の都市をなし、道路通ぜり。屋内に住める凶靈間斷なく鬭争し抗敵し、相撃ち、相戦ふ。道路には盜賊、槍劍横行す。或地獄には只淫房のみあり、汚穢と糞土とに充てり、面を向くべからず。又茂れる森あり、凶靈此處に徘徊すること猛獸に似たり。又此の地下に洞穴ありて、他のために驅逐せらるる時、彼等此裡に隠る。或は地瘠せて、砂のみなる砂漠あり、或は岩石亂立して洞穴を有せるあり、或は小屋の立てるあり。極度の責罰を受けたる凶靈は地獄より逐はれて此の如き荒野に投げ棄てらる。特に世にありたる時、欺巧を弄し譎詐を企らむこと他に勝れて妙を盡せる者は、此に來りて彼等が最後の生涯を營むものとす。同じく天國に對しては「われ天界にて其の崇大なること言語に絶えたるばかりの宮殿を見たることあり。其の上方は精金にて造れる如くに光を放ち、其の下方は寶石より成れるが如かりき。諸房内部の裝飾に至りては、之を記すべき言語なく、又知識あらず。南方に向へる處に樂

園あり、此に在る一切の事物亦前と同じく光耀陸離たり。ある處には銀の如き樹の葉あり、金の如き果實あり、花壇にある花の色は紅霓の如く見えぬ。望み極まる處に疆界あり、疆界の彼方に又宮殿あり、天界の建築は實に美術其物なりと思はるゝばかり也」と説く。
釋尊長老舍利弗に告げて、細かに極樂の莊嚴を語りたまふ。「佛說阿彌陀經」の華麗なる文字は之を示す。

是より西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名づけて極樂と曰ふ。其土に佛あり、阿彌陀と號す。今現に在して法を説く。舍利弗よ、彼の土何が故に名づけて極樂と爲す、其國の衆生、衆苦あるなし、但諸樂を受く、故に極樂と名づく。又舍利弗、極樂國土には七寶の池あり、八功德水、其中に充滿す。池底は純ら金沙を以て地に布き、四邊の椽道、金銀琉璃玻瓈合せ成り、上に樓閣あり、亦金、銀、琉璃、玻瓈、碑磔、赤珠、瑪瑙を以て之を嚴飾す。池中の蓮華大なること車輪の如く、青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光、微妙香潔たり。舍利弗よ、極樂國土には是の如きの功德莊嚴を成就す。……又舍利弗よ、彼國

警諭の中に哲理あり。これら聖者哲人の示す所、皮相の觀察を以て評論する能はずと雖も、人類の最も欣求する所の快樂と、厭離せんとする苦患とも示せるや疑ふべからず。吾等は之によりて道念を鞭うつべく、信仰を獎ますべし。其の有無に至つては其人の心に尋ねざるべからず。

地獄極樂の有無

人あり、智藏和尚に問ふ、「地獄ありや」と。藏いふ「有り」と。其人怪しみていふ、「曾て徑山和尚に參じて問ふに此事を以てす、和尚有ることなしといふ、同一佛法中此の相違ありや」

と。藏いふ「汝に妻ありや」。其人いふ「有り」。更に問ふ、「徑山和尚に妻ありや」。其人いふ、「和尚固より妻あることなし」。藏いふ、「徑山和尚地獄なしといふことは得たり」と。意は有無其人にあるをいふもの。林大學頭、眞宗の大徳香樹院上人に云ふ、「佛者地獄を説く、我其の有るを思はず」と。上人いふ、「衲も亦有ることなきを思ふ」と。大學いふ、「上人常に人に向つて地獄を説く、今有ることなしといふは何ぞや」と。上人答へて、「罪あるものに牢獄はあり、罪なきものには有るも無きと同じからずや」と。これらの話頭よりも更に興味あるは白隠禪師の逸話なり。尾州藩士織田信茂参観の途次、原驛に禪師を訪ひ、「地獄極樂、抑も有か無か、心甚だ迷ふ。希はくは、禪師の示教によつて疑團を除くを得ば幸福これに過ぎず」といふ。禪師聽き終つて大聲一番、

「汝は何者ぞ。」

といふ。信茂、聲に應じて、

「武士でござる。」

「ナニ武士とな、武士には武士の道がある。君の爲に忠勤を抽んで、事あれば身を鋒刃に委すれば足る。何の暇あつてか、餘道に心を勞する。汝、若し武士ならば山伏士か野伏士か。」

信茂、怒りを忍びて更に教へを請ふ。禪師、輕侮の意を示していふ、

「まだソナナことをいふか、山伏野伏士は人間の仲間ぢやが、汝の如きは鯉節ぐらゐであらう

……鯉節なら臺所の用に立つが、世間の用に立たぬ汝の如きは食ひ潰しである。」

忍びに忍びし信茂の堪忍袋も、今は破れて、

「食ひ潰しとは何でござる。」

「食ひ潰しだから食ひ潰しと申したのぢや。」

と、禪師の答ふるや否や、

「已れツ。」

と云ひさま、鞆を拂ひし三尺の秋水、眞向に切り下げんとするに、禪師は驚いて逃げ廻り、

「恐ろしやな、これが地獄。」

此の一言に。さては教示を垂れたまひしかと冷汗背に流れ、刃を収めて低頭其罪を謝せば、禪師は平然として、

「これで極樂。」

地獄遠きにあらず汝の心にある。極樂何ぞ十萬億土を尋ねん、唯心の彌陀己心の淨土は汝の前にあり。有りといふも心を離れず、無しといふも亦其心のみ。

靈魂と死

靈魂の有無は先づ靈魂そのもの、解釋如何に立脚するにあらずんば、容易に解答を與へ難し。若し靈魂を以て原始人類の想像したるが如く火の如く風の如き一個の形體を有するものにして時々身外に脱出するものとせんか、吾等は之を現代の生理學に問うて、かゝるものゝ存在を否定せざるを得ざるも、之を以て吾等が精神作用の中樞とせんか、吾等は彼のヘッケルが「若し心靈、精靈又は魂魄なる多様の概念を狹義に解釋し、之を以て高等なる精神の活動なりとせば、

吾等は我が人類及び他の哺乳動物に於ける心靈の器管を以て大脳皮中フロネーテンを包括しフロネマ細胞より構成せらるゝ部分なりと認めんとす」てふ言に傾聴せざるを得ず。然れども此の意味の靈魂は死後に於て永續せらるべきにあらず。ヘッケルはいふ、「此のフロネマが思想の器管たるは、眼が視力の器管たり心臟が血液循環の中樞器管たると其の意義相同じく、此の器管の破壊すると共に其の活動も亦消滅するなり」と。身心もと不二、内より見れば皆心ならざるはなけれど、外より見れば是れ皆身。身の生理的體制ありて心の活動はあり。此身を離れて此心なく、此心を離れて此身なし。此の二者もとより分離すべからざれば、死後此の身體の壊滅して靈魂のみ存在せりとは推理し能はざることにあらずや。此の二者を分離し靈魂を以て肉體を離れても、獨立して能く感覺し思考し行動する非物質的のものなりとせる思想は長く世人の信仰を繋ぎたれど、死は決して彼等の想像するが如く靈魂の脱出にあらずして生活力の喪失なり。吾等が生時に於ては我が身心は絶えず外界の作用に對して調整を試み、食物の同化老廢物の排泄、酸素の吸入、炭酸瓦斯の呼出、其他運動感覺等の作用を營める一定の體制を有

したれど、此の體制破れ、此の活力を失はるゝに至りて、此に死なる現象を開始したるのみ。

死は斷滅か

體制破れて我といふ身體なく、活力失せて我心なるものゝ殘存するにあらざるも、死は一切の終りにあらず。此の體制を組み立てたる原形質は依然として存し、これと表裏せる個々の活力は之を有す。我が形體は變化すべし、しかも全く斷滅したるにあらず、物質の不滅なるが如く不滅に、勢力の恆存なるが如くに恆存なり。調整せられたる我身の體制は亡び、統一せられたる我心の活動は止みぬ。されど其物と力とは終に亡ぶことなく、止む時なし。吾等の身心の不滅なるは之のみにあらず、親より子、子より孫と傳へらるゝ一種の繼續は實に吾等の身心を永久に傳ふるものにあらずや。生前死後に互りて久遠の昔より永劫の未來に傳はりて滅することなし。更に見よ、吾等が此世に於ける行動は永く社會に印して心より心に傳はる。個人

に死して社會に生くる志士仁人の芳躰は之を示して餘りあるにあらずや。

因果相續

吾等が死後に遺るものは、物理學的若くは生物學的の繼續のみにはあらず。吾等が此世に遺せる足跡は天地と俱に消ゆることなく、吾等が此世に行へる一舉一動も亦無窮に傳へられて因果より果を生み、果より因を産して終に斷ゆることなし。燃焼せられたる石炭は灰となり了るも、其間に起されたる力は能く水をして湯たらしめ、湯をして蒸氣たらしむ。水は死して湯となり、湯、死して蒸氣となる。蒸氣は消散し盡すも、其間に汽車は幾百里を走りたるにあらずや。氣盡きて車止まるも、乗りたる客は既に遠きに達せり。吾等の言動も猶且つ此の如く精到に因果關係を質さんか、一言の微一行の細といへども、形は變じ姿は異なるとも、斷じて滅するものにあらず、誰か之を想うて肅然として襟を正さざるものあらん。

死後の靈魂

死は人情の最も厭ふ所、當然免るべからざることとは知りながらも尙一日も長く生存せんことを欲し、死しても亦其の存續を考へずんば無限の寂寥を感ず。死後生活の信仰は人の至情より出で、延いて現世の生活に影響すること少からず。されど又理に合せんとする要求は、初めは生時と異ならざる個體我の存するとせしものも、終に細心の説を立て、肉眼に見る能はざるほどの微細の身體存せりとす。印度の僧侶哲學の如きは即ち之にして、吾等の肉體は現に見らるゝ如き龜身の外に細身の存在して輪廻轉生すべきをいひ、其の細身を説いては心的知覺なる大と心的執着なる我慢と、色聲香味觸の五より成るものにして其體頗る微細にして見る能はざれど、手足顔面腹背等の形態を有し、龜身は死によつて腐敗すれども、細身は死と共に滅するなしと説く。原始佛教に於ても、經量部に於ては細意識なるものを立て、前生より後生に通ずとし、小乗有部に於ては人類生死の状態を四期に分ちて、

(一) 本有 生より死に至るの間。

(二) 死有 將に死せんとする一刹那。

(三) 中有 死して未だ生れざる間。

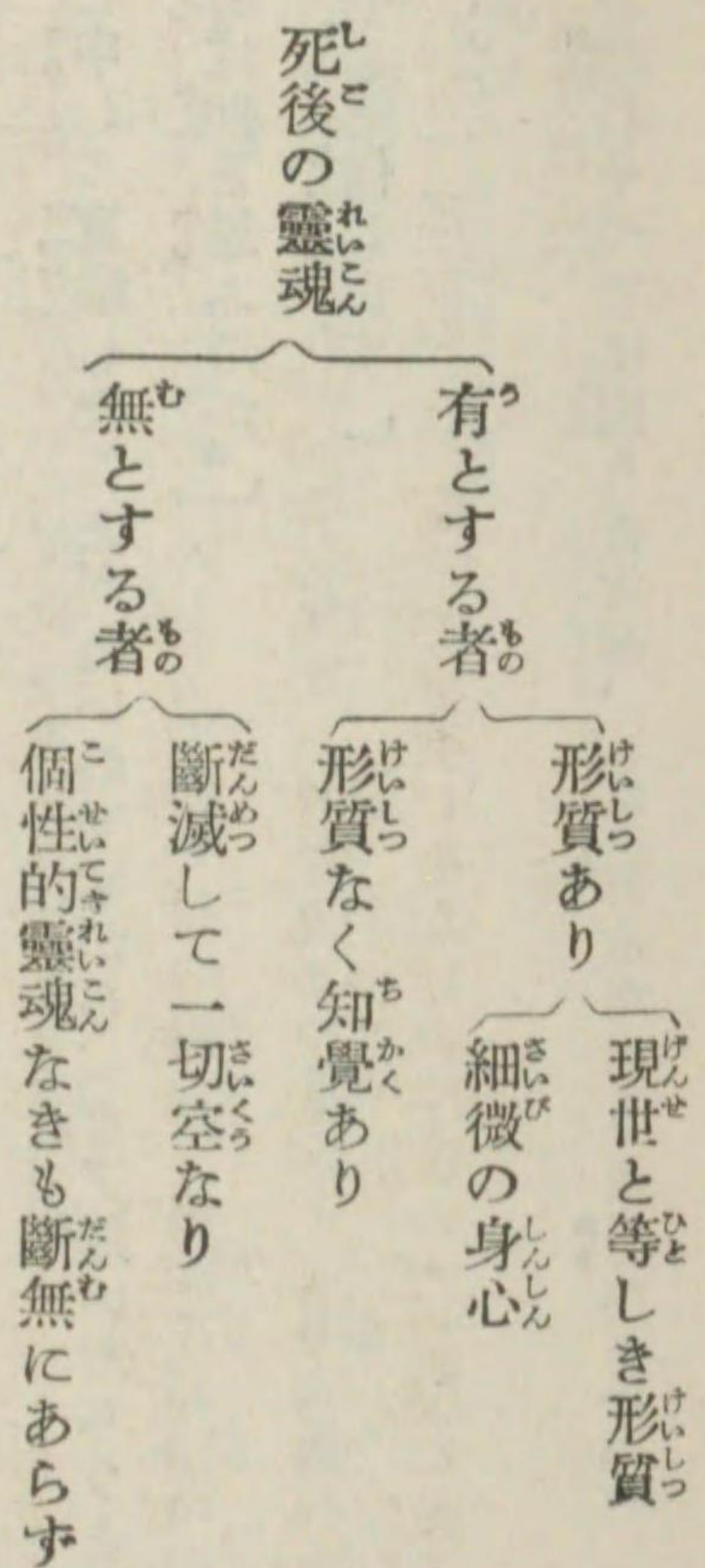
(四) 生有 將に生れんとする一刹那。

とす。中有の心身は微細にして見る能はず、香を以て食とすといふ。幽靈の觀念は此の中有の思想と關聯す。而して其の生死に於ては六道輪廻の説を立て、行爲の善惡により天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄等の境界に轉生すといふ。しかも其の轉生後に於ては前生の記憶、悉く忘失せらると説き、これを隔生即忘といふ。希臘には死者の生れんとするや、「忘れ川の」水を呑みて前世のことを忘却するとの神話あり。哲學的に思索を運らすものは、或は之を心的分子とし、或は個々の心識以外に大なる心を立て、之に没入すといひ、時に又吾等は生前に於ては全く睡眠の状態にあり、生時は醒睡相半し、死によつて全く覺醒の域に入るといひ、幽玄微妙を究め、佛教も亦小乗より大乘に進みては、心を論ずること益々精緻にして阿賴耶識以上に

如來藏心を説き、總該萬有心を語り、庵摩羅識を立て、個々の靈魂は其の現相にして、別に不生不滅にして、活潑潑地なる天地の大靈あるをいふ。靈魂の問題は終に天地の心に想到せざるを得ず。天地の大靈として誰か又不生不滅を疑はん。

靈魂説の歸趣

死後の靈魂に關する諸説は區々たりと雖も、試みに東西古今の學説を検するに、其の期する所は、死後靈魂有りとするものと無しとするものにして、有りとするものゝ中にも形質ありとするものと知覺のみありとするものとの別あり。其の形質ありとするものも、現世の肉體と同じとするものと、細微なるものとするものゝ中にも、無とするものゝ中にも、一切皆空、何の有るなしとするものと、個性的靈魂こそなければ宇宙の大意識に没入すといふものとありて、これを表示すれば、



の如しと雖も、他人の死は我が實驗を資せず、現在の我を以ては、我なるものゝ死後を経験し得べきにあらざれば、其の知られざるや一。近世の大哲學者カントの死後の問題は經驗を超越したれば純粹理性に於ては其の存在を證明する能はざれど、實踐理性に於ては是れ有りとするにあらざれば道德の基礎に不充足を感じずと云へるに多大の興趣を感じざるを得ず。永久の生命に關する信仰は人生の活力。唯だ之をして迷妄に陥らしめざるが、先覺者の職分にあらずなきか。

雨傘の用意

木戸孝允の養子正次郎、曾て宮城時助と未來生活の有無に就いて激論す。孝允これを聞いて先づ正次郎に問ふ、

「汝は有るといふのか、無いといふのか。」

「ハイ無いと存じます。」

「屹度無いと云ふのか。」

「屹度と申して實驗したことがないので、まア無いだらうと思ふのです。」

「宮城君は何と思ふのか。」

「私は有ると信じます。」

「屹度か。」

「屹度と仰しやつては困りますが、まア有るだらうと思ひます。」

「それでは兩人とも、だらう議論だネ。」

「左様いへば、そんなものです。」

「そんなら今外へ出ようとするのに、空が曇つて居るで、雨が降るだらうか、降らぬだらうかとの争ひと同じやうなものだ……ソコ此の場合、お前方は雨が降ると決めて傘の用意をして行くか、降らぬと決めて傘も持たずに出るか何うか。」

「それは降ると決めて傘の用意をして参ります。」

「そんなら有ると決めて地獄へ落ちぬ用意が肝要ぢやないか。」

こは傳聞の一話なれど、此事若し眞なりとせば木戸孝允は人生觀に於て確に一隻眼を有するもの。死後の問題は死後の問題にあらずして現在の問題なり。極樂地獄の説は常に現在道徳と因果的關係を有す。現在に於ける我が行動にして俯仰天地に恥ぢずんば地獄ありと雖も何の恐るゝ所かあらん。傘は手にあり、降雨また何かあらん。

妙好人

死は理論にあらずして事實なり。如何に理を論ずること精細なるも、此の事實に當つて迷ふ所なきにあらずんば實社會と何の渉るなし。吾等は無神論者が其死に當りて、思はずも「神よ」と絶叫したりてふ一話に無限の興趣を感ず。これに比しては一文不知の田夫野人が未來を信ずることに於て何の煩悶なきを羨まざるを得ず。讚州高松に與吉といへる妙好人あり。彼は目に一丁字なけれど佛を信すること深く、未來は佛の力に頼りて極樂淨土に往生すべきを信じて疑はず、其の客舎に病を得て死に瀕するや、左右の人の「氣の毒に、歸りたからうに。」といふに、與吉は平然として、「いや、何處で死んでも阿彌陀様の御側に行くのだから、かまひませぬ。」と。かくて彼は莞爾として逝けり。彼の法然上人が配流に遇ひたまひし時、人に與へて、

露の身は此處彼處にて消えぬとも

こゝろは同じ花のうてなぞ

と詠みたまひしと其心を一にせるものにあらずや。若し夫れ死生一如の理を體得するものに至つては、又別趣の存するを見る。

生死透斷

寄せては返す波に去來の相あるも、水に生滅なきが如く、死生は唯だ之れ波、何をか喜び何をか悲しまんとは、少しく心を理の上に運らすものゝ感じ得る所なるも、生死交謝の時、能く此の覺悟を持續し得るもの果して幾人ぞ。烏丸光廣卿は文學の雄。しかも其の死生の間に於て自から釋然たるものあり。死に臨みていふ、

涅槃生死。昨夢驚回。快活快活。走却香臺。

香臺を走却して何れの處にか行く。寂々として眠るが如く、呼吸絶えて死すること多時、忽

ち眼を開いていふ、「我、未だ官を辭せず、擅に冥府に赴くべからず」と。急に人を馳せて之を奏せしめ、復寂然として逝く。黄蘗の即非、臨終に筆を執り、

生如是。 死如是。 坐三斷生死關。 解三破沒巴鼻。

書き終りて茗を啜り、「快哉」と呼んで香烟の間に寂す。生も如是。死も如是。是の如きに至つて生死真に一如、風靜にして水波動かざるの觀あり。

祝杯

「如何なる眞理も人生と何の相渉るなくんば、何等の價値をも有せず」といへる實際主義者の言は死生の問題に於て大に味ふべきものあり。

死後の想像は現世を戒飾し、一如の感は生死の繫縛を離る。戒飾せらるゝが故に一言の微も之を慎み、繫縛を離るゝが故に生死以上に着眼すべし。生くべくんば生き、死すべくんば死す。大丈夫眼中死生なし唯だ道あるのみ。其生何の爲ぞ、「君子一日生くれば一日世に利あり」。其

死何の爲ぞ、「死する時に死せざれば死に優るの恥あり」。此生惜しまざるべからず、此死辭するに足らず。清き心は清き未來を産み、穢れたる心は穢れたる未來を現す。其死來るの時、汝徐ろに其の生涯を追想し來つて彼の羅馬第一の皇帝たりしオーガスチンが、自己の生涯に爲せる事業を聽き畢りて「祝杯！」と叫び得たる如きものあらば汝の當來は祝福せられん。

世の心

社會の心

人皆心あり、各々其の趣向を同じうせず。しかも異中同あり。相集つて社會を成す。社會は心と心との集團、而して其の集つて成れるものは又個々の心と同じからず。個々の心は社會の心に入り、社會の心は個々の心を制し、相映發して、因となり、果となり、一鏡に萬鏡を收め、萬鏡に一鏡を含むが如く、鏡々照破して個々の心と異にして同、同にして異なる社會意識 (Social Consciousness) 又は社會心 (Social mind) なるものを生ず。自細自縛、自から造りて自から脱する能はず。浮世の義理に身を苦め、世間の手前に心を勞す。面白き世態、奇なるは人情。しかも此心は遠き昔より傳はり來りて牢として抜くべからず、廣き集團に行はれて獨り離れ難し。習慣はその成形、儀禮はその實現。吾等は實に其中に壓迫せらる。

社會の心と個人の心

個人の心より成る社會の心は、又個人の心の如く理智あり、情意あり。理智の判斷の共通に加へられては輿論となりて人を動かし、個々の人心を征服して翕然として之に赴かしめ、苟くも之に反するものは之を社會の埒外に脱出せしめずんば止まず。情意の働きとなつては一齊に喜怒し、哀樂し、喜ばざるものは當該社會の人にあらずといひ、悲しまざるものは没人情漢として度外視して、毫も各人特殊の個々の事情を顧みず。而して又個々の各人も其の共通感情に暗示せられては、全く自己の事情を忘却して之に喜怒し哀樂す。世を擧げて凄慘の氣に襲はれ、世を擧げて歡樂の情に満つ。感染最も速かにして傳播頗る早し。

國民性、民族性

人の集團一にあらず、等しく社會といふ小あり大あり。一郷一村も一社會なり、一國一郡も

一社會なり。廣くいへば世界も亦一社會なれど、吾等が生命財産自由の保障せられて棲息し得るは國家なる體制を有せる社會に由るが故に、利害關係最も密にして其の思想感情の共通も一層痛切に、こゝに國民性なるものを形成す。殊に其の國家が同一民族の上に成り、同一歴史を有する國民の集團なるに於ては其の共通いよく多く、更に其の國家が長く其の領土と不離の關係を有し、山川風土の影響相同じき住民を有するに於ては、一種抜くべからざる社會我を生じ、他の民族、他の國家、他の土地と大に異なるものあるを見るに至る。大體の色彩に於ても、東洋人と西洋人と其の性情の異なるものあるは見難きにあらず、同じ西洋人の中にもスラブ民族の氣風と、ゲルマン民族の性情と、ラテン民族の好尚とは相同じからず、同じゲルマン民族に列せらるゝとも久しく大陸に棲息せし高地ゲルマン族なる獨逸國民と、夙く海島に出でたる低地ゲルマン族たる英吉利國民との頗る異なるは何人も目睹する所。等しく東洋といふとも、支那民族と我が日本民族とは全然趣を同じうせざるものあり。民族、地理、歴史の三者は實に國民性をして異ならしむる所以。同じ基督教にてもラテンは多く加特力教に歸

し、ゲルマンは多く新教に趨り、スラブは多く希臘教に赴き、等しく共和政體なるも、米合衆國民は其の大統領を見る我友の如く、佛蘭西は公選せられたる帝王の如きもの、此の國民性を見、民族性を察すべきにあらずや。

血より傳はる

人口の増加と共に民族の心は血より血に傳はりて二は四となり四は八となる幾何級數を以て擴がり、父より子、子より孫、孫より曾孫と傳へて個々の人心の奥底に潛み、幼時より耳にせる傳説は此心を培ひ、長じて讀む所の歴史は此心を養ひ、或は有意識的に或は無意識的に心より心に傳はりて此の民族性を助長す。同じ血に成れる偉人の先蹤は我を勵まし、同じ血に成れる民族の興亡は我を喜怒せしめて、終に民族共通の思想感情となりて表現せらる。

地 と 人

民族統一の思想は、現代に磅礴たるものありと雖も、現代の國家は必ずしも同一血族によりてのみ組織せられず。土地を劃して領域を定め、其の區劃内の住民を統治す。しかも此の同一土地に棲息せる一事は又其の住民の心を共通せしむるに偉大の力を有す。海洋の一孤島に棲めるものゝ思想と、廣漠たる大陸に棲めるものゝ思想とは同じからず。巍峨たる山脈を以て圍まれたる國民の心と淼茫たる海洋に面せる國民の心とは異なり、熱帯國民の氣質と寒帯國民の氣質とは其趣を一にせず、雨多き地、雨少き地、地震ある國、地震なき國、皆其の感情を同じうせざるもの、其の一面にはこれら自然現象を一にせるものゝ共通の心を有せるを示すものにあらずや。之に加ふるに國家が同一統治を彼等に試みんか、彼等は其の利害關係を一にする上に於て、又其の統治の久しければ久しきだけ因襲性を爲して其の共通感情を助長し、地理的に其の國土を愛するの心は政治的に其の國家を想ふの心と結合して一旦事ある時には呼應して立つの共通性を造る。

國民性の徹底

我が國民性の徹底せるは、嘗に其の民族を同じうするのみならず、其の統治を同じうし、血統の中心は即ち政權の中心にして、義は則ち君臣にして情は父子たる美風を有する上に、金匱無缺の此の大和島根は建國以來、外侮を受けざる歴史を有し、二千六百有餘年の久しき共同生活は共通の思想、共通の感情を傳へ傳へて其の根本に於て奈何ともすべからざる特異性を有す。頼山陽、曾て岸岸狗の畫を力士某に與へて其の化粧廻しと爲さしむ。岸狗以て自己の畫を侮辱するものとし、山陽の書を得て、藝妓に與へ、これを腰巻となさしめて報復する所あらんとし、人を介して書を山陽に囑す。山陽快諾、直ちに筆を執つて「天照皇太神」と書す。岸狗、怒れども以て奈何ともする能はず。此の奈何ともする能はざる所に國民性の發露を見るにあらずや。もとより我が民族とて純粹なる大和民族のみにはあらず、早く姓氏錄に皇別、神別、蕃別の別ありて蝦夷の血も熊襲の血も、南洋土民の血も、支那民族の血も混じたりと雖も、そは

悉く山陽の「花にあくる春のみよしの見しならば、唐土人もこま人も、大和心になりぬべし」といへるが如く同化され終りしなり。

習俗

類を以て集るか、集つて類化せらるゝか、一國、一國の風あり、一郷、一郷の俗を存し、他の見て以て奇とすることも、平然として之を行つて何の怪しむなし。我が國民の頭を下げ腰を屈するを以て禮とするは、自から異とせざるも、西藏人の兩手の拇指を突き出し舌を出すを以て禮とし、南洋土蕃の中には鼻と鼻とを突き合して禮とするものあるを聞かば、何人も失笑を禁じ能はざるべし。習俗は所によりて變るのみならず、亦時によりて變化し、五十年前までは見て以て尋常となしたりしチョン髷の今日は奇態に感ぜらるゝも亦此類にあらずや。

模倣

人は模倣の動物なり、社會の心理は之によりて結束せらる。言語も模倣、服装も模倣、右の手に箸を持ち左の手に茶碗を持つも亦模倣。吾等の生活の大部分は模倣に支配せらる。習慣といひ儀禮といふも過去の模倣。社會は模倣を強要し、同一色彩を以て之を塗抹し去らんとす。されど唯だ模倣のみあつて毫も發明の之を新たにするなくんば、社會は萎靡し沈滞して終に死滅せざるを得ず。新奇を好む人心は、此の模倣の中より又新たなる發明を要求し、其の發明せられたることの時好に投ぜんか、又これを模倣して平凡ならしむ。平凡なれば飽き、飽けば又新らしきを求め、求め得れば又これに模倣す。まことタルドの教へたる如く模倣と發明とは社會推移の状態にして、發明は先覺の士となり、模倣は凡俗の衆に行はる。發明は即ち社會の個人化にして模倣は社會の個人化。世諺にいふ「初めて海鼠を食ひし男と、初めて白粉を塗りし女は頗る大膽なるものなりしならん」と。海中にある彼の醜動物、取つて之を食ふは非常の膽勇ありしものならむ。しかも之を食うて其味の美なるや、甲傳へ乙倣ひ、終に何人も怪しまざるに至り、初めて顔面に白粉を塗抹して衆人の前に出づ、頗る大膽の女ならざるべからず、し

かも色の白きは七難隠す、其美を見ては虚榮に富める女の忽ちに之を模倣するあり、傳へ傳へて通常のことゝなる。かくてはならじと、白中に紅を點する口紅を用ふるあれば、又模倣して奇とせざるに至る。世はかくて移り行き、一面に模倣を強要しつゝ、他面に新らしきを求む。模倣せざれば時代に遅れ、模倣のみを事とせば進むに由なし。

無意義の喝采

辯士、壇上に豪語すれば聴衆悉く拍手す。試みに其の一々に就いて拍手の理由を質せよ。彼悉く辯士の言に贊して然るにあらず、彼等は前後左右の人々に暗示せられ、何の意識もなく其の爲せるがまゝを模倣したるなり。人には此の暗示享受性あり、無意識的模倣あり。社會の色彩の同化せらるるもの多く之に由る。

時好に投ず

初めは便なりとして模倣したるものゝ、馴れては其の尙足らざるあるを思ひ、初めは美なりとして襲用したりしことも、漸次に其の缺點を見出ししては、完備を求むる人心の更に之以上のものを望み、望み通りには翕然として一世を風靡するの流行品となり、模倣し盡さるゝも尙飽くなき慾求の、不備なる點を認めては、或は前に行はれしものゝ回顧となりて此に反動の勢ひを示し、又それに優れるものゝ出でては、忽ちに新に就く。流れ行く水の如き世の人の心、大波小波の寄せては返す如き人心の移動は、大なる勢力となつて其中に漂へる個人を席卷し去る。能く此の氣運を察して以て時好に投ずべく、時好に投じて以て流行の源泉を造るべし。

流行の傳播

流行の源頭は個人若くは二三の人に發して、初めは少數者の意識的模倣となり、終には傳播して多數の無意識的模倣となりて時代の好尙を支配す。而して其の傳播の徑路は水の低きに就くが如く、上の好む所、下これより甚だしきはなし。上より傳はりて下に及び、都會より出で

て地方に流れ、文明より發して野蠻に行く。時に下層の風習の上流に及び、地方の好尚の都會を支配し、野蠻國の慣行の文明に傳染することあらざるも、こは推移の原則にあらずして、社會の變調に萌せる流行の墮落なり。彼の諷刺に妙を得たる綠雨の江戸趣味の蹂躪せらるゝを慨きて、されば流行の恐ろしきことは、これにつれて昔、乞食の唄なりしものをも、今は玉簾の内やゆかしき高樓にて憚りなく唄ふなり」といへるは流行の健全なる徑路にはあらず。

上の眞似

人皆向上の心あり。我より勝れたるもの、優れるものに倣はんとす。此に於て上に立つものは滿目注視の焦點となつて、其の好尚は下移して一般に普及し、權力あるものゝ行動は權を力なき階級に垂れ、成功せるものゝ徑路は成功せざる多くの人々の辿らんとする所となり、一物時好に投ずれば模擬百出し、一事世の稱讚を受ければ萬人これを學ぶ。弊は之に伴ふべし。しかも是れ惡事にあらず、世はかくて進み行くなり。

上る時は下る

世の推移には動あり反動あり。反動によつて新に動き、動くによつて復反動を生ず。しかも其の新に動くものは先の動と同じからず、これより來る反動も亦前と異なり、彼のヘーゲルのいへる如き正反合の三段的發展となり、正より反、反より合、合より正、正より又反、かくて正反の合となりて又正より反、反より合となり、かくて究竟の目的とする完全に進み行く。動中靜あり、靜中動あり。大なる波、小なる波。大なるものには大なる去來あり、小なるものには小なる生滅あり。世に風猿の詞なるものあり。

登れ、のぼる時はくだる、くだれ、くだる時は上る。

すがりゐる竿に手足も括られて

おのれ動くと思ふ猿かな

上る時は下り、下る時は上る。一起一伏は浮世の波。正あり反あるは社會の徑路。能く此の

氣運を看取するもの以て先覺の士と名づくべきか。しかも此の動靜、起伏、生滅、去來、其正といひ反といふも皆是れ宇宙大意識の顯現、おのれ動くと思ふは大なる誤りなり。

社會の四季

年齢の個人の心に影響するは争ふべからず、希望に満てる青年の心と追懷の情轉た切なる老人の心とは同じからず。青年は春の如く、壯年は夏の如く、中年は秋の如く、老人は冬にも似たり。これ唯だ個人の上のみならず、社會も亦此の如し。希臘の文明の花の如くに美を呈せしは歐洲文明の春にも喩へつべく、羅馬帝國の武威八紘に振ひたるを夏に比すべくんば、西羅馬帝國滅亡後の歐洲は秋風肅殺として終に滿目荒涼たる冬景色にも似たる暗黒時代となり、かくて一陽來復して宗教改革となり、文藝復興となりて近代文明の曙光は此間より洩れぬとは先輩の既にいふ所。これを我國に見るも、七重八重咲く花の匂ふが如く今盛りなりける奈良朝より大宮人は櫻かざして今日も暮しつる平安朝は、實に日本文明の春なりし。藤原氏の榮華の夢

覺めて平家一たび權を得しも、そは束の間にて南海の春吹く風と共に散り行きて、鎌倉山の蜃月夜、柳營、兵馬の權を收めしより、相模太郎、膽斗の如く蒙古の大軍を叱咤し了りしは炎帝威を弄する夏にも比すべきか、南北朝を経て足利の代となり干戈際なく、野も山も枯れ果てしは秋の景色にも似たらずや。徳川氏の國を鎖して三百年の太平を致せしは冬籠りの時代とも見らるべし。冬深うして青春の機漸く動き、皚々たる雪の下に萌え出づる野邊の草の乾坤一轉して明治の世となりしは、二たび花咲く春となりしにあらすや。時代々々の思想は之を證し、其の時々の社會狀態は之を示す。

社會の理想

完全を求めつゝ進み行く人の世は、吾等の生活を層一層幸福ならしめんとて、過去幾千年、吾等の祖先は努力して吾等が生活を壓迫する所の自然を克服し、科學の進歩、機械の發明となりて幾多の利便を現代に遺し、共同生活の圓滿を計らんとて道義の唱道となり、法律の制定

となつて刻一刻、社會の機關は整備せられ、世界の人道を開展せらる。今の昔と異なるもの皆去にし人々の心の表現、先人努力の結果なり。所謂文明の發達なるもの亦これに外ならず。文明の定義や多端、或は自然の物質及び勢力の利用とし、或は道徳的生活の發展なりといふも、要は彼のマッケンジーが人間の幸福として算せし自然の克服、社會機關の整備、個人人格の開展を目的とするにあるは何人も否む能はず、されど未だ完全に此の幸福の實現せられたるにあらざれば、求めて止まざる向上の心に策ちて其の實現を計ること、吾等が理想の開顯にして移り行く社會心意の目標なれ。吾等は眞善美を求む、而して社會心意も之に慄る。これ豈宇宙の大意識より逆り出でたる人類の使命にあらずや。

相變る

變遷によつて進歩する世に「相變らず」の一語を以て目出たき事の極みとしたる徳川三百年は秩序を維持するに於ては功ありしとはいへ、大勢に反したる此の標語は社會をして沈滞せしめ

相變り行くべき世をして不振に陥らしめしは事實なり。これが反動として起り維新の初めは開化の語を眞向に振り翳し「開けない」の一語に無限の侮蔑を含ませ刷新の大業は成りぬ。進みては退くを忘るゝ人の心は、此語の何れにも利弊は伴ひしとは云へ、變り行く世を「相變らず」に止めんと夢みたるは大なる失敗たるを免れず。

成語の力

群衆の心は結晶して一個の成語となり、これに多大の力を附與して偶像の如き權威を附與す。勤王攘夷の一語は倒幕を助長し、自由民權の聲は國會開設の氣運を促し、憲政擁護の名の下には群衆雲の如くに集る。成語の人を動かすや頗る大。ルボンいふ、政治家の第一要義は群衆の舊來の名稱の儘にて最早忍ぶこと能はざる事物を装ふに評判よき言語、若くは少くとも惡感を挑發することなき言語を以てするにありと。成語轉換の秘訣を知るものは以て能く群衆を統御すべきか。群衆は感激性に富む。苟も其の成語にして彼等の嗜好に投ぜんか、驚然として之に

進む。進むこと速かなるが故に倦むことも亦早く、小蹉跎に絶望し、小失敗に落膽す。此時に當りて更に新なる成語を拉し來つて之を獎ますあらんか、彼等は復猛乎として起つ。所詮群衆の理解力は簡單にして明瞭なるものを求むれば、之を動かすの思想も亦絶對的且つ非讓歩的にして其の排他的なるに於て功を奏する多し。如何に高尚なりとも難解なるものは彼等の心に響かず、如何に妥當なりとも、趣味に合せざるものには之に遠ざからんとす、通俗卑近は群衆の心を得るの一要件、陽春白雪和するもの少く、鄙歌却つて傳播の速かなるものあるも皆これに由る。群衆の指導も亦難い哉。

群衆の共通精神

特殊状態に於ける人と人との集團は、此に集合の心意なるものを生じて各個人の特殊性は没却せられて一致せる一個の共通精神となる。已に是れ共通精神なり、此故に各個人の意識的個性は潛みて各個人の類似共通する無意識的部分勢ひを得るが故に、理性は影を隠して感情のみ昂り、思慮を缺き、責任の念を失ひ、暗示を感受すること速かにして、動かされ易く、變じ易く、信じ易く、怒り易し。故に欺かれ易しと雖も、一たび其の虚偽なるを看破せんか、反抗の情も亦甚だしく、激しては利害を忘れ、感じては身をも抛つ。然れども、もと個性を没却するが故に、自から動くことは稀にして、多く之を動かすの指導者を待つ。指導者一火花を施して群衆の心は爆然として發す。一揆暴動多く此の心的状態に成る。

暴動の鎮撫

群衆は指導者を力とし、統率者を頼みとし、終に偶像の如くに之を崇拜するに至る。故に其の指導者にして倒れ、其の統率者にして假面の剥がるゝあらんか、群衆の心は之より離れ、潛みたる個々の意識は頭を擡げて、其の集合心意は終に解散を餘儀なくせらる。暴動の鎮撫は首謀者の物色にあれど、事の若し起るべくして起りしものならんか、第一の首謀者倒れても、更に第二第三の首謀者を出して手を變へ品を變へて其の目的を貫徹せざれば止まされど、何の理

由なき煽動に出でたるものは、煽動者の消失と共に、嵐の吹きし跡の如くに消え去る。しかも尚ほ置々たるものあれば情力のみ顧みるに足らざれども、焼け木杭の復野心家の點火を受け易ければ、群衆を群衆として理解せしめず、これを個々に引き離して説得し見よ。集つては鈍き理解力も、個々の心は能く之を領會す。これ亦暴動鎮撫の一法なり。

非理法權天

古來補正成の旗印として「非理法權天」の五文字を傳ふ。語の出處は之を審かにする能はざるも、其意は取つて以て社會の心意を説明するに足る。如何に粉飾を巧みにするとも非は理に勝たず、偽は眞に破れざるを得ず。盲動に流れ易き群衆の、時に野心家の煽動に動かさるゝとも、時過ぎては反省の機の内にも熟せざるを得ず。よし妙辯巧辭を以て糊塗するものありとも、假面は終に剝がれ、眞相は終に暴露せらる。誇張せられたる廣告の能く世人を眩惑するありとも、實質の之に伴はざらんか、後には嘲笑の料となる。欺かるゝは一時、動かさるゝは瞬間。

非は理に勝たず。然れども理も亦法に勝たず。法は最も完全なる社會結合たる國家の規制にして共同生活の保證、其の社會に公布せられたる以上は知と不知とに關せず、當該社會を羈絆するの力を有す、大石良雄の擧、如何に義なりとも國法は之を罪するを忘れず、佐倉宗吾の行動、如何に已むを得ざるに出づるとも、法は之を寛假する能はず。其の改廢は別個の手續きに屬し、其の行はるゝ間は社會は執行の權を抛たず。然れども其法の行はるゝは同一主權者の下に立つ國家社會の内にして、其の以外のものに及ばず。國と國との間にも亦國際法規の如きもの、定められて、相互に之を規制すると雖も、權力の前には行ふ能はず、國內の法も最大なる權力によつては時に蹂躪せらるゝを免れざる時代ありき。此に於て法も亦權に勝たず。されど此の權も天には勝つ能はず。天とは宇宙大意識の命令を遵守する人心秘奥の靈機と脈絡貫通する自然の大法。之に反しては如何なる法も改められざるを得ず、之に抗しては如何なる權力者も倒れざるを得ず。法に枉げられ權に服せらるゝとも、眞理の最後の勝利者たるは能く之に順適するに因る。時に汚隆あり、世に盛衰ありとも、そは一時的の現象にして、永久的なる理

想の追求は終に眞なるもの善なるもの美なるものをして勝たしめずんばならず。非は理に勝たす、理も時に法に勝たす、法も時に權に勝たざることもありとも、天は終に永久の勝利者たるの意に解して、此の五文字も亦多大の教訓を含めるを思ふ。

戦争論

圓滿を望み、平和を愛し、道徳的に開展せんとする社會、何が故に戦争なるものあるか。予少しく説あり、請ふ試みに之を論ぜん。

干戈を動かさずして太平を致す。これ人類の理想なりと雖も、其の實現までには尙多くの時日を要す。吾等が今日文明の德澤に浴し、生命、財産の安固を保障せられて生活し得る所以のものは、吾等が國家なる社會團體を形成し、其の權力によつて危害を豫防し、犯すものを制裁するあるが故に外ならず。若し此の組織が猛烈なる弱肉強食を制止するなく、人類をして無制限なる自由競争に放任するあらんか、吾等が生命財産は一日も安きことなく、強者は弱者を

屠り、其又強者も亦最強者の爲に蹂躪せらる。世は全くの修羅場たるべきに、人類必然の要求は、相團結して國家なるもの、萌芽を生じ、其の初めは弱者は強者の保護の下に安全を計り、其の安否悉く強者の意のまゝなりしが、かくては其の安否の覺束なく、終に比較的變化なき法律なるものによつて規定することとなり、其の法律も亦初めは二三權力あるもの、自由によつて定められしが、漸く進みては國民全體の意志によることとなりて現代の立憲的國家を成すに至りぬ。此に於て國民は自縛自縛、自己の協賛したりし法律によつて自己の行爲を束縛せられ、此の束縛によつて生命財産並に權利の安全を保障せらるゝに至り、苟も法を枉げ律に背くものあらんか、國家は之に下すに刑罰を以てして社會を修羅場より脱離せしめ、以て干戈を動かさずして太平の德澤に浴せしむ。しかも渾圓球上、國を立つるもの一にあらず、東西南北、各々過去の歴史と現在の領土とによりて其の團結を鞏固にし、各自法を立て律を制して其の統治の範圍を守り、甲の國は乙の國と接し、乙の國は又丙の國に鄰る。其の利害の相渉らざるに於ては、將軍塞外、羣衆を絶ちて暫く平和を守り得べきも一たび利害の衝突し、感情の行き

違ふ所あらんか、甲は乙を除かんとし、乙は丙を併せんとし、此に國と國との争鬪を生ず。國内の禍害は法律の威力これを除くべきも、其の統治權の到らざる他の國家の我に及ぼす禍害に至つては、法律を以て威を振ふに足らず。勢ひ干戈を動かして勝敗を兵刃の力に決し、鐵火相見えて邪正を鮮血の中に定めざるを得ず、殊に各國其の國情を異にし、休戚を同じうせず、道徳標準を別にし利害を共にせざるに於ては是れ以外に解決を求むるの方途あるなし。世進み人さかしくなりては、かゝることの人道と相背反するを思ひて成るべく事を平和の中に決せんとし國際法の規定となり、仲裁裁判の制となるも、此法の力の優れるものには應用し得べからず、此制も服せざるものに對しては兵火の外なきを以て、各國悉く同一主權者の下に隸屬して何の不服なき社會を現出するか、各國の權力皆均一せられて國に大小なく兵に強弱なき世の現れざる限り、戦争は人類社會より其跡を絶つ期なかるべし。しかも此の如きは人類本來の性情に反し、社會進歩の道程に悖る。人類に慾望あり、進歩は競争の裡より産出せらるゝ以上、戦争なき平和は望むべくもあらず。高山樗牛會て豪語していふ、「戦争は一種の競争のみ、たゞ

競争の器械として學術が知識を用ひ、商業が財貨を用ひる代りに、戦争は人命を用ふるのみ。(中略)吾等は戦争と名づくる一種の競争にのみ特別の罪惡ありと思惟するを欲せず」と。人を殺すを禁止せる國家は、之を犯すものに對して死刑を施して憚らず、他の自由を蹂躪するを禁止せる法律は、之に背けるものゝ自由を奪ふ。刑罰を以て罪惡と目すべからずんば戦争も亦必ずしも、しか云ふ能はざるか。呂氏春秋に曰く、「家に嚴父の怒管なくんば豎子嬰兒忽ち驕肆、國に刑罰なくんば百姓人民たちどころに不逞、天下誅伐なくんば諸侯牧伯俄に暴戾、故に怒管は家に偃すべからず、刑罰は國に偃すべからず、誅伐は天下に偃すべからず」と。武は止戈の義なり、干戈を止むるが爲に干戈を動かす。望む所は平和にあるも之を現出するが爲に戦争の餘儀なきあり。戦争は餘儀なきものにして好ましきものにあらず。好ましきものにあらずと雖も、これあつて以て平和を現出し得べしとせば、缺陷世界たる人生の已むなき現象と觀念せざるを得ず。然り、已むなき現象なりと觀念せざるを得ずと雖も、そは之によつて平和を贏ち得る場合に於てのみ、しか云はるゝにして戦争の爲の戦争、私慾の爲の戦争に對しては、これ殺

人の爲の殺人、掠奪の爲の虐殺にして斷じて社會の進歩發展と相容れざるもの、戦争論は又終に道德論たらざるを得ず。

世は進みつゝあり。何事に對しても其の禍害を除き利便を増長せしめんとする人智の發達と、罪惡を消除し善美を顯現せんとする理想の顯現は、此の戦争に於ても幾多の變遷を見たり。昔の攻略は全く帝王の野心より出でたるものなりき。彼の歴山大王が父王の覇業を見て、かくては朕の征服すべき土地なきに至らんとて法然として涙下りしといふは、昔の帝王の心情より迸り出でたる感慨にして、其の反面には彼の偉圖も、其の基く所は世界を征服して其威に誇らんとする野心に外ならざりしを語るの好適例にあらずや。此處に野心に出でたる攻略あれば、彼處に私情に出でたる復讐あり。萬民は唯だ其の犠牲となつて鮮血を流すに過ぎざりし。偶々其の然らざるものあるも、それは異宗教異民族に對する憎惡の感情によるものにして、もとより宇内の平和なぞいふ理想の含まるゝにはあらず。今の戦争は帝王戦争にあらずして國民戦争なり。國民は唯だ帝王の願使の下に盲從するにあらずして、各自其の動兵の理由を理解して

戦ふこととなり。既に動兵の理由を理解するを要す、戦ひ必ず名なかるべからず。而して其名とする所のものは平和にあり。平和を名とするにあらざれば以て民心を收攬すべからず。以て列國の同情を買ひ得へからず。列國皆これを非とす、我獨り戦はんとす、これ天下を敵とするもの、其の成敗利鈍逆め目睹すべし。故に巧みに外交攻略を利用し、且つ名を正しくして道義的に其の理由を示さんとす。これ又人心の自からなる要求を示すにあらずや。しかも外交の事多く利害の打算による。若し此の利害の打算より云へば、世に戦争ほど不經濟不利益なるはなし。大砲を一發すれば少くとも數千圓の金を費消し、一隻の軍艦を轟沈すれば幾千萬の金は空しく海底に沈む。今回の如き大戦争(歐洲戦争)をして、若し一年繼續するとせば、當該戰國は各自一年四十億乃至五十億の金を費消せざるべからずと算定せられ、此上に國內の生産力を奪ひ、商業を杜絶し、且つ金錢を以て算定し得ざる人命を犠牲に供す。利害に明かなる文明人の長く忍ぶべきことにあらず。平和の唱道の多く資本家の口によつて唱道せられ、戦争の阻止が經濟家の上に計畫せらるゝは、此の戦争の將來をして鮮血より脱却せしめんとする氣運なり

と見るも亦不當にあらじ。一面より微弱なりとも、道義、人道の聲の人を動かせる、少しく考慮を運らすもの、鮮血を神聖視する人道、殺戮を歓迎するの道義の存すべくもあらざるは、見易きの道理なれば、彼のトルストイの極端なる無抵抗主義は人生の事情と相容れずとするも平和の手段を以て列國の紛議を解決せんとする傾向は必然に生じ來つて、終に彼のルボンが云へる如く「歲月の力は此の戦争をして全く跡を絶ち、否、全く其の形態を變化せしめ、平和的事業の競争たるに至る」やも知るべからずと雖も、よし、此の如きを暫く遠き將來に置くも、人類が平和を愛好するの情は着々其の慘禍を縮少し其の範圍を制限せんとし、曾ては國家と國人とを分たす。すべて之を敵としたるものが今は戦鬪力なきものに對しては之を度外視するに至りし如き、敵としては其の戦鬪力を奪ひ、一たび之を奪へば個人として博愛仁慈の精神を以て接す。此の戦争の文明化せられ道義化せられしは、やがて殺傷以外に解決を求めんとする徑路なりとも見るべからざらんや。されど、これ戦争に於ける形態の變化のみ。之を以て戦争の全く絶滅せらるゝを期すべからず。斷訟の官衙に艸離々たりとも法は廢すべからず、司獄の壇

場に埃塵山を爲すとも刑は止むべからず、世如何に平かなりとも、武装は解くべからず。明教大師いふ、「兵は刑なり。仁に發して義を主とす。仁を以て亂を憫れみ、義を以て異を止む。暴を止むるが故に、相正して相亂れず、亂を憫れむが故に、生を圖りて殺を圖らず。是故に義征舉りて天下懷かずといふことなく、正刑行はれて天下順はずといふことなし」と。これ戦争の理想なり。此の理想に順適するものを義戦とし、これに背くものを暴戦とす。古の帝王戦争は多く領土侵略の上に出でたる暴戦なりし。今の國民戦争は多く自己存立の必要に迫られたるものにして義あり暴あり。自己發展の爲に妄りに兵を動かして他を侵犯せんとするものは暴なり。既に此暴ありて平和を攪亂す、これを伐つて干戈を止めしめんとするものは義なり。戦争必ずしも罪惡ならず、要は其の義と暴とを判つべし。義によつて立つ、膺懲に慘あり、誅伐に禍ありとも、山雨一過して山更に青きが如く、平和此の爲に克復せられ、人道此の爲に發展せんか、吾等は缺陷世界なる人生の常弊として暫く此の戦争の慘禍を寛容せんのみ。

戦争と人心

戦争は當該社會の利害休戚に關するが故に其の結果頗る固く、従つて其の共通感情は頗る鋭敏にして一勝一敗ある毎に相共に喜び相共に悲み、喜ぶ時は九天の上昇るが如く、悲しむ時は九地の下に沈むが如く、感情の變動頗る激甚にして、意氣の興奮しては殆ど敵國を呑むの感あるも、意氣の沮喪しては國も家も亡び行くが如く感ず。氣は力なり、沮喪しては進む能はず。興奮しては堅壘も妨ぐる能はず。理性影を潛めて徒らに感情の昂り、慈仁の風漸く姿を隠して残忍の野性勢ひを逞しうするは戦時の常、しかも尙其間に名之美なるものを求めんとする所に潛める心の力を認む。徳川家康の戦ひ破れて三河の大樹寺に入るや、登譽上人、徐ろに問うていふ、

「御若年より數度の戦ひ、敵を打亡ぼして何の爲にかしたまふ。」
家康答へて、

「武威を盛にして敵を打ち、終には城を乗取るときは、其の領地即ち歸服す、これ小なる勝なり。大度の武將は其の計略大にして爲す所も亦然り、然して勝つときは大國の主となりて、富、四海にわたり、威、世上に振ふ。」

上人莞爾として、

「富、四海に互り、威を世上に振ひて何の爲にかしたまふ。」

と云へば、家康、

「然る時は其家を興し父母の名を輝かし、其身は名を後代に止め、榮華を子孫に傳ふ、これ武功の大なるにあらすや。」

上人、重ねて、

「それ人身に貯ふる徳を以て萬人を司どりてこそ、其榮も久しからめ、勇力強盛を振うて人に勝つ時は、其利を保つこと久しからずして人に亡ぼさる。されば幸ひに天より受くるを第一とす。天より受けざるに己が計力にて討ち従へしは幾程ならずして衰ふ。これ非常の武力

にして却賊のことに候……天下を我物とし榮華を極めんために庶民を食り苦むるもの久しき理なし。太守何ぞ天下を平かにして百姓塗炭の苦を救はんために戦ひ給はざる。」
と。これより家康の心機一轉したるものありと傳ふ。

天地の心

天地の智識

天とは何ぞや、地とは何ぞや、人の目は能く天を望むべきも見るところに限りあり。人の足は地を離れざるも踏む所に限りあり。有限の觀察、有限の實驗を基礎として天地を知らんとす。其の悉さざる所ある、もとより疑ふべからず。昔人の見て以て天とする所は僅に彼が頭上を覆ひたる霄漢にして、其地とする所も亦僅に彼の知り得る限りのみ。然れども人智漸く進みて天空の大は想像せられ、社會次第に發達して我が棲む以外の土地との交通開かれ、曾て推定したりし外に多くの地あるを知りしも、其の感想は長く幼稚の域を脱せず、天よりも知り易き地に於ても山河の隔離、海洋の區劃は、西の者は東を知らず、東の者は西を知らず。道般學術の先進を以て誇る歐洲に於ても、中古にあつては亞細亞の東北部は殆ど魑魅の棲む國の如くに考察せ

られ、アフリカの南部は地の端と想像せられ、南北アメリカの如き大陸の存在は夢想だもすることなかりき。地球の全部が吾等の前に展開せられ、五大洲の明白に知悉せられたるは最近の事に屬し、兩極地方は探検尙未だ到らざるものありとはいへ、地の概念は明かとなりしも、天に至りては實際調査の困難なるが爲に久しく想像の虜となりて印度に須彌山の説ありて地を説明し、此の地上のもの竝に初級の天を以て欲界とし、これに六、其上を色界として十八、更に其上に無色界に屬するもの九天あり、合せて三十三天を分類し、支那には九重の天とて、太陰天、辰星天、太白天、太陽天、熒惑天、歲星天、鎮星天、恆星天、宗動天の説あり。其の最高を以て地を距る六億四千七百三十三萬八千六百九十里を算す。悉く是れ推定のみ。近代科學の進歩は神が人類の爲に特に創造せられたりと信ぜられし此の地球も亦天體の一遊星として太陽に従屬するものたるに過ぎず。天界の王としたる太陽も亦獨り其權を擅にする能はずして自から八大遊星竝に多くの小遊星に圍繞せられつゝ茫々たる天空の僅に一隅を占むるに過ぎずして、天界には太陽と權を等しくする無數の恆星を有し、肉眼にても六七千を算すべく、直

徑一インチ半の對物レンズを有する望遠鏡にては十萬以上を見るべく、其鏡の精にして大なるに従ひ一億以上を算すべしといふ。かくて終に無限の感は此の空間の上に明かとなり、此に於て古代の天空を有限なる星界とする思想を排して宇宙の空間的に無限なることを示せり。

無始無終

天神、綸を垂れて海底の土を釣り、綸切れて海上に散布せりとしたる南洋の天地開闢談や、魔物イーミルの斃れて肉は平野となり骨は山岳となり、頭腦は中央に彷徨して空となれりてふスカンヂナピアの神話、混沌たる雞子の如く清きものは上りて天となり、濁れるものは下りて地となり、中に盤古氏を生じ、其氣は風雲となり、其聲は雷霆となり、兩眼は日月となり、四肢五體は四極五嶽となり、血液は江河となり、筋脈は地里、肌肉は田土となれりてふ傳説は、今信するものなく、久しく歐洲の思想界を支配せし神ありて六日にして天地を創造せりとの信仰も科學の前に力を失ひ、カント、ラプラス等の諸大家によつて星雲進化の説は發表せられ、

其の宇宙の太初は混沌たる氣體の凝結にして我が太陽系の如きも其の初めは非常に熱せられたる星雲として存せしが、此の星雲は自己の重力作用によりて自轉を生じて球狀となり、漸次熱を放散して冷却収縮し、収縮すると共に回轉の速度次第に増加し、遠心力の爲に赤道の部分膨脹して數重の瓦斯輪を生ずるに至り、此輪の分離して各自團結して獨立體となりしもの、即ち今日の諸遊星にして、其の中央の主要なる部分は太陽にして我が地球の如きは其の初めは熾熱せる瓦斯體なりしも漸次液體となり、それに薄膜を生じ、遂に固體となりて現今の皮殼を生ずるに至りしものなれば、今にも其の内部には高温度の熱を有すと。さて此の地球は如何なるべきや。横山理學博士の「地球の過去及未來」にいふ「氣水の吸收によりて寥々たる一場の荒野と變ずるか、又は陸地の磨滅により海洋の氾濫を被るか、又は太陽の冷結により闇黒界となるか、又これに先ち太陽と衝突して其の燃料に供せらるるか、此の四厄の中其一は到底免る能はざる所なり」と。かくして而して後、如何になるべきか、科學は明確なる答辯を與へずと雖も、復び星雲の舊態を演じ、生じては滅し、滅しては生じ、終に窮極する所なかるべし、天

體には生滅あるべし、しかも時間は無始無終なり。無限の空間に互り無限の時間に通ず、これ吾等が宇宙に對する觀念なり。

哲學の一瞥

上下四方を宇といひ、往古來今を宙といふ。宇宙は時間的にも空間的にも無限なり、此の無限の宇宙を統一體として考察する所に哲學の歩武は進めらる。眼を開けば天地萬象我が前にあり、眼を閉づれば無し。我あるが故に天地萬象あるか、天地萬象あるが故に我あるか。思惟する我、思惟せらるゝ萬象、これは主觀にして彼は客觀、主觀は心にして客觀は物。物と心とは天地萬象の二大別にして、宇宙の本質に關する考察は勢ひ二大思潮を生ず。一大思潮とは何ぞ、曰く唯心と唯物とこれなり。請ふ予が曾て一瞥せる所を繰返して此の思潮の徑路を觀察せしめよ。

古來希臘哲學の潮流が専ら客觀的考察に流れ、デモクリタスに至りてはアトム(原子)を

以て萬物の根本的成分として、この原子虚空を飛行し種々の運動をなし、結合して森羅萬象を爲すと説けるの趣は已に説きぬ。此のデモクリタスは一般の心意の現象をも原子の運動によりて説明することを得べしと爲したるものなるも、プラトーンに至りては全然これに反対し、生滅變化の現象界と常住不變の實體界とを區別し、此の實體界をイデアと呼びて全く精神的のものとし、これのみ實有にして、物體の如きは現象界に屬する非實有のものとし、精神的なるイデアの顯現に過ぎずと爲しぬ。

かくて唯物唯心の二大思潮は相互に盛衰をなし、近世に至り、デカルトに於て二元論(Dualism)は唱へられぬ。彼は精神と物質とを以て宇宙の本質とし、物質は廣延を屬性とする本體、精神は思考を屬性とする本體とし、此の二は何等の共通點をも有せざるものとす。これ實に唯物、唯心各一元を以て宇宙の本質を説明せんとするものを調停したるが如き觀ありと雖も、物質と精神とはデカルトがいへる如く、何等共通の點を有せざるものにあらず、これを吾人に見るも肉體と精神との相影響するは否定すべからざるの事實なり、

少年の肉體には少年の精神あり、老人の肉體には老人の精神あり、肉體の病氣は精神に影響し、精神の病氣は肉體に影響す。然らば此の二は二にして二に非ず、相互共通のものたるや疑ふを要せず。此に於て二元論は終に破れて又一元論(Monism)に歸せざるを得ず。スピノザは之に次いで出で、精神と物質との兩者を以て其の根本は同一なりとし、同一圓形の外より見れば凸形となり、内より見れば凹形となる如く、主觀的に精神といふも、客觀的に物質といふも、終に二物にあらずと爲し、宇宙の本體は自存にして、唯一、自由にして永恆なるものとし、これを神といひぬ。哲學家エルドマンはスピノザの意を取り、其神と萬物との關係を説いて、

神と萬物との關係は水と波との如し、萬物は水に於ける波の如く心の方面に於ても物
の方面に於ても種々雜多の相を現し變化して止むときなし、
と。かくて一旦スピノザに於て綜合せられたる哲學は、又自から二個の傾向を生じ、物心
兩面の普く平行することは疑ふべからずとするも、此の兩面中物質に重きを置くか精神に

重きを置くかの問題に就いて、こゝにも亦唯物論と唯心論を生じぬ。これより先きホッブスなるものあり、盛んに唯物論を唱ふ、曰く宇宙萬象は悉く物體及び其の運動に外ならずして、心的現象も究竟して物體の運動に過ぎずといひ、一切の問題を機械的に説明せんとし、科學者は皆此の唯物論に傾き、終に科學界の大偉人ニュートンを出すに至り爾來科學界は駭々として進み、十八世紀に至つてはフオグト、モレシヨットビユフネル等の徒出でて盛んに唯物論を唱へ、其の勢ひ侮るべからざるに至りぬ。一面に於てはライブニツツはスピノザの思想を唯心的に發展し、物心二界は同等に宇宙の本質たるべきものに非ずして、萬有の要素たるべきものは精神的の單モナード (Monarde) となし、下つてバールレーに至つては物體は知覺を離れて存在する能はずとして純然たる唯心論を唱へ、近世哲學の泰斗カントは兩極端を調和し、皮相なる唯物論を却くと共に淺薄なる唯心論を排斥し、こゝに批評哲學の根據を置きたりと雖も、其の全體の調子より云へば唯心論的なることは疑ふを要せず。彼は經驗し得らるゝ現象界と經驗の及ばざる實體界とを區別し、現象

の奥に横はれる一境即ち物自體 (Thing in itself) に就いては何等の知る所なしと爲したるも、其の現象界を以て主觀を離れて存在する物自身にあらずして、吾人の主觀に映じたる相に過ぎずといひて精神的實在に重きを置き、唯だ吾人をして斯る自然界の表象を起さしむる何者か主觀を離れて存在することは承認せざるべからずといひ、此の何者かを物自體とし眞實體とするも、其の人性を説くに當りて、人は一分は現象に過ぎざるも一分は物自體なり、此の物自體なる所、道徳上の責任性の存する所となせる如きは、明かに唯心的傾向を示すものなり。カント以後の哲學も亦皆此の唯心的傾向を帯び、フイヒテは萬有の根元は我の活動にありと云ひ、我と非我とを對せしむるもの亦これ我の活動に外ならずとし、シェーリングは我を以て非我より生じたるものとし、

我即ち精神界は非我即ち自然界物質より咲き出でたる花の如きものにして、此花こそ自然界の眞性質を示すものなれ。

といひ、ヘーゲルは絶對的理想理性を以て宇宙の實在とし、此の理性出でて自然界となり、

内自からを意識して精神界となる。一切の事物は皆此の絶対的理想の發現に外ならず、山川草木禽獸蟲魚みな此の理性の意味を語るに外ならずとし、シヨツベンハウエルは意志を以て宇宙の根本的實在とし、天地萬物の動いて止まざるもの皆これ意志の發現なりと絶叫し、意志は盲目的にして唯だ無窮に求むることを知つて休むことを知らず、これ其の本性なりといふ如く、其の論據は諸種に分るといへども、要するに唯心的一元を以て宇宙の實在を説明せんと試みたるに於ては即ち一なり、即ち近世哲學の傾向は、

- 一、宇宙の現象と本體とは別物にあらず、
 - 二、現象は本體の顯現なり、
 - 三、宇宙の本體は心的實在なり、
- として心的一元論に歸するの傾向を生じぬ。(拙著『宇宙論』の一節)

好譬喩

宇宙萬象の活動は、時計の機械によつて整然として時を遣へず其針を動かすが如し。機械も心なし、心なき物質たる機械と機械との組合せ能く此の秩序ある活動を爲す、此の以外他に心なるものあるにあらずと。又いふ物質の結合の上に靈妙なる心的作用を現するは彼のいろは四十七文字の一字一字に何の妙味なきも、組合せて俳句とし和歌とすれば無限の興趣を傳ふるが如し。「古池や蛙飛び込む水の音」人其の幽玄を愛す、しかも之を分解してふの字の字の一に就いて見よ、もとの妙あるなし。物質結合の上に精神作用を生ずる猶此の如きかと、これ其の本質に於て唯物論を取り、其の活動に於て機械論を執するもの、主張なり。唯心論に據り目的論に立つものは反駁していふ、如何に時計は物質と物質、機械と機械との結合になるとも、雜然と物質を集め、ゴチャ／＼と機械を合せて何の時計か生ずべき、時計の如くに組立てんてふ目的先づ立ちて、其の如くに組合せられたるにあらずや、いろは四十七字の中何の目的なく紛然と十七字を拈して俳句の妙生ずるの理なし、幽寂の心動いて此句となる、心は本なり物は末なりと、これ好譬喩なり。然れども文字を離れて句なく、機械を離れて時計なし。物

といひ心といふは同一物の兩面、物ある所に心あり、心ある所に物あり。既に宇宙なる物あり、天地なる機械ありとせば其の裏面に宇宙の目的あり、天地の心あるを知るべきにあらずや。

萬物心あり

萬物皆心ありてふ哲理は、先づ類推の理法によつて證明せらる。バウルゼンいふ、「吾等が自己以外に於て直接に知り得るものは物質現象のみ。吾等は自己と同様なる肉體の泣き笑ふを見、又其聲を聴く、しかも其の悲喜の感情思想其物は決して直接これを認め得るにあらず、唯だ自己より類推して、自己の感情思想の此の如き場合に悲喜するを以て彼も亦然るべしとなすに外ならずして、即ち我に心あり我と同じき彼にも心ありと類推するの外なし。此の類推の範圍を擴めて一切の人類に及ぼし人皆心ありといひ、更に擴めて一切の動物に及ぼして空飛ぶ鳥、野を驅ける獸にも心ありと斷定す。而して其の植物並に礦物に及ばざるものは、自己と趣を異にする獸多きに由るべしと雖も、動物にまで及ぼしたる類推を何が故に植物に及ぼさざるか。

植物には神經系統なきが故に心なしと云はんか、下等動物にも亦これなきにあらずや。植物には自發的の運動なきが故に心なしと云はんか、植物は自から其の枝葉を日光に向はしむることなきか。日光に對して花瓣を開き、夜に入りて閉づるものなきか。仔細に動植物を視察するもの誰か此の二者を全然異なるものとせん。既に二者全く異なるものにあらずとせば、一に於て心ありと類推し得たるもの他に於て絶無なりと斷すべきの理由なし。其の精神生活に繁簡の差はあれ、植物とて之なきにあらず。已に動物植物の如き有機體に悉く之ありと類推し得べしとせば、更に之を金石の如き無機物に應用し得ざるの理なし。これら有機物は常に無機物を吸収して以て其の生命を持續し精神生活を顯現するものなれば、彼にあつて此に無しとは云ふべからず。試みに一掬の米を地上に蒔かば數升の米となるべく、これを雌雄一對の鼠に與へんか、終に精神を有する無数の生物となるは吾等の日々に見得る所にあらずやと。ヘンリーワードいふ、精神は砂の中に眠り、草木の中に夢み、動物の中に力を集め人に於て自覺すと。精神の差はあるべきも物として心なきはなし。

六大周遍

萬物皆心あるの思想は、眞言密教の教理夙に之を説明す。彼は天地萬物を分ちて二とし其の物質的なるものには地、水、火、風、空の五大を立て一切の物には堅(地)濕(水)暖(火)動(風)無礙(空)の性を有せざるはなしと説くと共に、其の裏面には精神的なる識大(心)を具せざるなしとし、其の精神的なる識大も亦地水等の五大を離れずといひて物心合一、色心不二の説を明かにし、此の六大は宇宙間に遍からざるなしとし、此の六大周遍の主體を人格化して毘盧遮那佛といふ。毘盧遮那は梵語遍一切處を意味し意譯して大日如來といふ。大日如來は宇宙の實在、山川國土草木禽獸皆其の顯現にあらざるはなし。天に一輪の月、影を萬機の器水に浮ぶるが如く、實在の光りは個々の現象の上に宿るをいふ所に此教の妙旨存す。

一心二門三大

大乘起信論に於ては此の宇宙萬象の實體を一心と觀じ、これを如來藏心といふ。而して此の一心を本體と現象との二方面より説明して一を心眞如門と名づけ、他を心生滅門と呼ぶ。宇宙萬象何物として生滅去來せざるはなく、變化は萬有を通過せる現象なれど、其の本體に於ては不生不滅のものあり、所謂波に生滅去來の相ありと雖も、水に不變の性あり、見來れば宇宙の現象は個々雑多にして變化し生滅すれども、其の本體は平等一如にして變化なく生滅なし。此に於て一心の體、相、用を以て宇宙を説明す、相即ち現象の上よりいへば萬物悉く差別にして天地間一も相同じきものなきも、其體即ち本體の上よりいへば萬物悉く一體にして毫も異なるなし。相は異にして體は同、體は同じといへども、相異なるに從つて其用も亦異なる。同じく是れ土、しかも相異なつて土瓶となり茶碗となれば、土瓶には土瓶の用あり、茶碗には茶碗の用あり。これを天地の妙用とし、此の體相用は萬物の上に遍からざるなきが故に大といひ、一心二門三大の説を以て萬有を解釋す。請ふ、更に次に説く所の事例によつて領悟せんことを要す。

天下一品

宇宙大なりと雖も、乾坤廣しと雖も、何れの處に我の外に我あるか。宇宙雙日なく、乾坤ただ一人。これ豈我のみならんや。他も亦獨自獨立、相互相異なつて同じからず。一葉頭上の露、露さま／＼の姿あり。霞の奥は知らねども、見ゆる限りは櫻なりける満山の花も亦必ずしも相同じきにあらず。机上一個の瓶、汚れたりと雖も、此瓶以外に此瓶なし、亦これ天下の一品と稱し得べからざらんや。萬有何物か同時に同處に於て同一状態を以て存し得るものかある。歴たる萬象悉くこれ天下の一品にあらざるなし。

萬物一體

相の上よりいへば萬物皆異なる。しかも體の上にて何の異なる所かあるべき。机上一個の瓶と机に對するの人と其の異なる多しと雖も、仔細に檢し來れば瓶は土によつて成る、此人

抑も何によつて養はる。彼は米によつて養はる、其米何によつて生ずる、土は是れ米の母、米は是れ此人の母、土を以て成るの瓶と其の本源に於て異なる所ありと云ひ得べきか。王陽明

日月星辰禽獸草木山川石土、人と原只一體なり。故に五穀禽獸の類は皆以て人を養ふべく、藥石の類は皆以て疾を療すべし。只此の一氣を同じうするが故に相通するのみ。天地同根、萬物一體。誰か之を否み得ん。

あるべきやうわ

體同じと雖も相異なる。此に於て萬物各々功あり用と處とを云ふべし。體同じきが故に凡て平等なりとするは玉石同架の弊に墮ち、相異なるが故に凡て同じ所なしといふものは差別の妄見に捕はる。異にして同、同にして異、差別にして平等、平等にして差別、此の離れて離れざる所に宇宙の妙用あり。能く此の理法を看取して初めて應用自在なるを得べし。昔は北條泰時

梅尾の明慧上人に問ふに治心の要を以てす。上人いふ、「阿留邊幾夜宇和」の七字を忘れずんば則ち可なりと。柳緑花紅、蛙鳴雀噪これ皆「あるべきやうわ」の顯現。鶴の足の長く鴨の脛の短き、春としなれば百花絢爛として開き、秋としなれば枯葉蕭瑟として風に散る、悉く「あるべきやうわ」にあらざるはなし。同じく人、しかも君臣、父子、夫婦、昆弟、各々其の盡すべきの道あるもの之れ「あるべきやうわ」にあらすや。諸法は皆實相、木としては相同じきも柱は立ち梁は横はる、これを逆施して家の建つべからざるもの之れ眼前に「あるべきやうわ」の教訓を示すものにあらすや。異を執する勿れ、同を樹つる勿れ、不即不離の處に中道の妙存す。

一心法界

大乘佛敎の極致を以て目せらるゝ華嚴宗に於ては此の宇宙の萬象を以て遍一切處なる人格的實在毘盧遮那如來の果相其儘の顯現とし、此の法界を以て一切萬法迷悟染淨を包括せる一心と觀じ、此心を以て總該萬有心と名づけ、四法界の觀察法を以て萬物相關の理を説く。宇宙萬象

其相を見れば個々差別にあらざるはなし。これを事法界觀といふ。しかも其體を見れば平等の一理あるのみ、これを理法界觀といひ、其の現象其儘に實在、差別其儘に平等ある所を觀察して事理無礙と呼び、更に一步を進めて差別の事象が相互に不離の關係を以て融合せる點に立脚して事々無礙を説く。事々無礙は華嚴の特色、萬物相互微細の關係を道破して顯る妙を極め、其の個々の事象の統一せられ連絡せらるゝを見ては何人も此の宇宙を以て渾然一如の靈體と見ざるべからざるに至る。理、遠く、旨、深し。次にいふ所の如きは一二皮相の例證のみ。

一個のコップ

福澤諭吉翁、會て、人の華嚴を説くを聴き、自から一例を示していふ、卓上一個のコップこれを右より左に動かしたりとも、大宇宙に何等の影響なしといふは、萬物相關の妙を知らざるもの、予をして云はしめば、これ直ちに大宇宙に影響するの大事件なり、何を以て斯いふとならば、此のコップの卓上にあるは地球に引力あるに由る、地球に若し引力なくんば天外に飛散

するやも知るべからず、既に地球の引力に由るとせば、これを右より左に動かす、地球の引力に些少の影響なくんばあらず、既に地球の引力に影響ありとせば、地球と太陽とは相互に引力関係を以て立つが故に、勢ひ微弱なりとも太陽の引力に影響せざる能はず、既に太陽の引力に影響すとせば太陽系の星と星との關係に皆此の引力關係なくんば土星水星木星金星等皆其の影響を受けざるなし。既に太陽系全體に影響するとせば太陽系と其の以外の恆星系との關係も亦此の引力關係なれば、机上一個のコップ直ちに宇宙を動かすといひ得べきにあらずやと。華嚴の萬物相關を説く亦復た此の如し。

小、小にあらず

史家いふ、クレオパトラの鼻にして今五分低かりせば世界の歴史は今と大に異なるものありしならんと。クレオパトラは絶世の美人なり、羅馬の英雄これに迷うて歴史に幾多の波瀾を生ず。しかも此の美人の鼻にして五分を減ぜんか、其美何の所に存する。既に其美なし、誰か又これに迷はん、鼻頭五分の高低これ大かこれ小か、遠く例を外國に求むるまでもなし。「假名手本忠臣藏」十二段の波瀾曲折、其の本、顔世御前の美貌に因すとせば、其眼の五分七分下りてありたらんには、此の好脚本も拈出する能はざるべし。小、必ずしも小にあらず、直ちに全局に影響す。妙なる哉、宇宙、萬物の相關の微細に行はるゝこと、概ね此の如し。

一指世界を動かす

近く例を求めしめよ。歐洲の禍亂、世界の戦争、抑も何が故にか起れる。其因もとより多しと雖も、最も近きものは奥太利の皇太子が塞爾維ア人の陰謀によつて暗殺せられたるに因るにあらずや。これが故に奥塞先づ于戈を動かして獨逸起ち、露西亞應じ、佛蘭西戦ひを宣し、英吉利亦劍を抜き、而して日本も亦これに参加し、其他土耳其、黑山國、羅馬尼、希臘等も亦砲火相接して闘ひ、最後に米國の加はるに及んで前古未だあらざる世界の動亂となる。しかも其の本は刺客の持てる短銃にかゝれる指の僅に屈折したるに外ならず。此の指曲らずんば其の彈丸

發せず、彈丸發せずんば、填皇太子變に遭ふなく、皇太子變に遭はずんば此兵亦起るなし。一指頭の屈折直ちに世界を動かす。小、斷じて小にあらず。

萬物相關

萬物は微細に關係し、因果相連り、一の因を推せば萬有皆これに與力し、一の果を質せば宇宙悉く之に關係す。先覺、會て吾等が生活に於て示していふ、「動物界は植物界なくんば生存する能はず、其の植物界は堅硬なる地殻が細微の土壤に變ずるにあらずんば生存する能はず、此の土壤は雨の爲に濕されて益々細微柔軟となる。而して其雨は水の水蒸氣となつて空中に吸收せられ、寒冷なる空氣に遇うて凝結せらるゝにあらざれば降る能はず、其の水蒸氣となるは地球が太陽の光によつて熱せらるゝを知らば一片の草の葉といへども全遊星のあらゆる排置、あらゆる運動と、あらゆる自然力とに由るにあらざれば生起する能はざるを知るべしと（フオレ、パーエール）。奪つていへば萬物悉く吾に備り、與へていへば我直ちて天地に關與す。一は

多を擲し、多は一を容る。一と多と相即相入する、これ法界の妙にあらずや。

鐘と撞木

臨濟に四料簡の説あり、採つて以て宇宙の觀察法とするを得んか。宇宙萬象これを分ちて人と境との二とす、人とは主觀、境とは客觀、客觀的に見れば我も亦五尺の形骸、萬象皆物にあらざるなし。これを奪人不奪境といふ。人なくして境のみあり。されど主觀的に考察すれば我あるが故に物あり、我を離れて一法なし。これを奪境不奪人といふ。然れども主觀といひ客觀といひ、物といひ心といひ、人といひ境といふ、これ皆差別の假相にして平等なる本體を離れて存するなし。此の本體の上に見るを人境俱奪といふ。しかも平等の上は差別の相あり、物あり、心あり、相互相關係す。此の如くに見來るを人境俱不奪といふ。或人、此理を鐘と撞木に就いて喩へていふ。奪人不奪境は、

鐘は鳴ります撞木は鳴らぬ

鐘がなければ音はせぬ
と執するもの。奪境不奪人は、

鐘はならない撞木が鳴るよ

撞木なければ音はせぬ

といふもの。而して人境俱奪に至つては、

鐘が鳴るかや撞木が鳴るか

鐘と撞木の間に鳴る

と一見悟了したるが如くにして、未だ到らざるもの、たゞこれ空聞何の音をか發すべき。人境俱不奪に於て、

鐘も鳴ります撞木も鳴るよ

鐘と撞木で音がする

と、一々の法に於て相依り相立つをいふ。最も平凡なるが如き所に最も妙趣あり。

萬物通ず

吾等が精神修養は我心をして天地の心と相通ぜしむるにあり。無住法師いふ、

聖人は常の心なし、萬人の心を以て心とす、法身は定まれる身なし、萬物の身を以て身とす。

萬人の心を以て心とし、萬物の身を以て身とす。これ天地の心と相通するものにあらずや。

苟も此心を得れば其身は小なりといへども以て天地に關與すべし。華嚴經にいふ、

佛は一切微塵の中に於て、無限の大神通力を示現す。

と。小必ずしも小にあらざるを知らば、一微塵裏に大神通を示現する豈難からんや。又いふ、

如來眞身本二なし、物に應じ形に隨つて世間に滿つ。

物に應じ形に隨つて應用無礙なる所、これ直ちに天地の心を以て心とするもの。心を大にせよ、萬物悉く其中に容る。張橫渠曰く、

心大なれば則ち百物皆通じ、心小なれば則ち百物皆病む。

百物をして皆病ましむるは、之れ我心、天地と相通ぜざるが故のみ。這般の格言精到に玩味するを要す。

天地の心と我が心

萬物既に一體たり、天地の心豈我心と通ぜざらんや。人心の秘奥に潛在して靈光時に閃くもの之にあらざるなきか。妄念の雲深くして良心の光を隠し、心の波の常に荒れて本性の水静かなること稀なれど、心波澄静妄念其形を潛むるの時、吾等は此の天地の心の宿るを見る。洪川禪師の、

一夜定中、忽然として前後際斷、絶妙の佳境に入り、恰も大死底の人の如し、一切物我あるを覺えず。只覺ゆ、吾が腔内の一氣、十方世界に彌淪し、光輝無量、須臾にして蘇息するものゝ如し。視聽言動、豁然として平日に異なる。是に於て試みに天下の至理妙義を求

むるに、頭々上に明かに、物々上に顯かなり。觀喜の餘り、自から手の舞ひ足の踏むを忘る。

といへるは、禪者の悟境を敘せるものにして、天地と我と冥合して一となれるの快感、佐藤一齋は、

深夜闇室に獨坐して群動皆息み、形影俱に泯ぶ。是に於て反觀すれば、たゞ方寸の内、炯然自から照すものあるを覺ゆ。恰も一點の燈火、闇室を照破するが如くに認得す。此れ正に是れ我が神光靈昭の本體、性命即ち此物、道德即ち此物、中和位育に至りても亦只是れ此物、光輝宇宙に充塞するなり。

といへるも亦天地の心と冥合せるもの、吾等は此の靜坐冥想によつて天地の心と靈域相通するものあるを認めざるべからず。

母を慕ふの情

天地は萬物の母、吾等も亦天地に生れ、天地に懷かれ、天地に育まる。されば吾等が天地の心を戀ふるは赤子が慈母を慕ふにも似たるべきか。プラトーンは之を名づけてイデアの戀と云ひぬ。イデアは宇宙の眞實體にして、眞善美として備はらざるなき天地の理想、吾等も亦これより出でたれど宿習の然らしむる所、今はおほかた忘れはて、僅に依稀たる残光を心の奥に認め得べきのみなれど、此の微けき残光を迎りて昔の面影を憶ひ起さんとする所に、無限の快感を生ずるにあらすや。彼の一休が「本來の面目坊の立姿一目見しより戀とこそなれ」といへるは卑調を以て此の哲理を言明せしにあらざるなきか。戀と云はんは餘りに卑し、吾等は母を慕ふの心と見てこそ此の情味の却つて濃かなるを覺ゆれ。

心と自然

自然の興趣

天地は我を圍繞し、諸種の訓誨を不言の間に吾等に默示す。唯だ吾等の眼眩くして之を色讀する能はざるのみ、芭蕉の耳なくして雷を聞いて開き、葵花の眼なくして日に向つて轉ずる、風の斷雲を送つて嶺に歸り去り、月の流水に和して橋を過ぎ來る、青松の人の來往を礙へずして野水の心なくして自から去留する、無心の中に有心の興あり。落霞と孤鷺と齊しく飛び、秋水と長天と共に一色なる、異中に同を存し、荷葉の團々として鏡よりも圓に、菱角の尖々として錐よりも尖き中に、同中異を語る。山色の清淨身にして谿聲の廣長舌なる、四時行はれ、萬物育する處に甚深の意義を傳ふ。宇宙の法身は十方に遍滿し、自然の説法は天地を震駭す。見よ無字の經典、聽け自然の説法。吾等は自然に對して心裏に共鳴するものあるを感ず、其の

二三を語らしめよ。

新天地

歲月悠々、無限に通ず、何ぞ彼を舊とし此を新とせん。しかも乾坤一轉して淑氣新に、人も亦其間に處して志を新にす。旭日貞明、千古異ならざるも、朝暉今曉祥光あるを覺ゆ。道に過現なきも、人心これを去來にし、徒らに過去を追想するものは模倣に満足し、悔恨に煩悶す。満足に發展なく、煩惱に懊惱あり。懊惱を慰むるものは當來の希望、發展を助くるものは新に生くるの工夫。日々に新にして又日に新なる、これ新天地に立つの修養にあらずや。窓梅はや蕾を破り、黃鳥既に新晴に轉ず。新なる哉、新（甲寅一月）

柳暗花明

春色漸く闌ならんとする三月の天、芳草は柳烟に和して雨を帯びて青く、遅咲きの梅は

早櫻と妍を争うて、霞たなびく山の端に一段の色を添へ、自然は吾等を促して書齋より郊外に、閑居より吟筇に、柳暗花明の眞趣を探らしめんとす。不盡の乾坤、春色遍し、誰か一掬の春水に無限の情を解し、一枝の春信に常住の理を讀むものぞ。江水漫々、舟、行くこと遅く、燕子喃々、春の過ぐるを知らず。（甲寅三月）

花時風雨多

花を開かしむるの雨は、これ花を散らしむるの雨。人生禍福常に相半ばす。禍を轉じて福と爲する英靈漢の手腕、禍福を超越せるは脱俗の眼光。花時徒らに風雨の多きを啣つ。啣ちて何の用かある。寧ろ糸より細き春雨の花に濺ぐの閑寂を愛せずや。海棠一枝、雨を帯びて艶かに、落英繽紛、露に沾うて興趣一段を加ふ。「一雙の燕子簾前に語り、病客無家盡日眠る、杏花開き遍くして人到らず、滿庭の春雨絲烟の如き」光景は、雨を待つて見得べきにあらずや。隨時隨興、何ぞ他を恨みん。（癸丑四月）

初夏

満天の新緑、満地の苔、苔青うして樹影黒く、樹緑にして露自から白し。雲間を洩るゝ日の光は、青葉若葉を彩りて、疎竹を渡れる薫風は偶々痴蝶を誘うて瓶裏の薔薇に戯れしむ。蝶去つて人は眠りより覺め、机上半は緋き來りし南華を把つて誰やらの「蝶一つ我に添寝の山家かな」といへる景趣を味はしむ。一室閑寂、人語絶えて鳥聲の晴を欣ぶを聞く。(甲寅五月)

樹上の蟬

暑雨初めて過ぎて爽氣清く、日は山の端に落ちんとして滿林の蟬聲涼風を呼ぶ。人間若し樹上の蟬を學び得べくんば、還悲觀の我を苦むるなからん。身を危葉に託して危きを知らず、生を風露に養うて足らざるを憂へず、「やがて死ぬ景色は見えず蟬の聲」春秋を知らねども、もと不平の聲なく、須叟の生を樂みて頌を炎帝に上り、歌を松吹く風と合せ、聲を潺緩たる溪流に

和して大演奏を暮れ行く夏の天地に奏づ。若し夫れ塵寰を蟬脱し、地に尸解を遺して、蟬の羽衣いと軽く、杳然として悠久に入るに至つては、彼も亦登仙の客たらんか。(甲寅七月)

月下の蟲聲

氣、澄み、風、清くして一輪の明月、峯の松が枝に懸り、影を咲き亂れたる秋草の上に落ちて、露華千點、月を讀美の蟲の音、涼し。嗚呼月に古今の變なく、幾度か詩人の懐に入り、月に東西の別なく、今も朱門と白屋とを照す。想ふ昔、曹孟徳が鋒を横へて烏鵲南に飛ぶを見たりし月、今はライン河畔、百萬の貔貅が露營の夢に入り、極東讀書子が窓頭の光、同じく北歐艦艦の上を照す。天は高し中秋の夜、若し高處に高觀し、達處に達觀せば、吾等は實に月を讀美の蟲なるらし。(甲寅九月)

時雨降る夜

「さよしぐれ板屋の軒は降り過ぎぬ、また誰が夢か驚かすらん」中宵、夢破れて獨り自から想ふ。秋、老いて凄涼の氣、室を襲ひ、夜、闌にして哀愁の情、人に迫る。心澄みて眠り成らず、戸を開けば月未だ落ちずして窓に印せる梧桐の一葉二葉落つると見るまに、残りの影は消えて、黠々戸に當るは初時雨の早訪るゝか、蕭々たる雨聲は婆娑たる落葉の聲と和して秋思一段深し。雨止みて影を印せる梧桐一片なく、影隠れて雨復來る。時雨ふる夜の寢覺ほど實に興あるはなし。夢は回る歴々雨聲の中、吾等の心裏に自から共鳴するものあるを覺ゆ。(甲寅十一月)

菊花頌

春露、其色を染めず、秋霜、其條を改めず、千代に八千代に千代見草の壽長きこそ、吾等が祝福すべき花ならずや。昔は南陽縣にありて其の下流を汲むものゝ命を延べ、劉生の丹法に交りては五百歳の壽を保ち、康風子は之を服して仙に入る。しかも延命長壽は此花の誇りにあら

ず、流れに浮ぶ半輪の花は楠氏七生報國の志を傳へ、東籬に色添ふ此花は淵明が清節を傳ふ。白華金蕊、天に向うて其の氣高きを示し、英語のクリサンシマムは、もと羅甸のクリソス即ち黄金とアンセモム即ち花との二字より成る。「欄干に上るや菊の影法師」又富貴の趣を存す。其の富むもの財ならんや、財貧にして道富む。其の早春莖葉を生じ、晚秋清芬を吐き、霜を冒して芳姿衰へざる、豈俗人の鑑賞に媚びんや。「植ゑすて、今年も白し菊の花」一枝の菊吾等に教ふる所少からず。(癸丑十一月)

年窮歲盡

今年も亦逝くか。百花紅葉皆枝を謝して東籬の殘菊亦霜に凋れ、寒風は枯林を吹いて「野は枯れく、涙にくぼむ石の文字」滿目蕭條の景ならざるはなし。嗚呼、今年も逝くか。野邊の草も一たびは花咲きぬ。吾、此の一年、何の花をか着けたる。深山の木も一たびは實を結びぬ。吾、此の三百六十五日、何の實をか結べる。終歲、蕭條花なく實なし、齷齪として此に又年を

送る。「ひととせは果敢なき夢の心地して暮れぬる今日ぞ驚かれぬる」年窮歳盡、誰か此感なからん。僅に東風の訪れて梅雷一點の笑を示すによつて慰むるのみ。(癸丑十二月)

靈 覺

自然は外より我に默示し、心裏の靈光は内より動きて、機を見て迸り出でんとす。内外相應じて豁然として貫通する時、こゝに靈覺あり。ニュートンはバタリと落つる林檎の音に宇宙の大理法を色讀し、ワットはゴトリと上る鐵瓶の蓋に自然の妙用を體得し、芭蕉は因地一聲、蛙飛び込む音に正風の眼を開き、我が大聖釋尊は臘月八日の明星に天地と冥合す。求めよ、さらば與へらるべし。靈覺何ぞ遠きにあらん、眼前事後に其機は伏し、觸目道中悉く天地の心にあらざるはなし。禪家云はずや、「無邊の風月眼中の眼、不盡の乾坤燈外の燈、柳は暗く花明かなり。十萬戸、門を敲けば處々に人の響ふるあり」と。敲けよ、必ず響ふるものあらん。

天地の經卷

不立文字を標榜する禪は直ちに此の天地を以て一大經卷とし、鹿門の覺禪師は「盡大地是れ學人が一卷の經、盡乾坤是れ學人が一隻の眼、這個の眼を以て如是の經を讀むこと百千萬劫、常に間斷なし」といふ。這個の眼光を以て如是の經を讀む、これ自然を體得する所以。白隱禪師いふ、

畢波羅窟裡。	未結集此經。
童壽譯無語。	阿難豈得聽。
北風窓紙隙。	南雁雪蘆汀。
山月苦如瘦。	寒雲凍欲零。
千佛縱出世。	不添減一丁。

畢波羅窟は一切の經典を結集する所、しかも此の無字の經を收めず。童壽は譯經の大家、しか

も此の不文の典を傳ふる能はず、阿難は佛の講座に侍して終始其教を聴くも、未だ此の無言の大説法を聴取せず。北風吹き送る窓紙の隙、南雁來り泊す雪蘆の汀、こゝに大經典あり。山月影凄く、寒雲凍る處、こゝに大説法あり。不増の乾坤、不滅の天地、一ページだも増減し能はざる所に、此經の妙あるにあらずや。

他に贈り難し

梁人陶弘、華陽の山中に隱居す。人あり之に問うて曰く「山中何の有る所ぞ」と。弘、答へ

ていふ、

山中何所レ有。

嶺上多ニ白雲。

但可ニ自怡悦。

不堪ニ持贈レ君。

自然は多大の慰安を興ふ。獨り山に對するの時、其快、他に傳へ難きものあり。

自然を楽しめ

人事葛藤の中に没頭して我を立て我を執じ、自から苦み、他を苦む。去つて自然の光景を見よ。雲、心なくして岫を出で、風、心なくして樹頭を過ぐ。道の邊に咲く花に無限の情趣を味ひ、舞ひ行く蝶の戯れに、我、吾を忘る。若し夫れ見上ぐるばかりの懸崖より千丈の銀線垂下し來つて、飛湍、岩を嚙むの壯絶なるに接しては、崇高の情、我を驅つて自然に同化せしむるを覺ゆ。古人いふ、「一日の勝に遊べば一日の神仙となる」と。自然の興趣ほど我を楽しませるはなし。

まこともて交る時は天の下

わが友ならぬ人やなからむ

(八田知紀)

達觀

洞然明白

達觀の訣、他なし、天地の心を以て心とするにあり。天地公明、何の隠すなし、ニュートン出でざるも引力の理は不斷に行はれ、ワット出でざるも蒸氣の作用は脱白に公示せられ、抑も亦コロンブス出でざるも西半球は嚴然として存せしなり。人自から眼を閉ぢて天地の理に暗く、自然の教へを棄つ。棄つれども怒らず、依然として之を公開す。人若し此の如くなるを得ば何の疚しきことかあらん。「信心銘」にいふ、

至道無難。唯嫌揀擇。但莫憎愛。

洞然明白。毫釐有差。天地懸隔。

と。宇宙の大道、坦々として山河の嶮なし、しかも差別の揀擇によつて憎愛を生ずるは吾等の

秘 密 病

私情、公平なる天地の理法は、其の引力の應用に於て珠玉と瓦礫とを擇ばず、其の變化の大則は富貴と貧賤とを問はず、世間公道、白髪を推す、朱門白屋、等しく訪れざるはなし。吾等の心をして此の如く公平ならしめよ。然らば洞然として明白なるものあらん。

予曾て時事に概して秘密病なる一文を稿す、又以て心病を指摘するに足らんか。次に掲ぐるもの即ち是れ。

天下の至公に居り、天下の至正を行ふ。何者か又我を累するものあらん。蓋し公明正大は爲政の訣にして人心收攬の能事これに過ぎたるはなし。現下、天下の大患たるもの不公の病源より來つて不正の難症となる。武臣、錢を愛して財産の公開を拒み、文臣、私情に驅られて公明の策を厭ふ。此の如くにして天下惑亂せざること、古より未だ曾て之れあらざるなり。乾坤は

脱白に公開せられ、宇宙は赤裸に暴露す。強ひて之を蔽はんとするも、隠れたるより現れざるはなく、一時の糊塗は、末代の失敗となり、目前の隠蔽は百年の禍根を因す。公明なれ、正大なれ。これ最も強きものにして、亦最も力あるものなり。

二

一切を公開して他の品隋に任す。是とするも可、非とするも妨げず。大丈夫の心事、此の白日青天の如くにして、初めて事を天下と共にすべし。妄りに小計小策を弄し、私情に驅られ、私曲を掩ひ、糊塗百端、彌縫徒らに努むるとも、塗られたるものは剝落し、縫はれたるものは破綻し、終に醜態を江湖に暴露せざるを得ざるに至るべし。

三

昨日まで崇敬の對象たりし偉人、一朝にして唾棄の標的となる。漫りに世評の頼みなきを啣つ勿れ。汝の言行にして表裏相應せば、誰か好んで火なきに烟あるを云はん。表裏相應は聖者の行履、八面玲瓏は君子の態度。現代、此の公明を缺くが故に、終生毀譽の中に没頭して出づ

る所を知らず。蓋し弊なり、大なる弊なり、國を亡ぼすの弊なり。

四

誤れる哉、現代人。脱白なるものを淺薄と嘲り、強ひて事を秘密にするものを以て、思慮深しといひ、奥行ありと稱す。殊に知らず、一切の醜事は此の秘密の中に行はれ、滔天の罪惡は此の不公不明の中に胎むを。堂々として取るべきを取り與ふべきを與ふ、何の醜か此中に行はれ、何の惡か此中に胎むべき。取る能はざるを取らんとし、與ふべからざるを與へんとするが故に、秘密は必須の條件となり、以て天下の目を盜み、群衆の耳を奪ふ。

五

得々、秘密を行うて、天下を盲にし、群衆を聾にし、厚顔世を欺き得たるを誇るとも、衷心、終に欺く能はざる一物なきか。那箇の一物より癩痺し盡すとも、世に飛耳張目の士あり、昭々たる天は口なきも此の如きの人によつて發く所とならざるものは少し。よし惡運強くして一人の之を發くものなくとも、其の之あるを恐るゝ心裡の煩悶は、永へに消えざるものあらん。秘

密病の自からを苦むるは他を苦むより、更に大なり。何者の痴漢ぞ、此の苦悶を忍んで、僅に一時の糊塗を策せんとはする。

六

政界、時に秘密の要なしとは云はず。されど、それは國家民人の福利の爲め暫く群衆に知らしめざるを利なりとする場合に限らるべきものにして私黨の利益の爲め、若くは私人の利益の爲に於て許すべきにあらず。此の許すべからざるを敢てして、秘密の貴ぶべきを云ふは、陋の又陋なるもの。政は正なり。公正に何の秘密をか要せん。

七

秘密病の流行は政界のみにあらず。社會の各方面に蔓延し、皆相争うて秘密の利を得んとす。「此事はどうか秘密に」といふことに祿なことなし。事に疾しきあるか、業に弱き所あるものなり。疾しき所あるが故に公明を恥ぢ、弱き所あるが故に他の強きを畏る。大丈夫起つて自由競争の天地に事業を企畫す。何の要あつて殊更に秘密を頼まん。勝たば則ち堂々として勝ち、

負くれば則ち堂々として負く。此の如くにして勝敗共に俯仰天地に恥ぢざるものあらん。

八

秘密病は陰險を生み、誦詐を生み、權略を生み、欺瞞を生み、虚偽を生み、コンミッションとなり、袖の下となり、賄賂となり、私曲となり、奸策となる。天下、此の秘密を事とするが故に、爬羅剔抉、發いて快とするものを生じ、其の之あるを憂へて秘密は益々秘密に、隠蔽はいよ／＼深からんとし、事毎に表裏を生じ、口、言ふ所、心に思ふ所と背き、心に思ふ所、身に行ふ所に反し、簡單なるべき人生を強ひて紛糾せしめ、整然たる公道を蹂躪して自から其非なるを知らず、親子の間に秘密あり、兄弟の間に秘密あり、夫婦の間に秘密あり、朋友の間に秘密あり、個人より社會に及び、家庭より國家に及べる此の大病源にして根絶せずんば、世態の革新終に見る能はじ。

隠すことなし

洞然明白、天地何の隠す所あらん。天地の心を以て心とする聖人亦何の隠す所かあるべき。孔子いふ、二三子我を以て隠すとなすか、吾、爾に隠すことなしと。黄龍祖心禪師、詩人黄山谷に質すに此語を以てす。山谷諄々として説く。禪師肯はずして曰く不是不是と。對へんと擬するも亦顧みず、山谷迷悶して已まず。時に暑退き涼生じて、秋香、室に満ち、巖桂盛んに開く。禪師いふ、

「木犀花の香を聞くか。」

山谷曰く、

「聞く。」

禪師いふ、

「吾、爾に隠すことなし。」

山谷、懷に釋然たるものあり。謝していふ、
「和尙恁麼に老婆心切なるを得たり。」

と。黄龍和尚亦隠すことなし。これ此の公案仔細に味到すれば、天地の心を體得するを得んか。

順逆の外に立つ

變化は宇宙の當相、國に萬年の榮えなく、人に千年の壽なし。盛んなるものは衰へ、満てるものは虧く。盛んなりとて頼むべからず、衰へたりとて悲しむに足らず、興亡の跡を達觀し、榮枯の理を洞察す。順境にあつて誇らず、逆境にあつて撓まず、能く順逆二境を超越して復他の爲に累せられざる心を養ふを得んか。佐藤一齋いふ、

順境は春の如し、出遊花を觀る。逆境は冬の如し、堅臥して雪を觀る。春もとより樂しむべし、冬も亦惡しからず。

心を順逆の外に置き、思ひを榮枯の上に立つ、これ達人達觀の妙致なり。

賣茶翁の自警

賣茶翁の風流は世多く之を傳ふ。彼が自警箴の如き、眞に彼が心的生活を窺ふべきもの、

夢幻、生涯夢幻、居。了知、幻化、絶親疎。

貪榮萬乘猶無足。退步一瓢還有餘。

無事心頭情自寂。無心事上境都如。

吾儕苟得體此意。廓落胸襟同大虚。

廓落たる胸襟、大虚と同じくして初めて心頭事なく、事上に心なきを得べし。賣茶、果して之を得たり。其の辭世にいふ。

劫火洞然毫末盡。青山依舊白雲中。

香として彼は白雲の中に入れり。

正念坊

世に正念坊の一枚起請と稱するものを傳ふ。飄逸の中に教訓あり。彼亦尋常の僧にはあらじ。其文にいふ、

もろこし我朝のもろくの智者達の致し申さるゝ隱遁の隱にあらず、又學問して道の心を悟りていたす隱遁にもあらず、只不用の者には世の坊げとなるまでとさへ心得れば疑ひなく氣樂なるぞと思ひとりて隱居するより外、別の仔細は候はず。但し肝心の世渡りと申すことの候へども、皆衣食住の中にこもり候なり。此外に慾深きことを存せば諸人のあはれみにも外れ候へし。たとひ席をかぶり糟糠をなめ、人の軒端に臥せるとも、食ひては寢、食ひては遊ぶ、君が代のありがたさを忘れれば、身は安樂になりたりとも、生きたる甲斐もあるまじく候。あなかしこ。

と。其の辭世が更に奇拔なり。

来て見ても来て見ても皆同じこと

こゝらでちよつと死んで見ようか

死を見る此の如き彼も亦一個の達観者流なり。

花咲かぬ身

世事紛々限りなくして我力に限りあり。限りあるの力を以て限りなきの世事に對す、其の能はざる多きは當然のみ。しかも自から揣らざる吾等の心は盲目的の欲求に驅られて徒らに煩悶し懊惱す。此に於て心に一日の平安なく、身に瞬時の休養なし。人々各々分あり。天稟の性、遺傳の力、皆我を制縛し、脱せんとして脱する能はざらしむ。自から其力を知りて分に安んずるは身心慰安の一法。

花さかぬ身は靜なる柳かな

花紅柳緑各々其分あり。花さかぬ身に安んずる柳は又心靜なるものにあらずや。世に背公の

咏として傳ふるものあり。

牛の子に踏まるな庭の蝸牛

角ありとても身をな頼みそ

蝸牛の角を以て大牛に對せんとするが、吾等を惱ます慾望にあらずや。

安分の法

彼れ畢竟我にあらず、強ひて彼に横せんとして成功すべきか、人々其業あり。これを樂む所に萬法差別の眞理は顯現せらる。俳人一茶が勸農の詞は瀟洒の筆を以て能く知足の福音を説き、酒脱の文を以て安分の教訓を垂る。

風流を樂む花園ならで、後の畑、前の田の作物に志し、先祖の賜と命の親に懇をつくし、芳野の櫻、更科の月よりも、己が業こそ樂しけれ。朝夕、心を留めて打向ふ茶種の花は、井出の山富貴よりも好ましく、麥の穂の色は、牡丹芍薬より腹こたへあるかと覺ゆ。朝顔

より夕顔ぞよけれ、萩菊よりは芋牛蒡に味あり。すべて花紅葉より栗柿は實の植物なり、
稻の穂並の賑はしく、藁の前より腹満つる心地して、粟穂に馴るゝ鶉、野邊の蟲の音面白
く、遠き名所舊跡より近き田圃の見廻りが飽きず、松島鹽釜の美景より飯釜の下肝要なり。
上作りの名劍より鎌鍬は調法なり。書畫の掛物より掛けて見る作物の肥料を油斷せず、投
入立花の工より茄子大角豆の正風なるが見處多く、茶の湯蹴鞠の遊びより澁茶を呑んで昔
語こそをかしけれ。玉の臺より茅藁の家居が心易く、高きに居らねば落つるあぶなげなく、
迷はねば悟らず、念佛の代りに業を怠らず、實義を盡くして神詣でに比し、仁者に習うて
山には木を植ゑ、智者の心を汲んで田の水加減を専らにし、珍肴鮮肉の料理より、錢入ら
ずの雑飯が後腹病める氣遣ひなし。すべて世の中は飛鳥川の流れ、昨日の淵は今日の淵と
なる如し。唐の咸陽宮、萬里の長城も終には滅び、平相國の驕りも一世のみ。鎌倉の
將軍も三代に過ぎず、北條足利の武威盡き、織田豊臣の榮も遂に一代なり。時すぎ世かは
れば誠に夢の如し。世に稀なる珍味も舌の上にある内、伽羅蘭麝もかく申のみ。樂は苦の

基、財寶は後世の障り、遊興は暫時の夢。他の富めるも羨まず、身の貧しきも歎かず。唯
だ慎むべきは貪慾、恐るべきは奢りなり。
慎むべきは貪慾、恐るべきは驕奢、我を執するが故に貪り、我を立つるが故に驕る。驕るもの
久しからざるは此文の既に云へる所、知足安分これ實に安心の法門なり。

汁 一 つ

會て水戸の武公に就いて好個の逸話を聞く。武公、水戸家相續の初めの正月、如何なる不注
意にや、汁椀に汁の盛られざりしに、膳部方の人々縁喜を祝ふ正月に思ひも寄らぬ此の失策、
やがては切腹も仰せ付けらるべきかと苦慮せしに、武公は少しも怒らず、

汁一つなくとも飯は食へるなり

足らぬを物の始めとはして

と仰せられしに、家臣等愁眉を開きしと。此事を聞き傳へられし紀州侯は

汗一つなくとも飯は食へるこそ

よろづ事足る始めなりけれ

との歌を贈りて祝意を表されしと。足るを知れば足らざるなし。足らざるなき所、これ心を安んずべき所にあらずや。

あきらめ主義

知足は安心の法なりと雖も、爲すべきを爲さず、能ふべきを欲せず、何事も諦め了らんとする消極的方法は、決して天地の理法に適へるものにあらず。彼も人なり、我も人。唯だ我其の守る所に立つと雖も、敢て彼に劣るべきにあらず。諦めざるべからざるを諦めずして、徒らに心を勞するは愚人の行爲、破れた茶碗を合せて見るの氣苦勞と同一、妄りに心を苦むるに過ぎざれど、諦むべからざるを諦め向上の意氣を沮喪せしめ、發展の精神を抑止し強ひて自己を縮小せんとするは、人生の進歩を阻害する卑怯の行動たらざるを得ず。

人格の權威

我以外に我なし。我豈に漫りに他に累せらるべけんや。我自から操持する所に立つ、黄金何かあらん、權貴何かあらん、殆ど知足安分の宣傳者の如くに見らるゝ一茶も、加州侯の權貴に屈せずして、

何のその百萬石も笹の露

と喝破せる所に、彼の人格の權威はあれ。雪潭和尚、曾て尾州犬山侯の聘に應じて禪録を提唱す。侯、簾を垂れて徐ろに之を聽く。雪潭、叱つていふ、

「柄の講釋には糟はない、灑して聽くには及ばぬ。」
と。侯、簾を撤して拜謝すと。道に志すもの此の權威なかるべからず。

大處大觀

萬物は相互微細に影響す。大局より打算すれば甲の失ふ所は乙の得る所、何をか惜み、何をか食らん、加賀の服部元好は醫を業とし頗る達觀の風あり、其家の祝融の災に遇ふや、人あり、戯れに云ふ、

「お醫者さん家の黒焼何になる。」

元好、言下に答へて、

「日雇大工の腹薬なり。」

と。心を置く此の如く大にして初めて大處に大觀するを得べきか。吾等常に我を中心とせる小範圍に局限し、一步も埒外に出づる能はずして苦慮し焦心す。此の桎梏を脱せよ、此の繫縛を離れよ、さらば汝は無礙自在なるを得ん。

本末

萬法差別の相に没頭するが故に、出離の途なきは吾等が常習なり。眼を萬法一如の體に着け

よ。もとこれ一、何の迷ふ所かあらん。一如は本にして萬法は末、末に走れば岐路百出、本を把持すれば大道坦然。相に迷うて自他の別、憎愛の差を生ずべきも、體を悟りて一視平等、猶ほ先づ鏡を明にして、萬象其影を印するが如きか。

明鏡を打破せよ

僧あり、靈雲和尚に問ふ、

「純清絶點を得る時如何。」

と。蓋し其心の明鏡の塵なきが如きをいふなり。靈雲、喝していふ、

「尙是れ眞常の流注。」

眞常の流注とは妄想亂起の義。僧大に迷ひ、更に問ふ、

「向上更に事ありや。」

純清絶點尙是れ妄想とす、此の明鏡抑も何の塵點かある。若し之をしも不是なりとせば更に

以上のものあるか。

「有り。」

有れば聴かざるべからず。

「如何なるか是れ向上の事。」

靈雲、慈誨懇切、喝破していふ、

「明鏡を打破し來れ、我、汝と相見せん。」

果然、其僧は明鏡なるものを執持して放つ能はず。心を鏡の塵なきが如くにして何の用かある。鏡は萬象を映す所に妙あるにあらずや。悟れりといふも亦迷ひなり。眞の悟境は迷悟を超越したる所にあり。

とやかくとたくみし桶の底ぬけて

水たまらねば月も宿らず

四智

佛教、四智を説く。吾等の心をして鏡の如くならしむるもの、これ大圓鏡智なり。此の大圓鏡によつて萬象歴然たる差別を看取するは妙觀察智なり。しかも其の本體に於て平等一如なるを知るを平等性智と名づけ、其本一にして其の相異なるものが、各々其用を盡して相侵さざる所を見るを成所作智とす。これ天地の心、直ちに我が心と映發せるもの、四智圓にして達觀其妙を究むるを得んか。

達人

我は天地の一員、萬象は來りて我を助く。我若し我が眼を開かば何物か探つて以て我が技を補はざらん。或鍛工は南無阿彌陀佛と無心に叩く伏鐘の音に豁然として技の呼吸を悟り、或武士は雪に壓さるゝ庭の竹の壓され壓されて勃然として立てるに滿を引いて放つ弓術の極意を自

覺し、名人といはれし俳優五代目尾上菊五郎は強請に來りし破落漢の身振を見て我藝の資に供し、義太夫語りの名手擲津大掾は夫婦喧嘩に苦慮する弟子を叱して「多くの語り物の中には女が怒る所もあらう、夫婦喧嘩の其時にも妻の素振に教訓を得ようとはせぬか」といひしと傳へられ、畫家良秀は家の焼けたるを見つゝ不動の火焰を描くの料に供せしと云はるゝ、皆其の見聞する所を以て直ちに自家の技に廻向せしもの、凡人の眼に入りては雲烟過眼視することも達人の眼に映じては其資となり料となる。

他の奇なし

技、妙に入り、藝、神に通じては、他の奇なし。奇を弄し巧を悉すは凡庸を距る未だ一步なるのみ。劍客塚原卜傳の其の三子を試みんとするや、扉上に枕を置き、入るに應じて之を落下せしむるの仕掛とし、先づ第三子を呼ぶ。彼進んで入らんとすれば枕落下し來る。電光石火忽ち腰刀を抜いて之を打つ。技の神速、人をして驚嘆せしむるものあり。卜傳これを許さず、

枕を元の如くにして更に第二子を呼ぶ。二子は其の落下し來るものを受け止めて、悠々として坐に就く。態度從容、少しも騒げる色なし。卜傳次に長子を試む。長子入らんとして徐ろに扉上の枕を見、先づ之を下して而して後に進む。卜傳見て以て我が神を得たりとす。何の妙なく何の奇なきに似て、しかも用意の頗る周到なるを見る。馬術に於ても亦相似たる一話を傳ふ。馬術者技相如く三人の門弟を試みんとし、門扉の後に悍馬を繋ぐ。初めの者の入らんとするや、馬忽ち後脚を上げて之を蹴らんとす。眞にこれ危機一髪。ヒラリと飛びし至藝は能く之を免るゝを得たり。次の者入らんとするや、馬又足を上げて蹴らんとす。其者威を正して一睨すれば馬萎縮して蹴る能はず。此の二者皆技神の如きもの。第三の者は入らんとして馬あるを知り、迂廻して進み來る。師いふ、此者以て我が奥義を傳ふべしと。到り得、還り來つて別事なきの妙此に存す。道元禪師の法を求めて宋に入るや、天童如淨禪師に參じて大悟徹底す。しかも其の歸るに當りて「空手郷に還る」といふ。此の無一物の處に無盡藏の理を拉し來りたるにあらずや。至道無難、豈他の奇あらんや。

平常心

僧あり、趙州和尚に問ふ、「如何なるか是れ道」と。州いふ「平常心是れ道」と。天地の心を體得し天地の心を行ふ。平常の坐臥もと道と相離れず。「近世畸人傳」が傳ふる所の大黒屋傳兵衛の如きは其類か。傳兵衛、家、質商を營み、慈仁の心深く財餘りあれば貧民を賑はす。中山の知真老師其の心解する所を見んと欲し、一日之を訪ひ、突如として

「傳兵衛何をして居る。」

と問ふ。彼今帳簿を手にして之を點檢しつゝあり。直ちに答へて、

「大般若經を轉讀いたして居ります。」

何の大般若經ぞ。老師笑つていふ、

「其經何の功德かある。」

傳兵衛、聲に應じて、

「日々此經を轉讀することによつて、家内餓えず凍えず、且つ貧民を恤れみ得ること偏に此の經の功德なり。」

と。日常行中此心を失はざる所に、天地の心は顯現せらるゝにあらずや。

心の識得

曹洞の道元禪師いふ、「古人曰く、若し人、心を識得すれば大地に寸土なしと。知るべし、心を識得する時、蓋天撲落し、匝地裂破するを。古徳曰く作麼生か是れ妙淨明心、山河大地日月星辰と。明かに知りぬ、心とは山河大地なり、日月星辰なり」と。玄旨幽遠、遽に識得し難きも、天地に先ちて形なく、萬象を去りて其姿を見ず、黃蘗の傳心法要にいふ「此の本源清淨心、常に自から圓明にして偏く照すも、世人悟らず、只だ見聞覺知を認めて心と爲し、見聞覺知に覆はれて精明の本體を見ず。唯だ直下無心なれば本體自から現すること、大日輪の虚空に昇りて遍く十方を照し、更に障礙なきが如し」と。直下無心の境、これ天地の心と相通する

もの。

佛とは誰が結びけん白糸の

賤の小田巻くりかへし見よ

再思三思し見よ、心裏に靈光あり、十方に遍からん。上來縷々として婆説する所、もとこれ敵門の瓦子、心の識得に於て資する多からざるべしと雖も、引用し來れる金玉の訓誨、妙悟の芳躅、これによつて幾分を窺ふあらば幸に無用の閒事業に畢らざるべきか。

何れにも置かざる心

修養の極致は全自己の顯現にあり。天地と共鳴し、宇宙と靈觸する眞我を發揮するを要す。如何か全自己を顯現し、眞我を發揮すべき。古徳いふ「佛法を學ぶといふは自己を學ぶなり、自己を學ぶといふは自己を忘るゝなり、自己を忘るゝの時、自己は萬法に證せらる」と。萬法自己を證す。これ自己と萬法と一にして不二、天地と我と相離れず、宇宙の大道と我が踏む所

と合致し、乾坤の妙用と自己の動作と何の背くなきを得ん。これ此時心ありといへば則ちあり、しかも天地に遍満す、心なしといへば則ち無し、何をか名づけて心とせん。澤庵、曾て柳生宗矩に問ふ、

「劔刃相交るの時、心を何れに置く。」

宗矩いふ、

「敵の刃の先に置く。」

澤庵、

「敵の刃の先に置くものは敵の刃に心を奪はる。」

「然らば我刃の先に置かんか。」

「我刃の先に置くものは我刃に心を奪はる。」

「されば臍下丹田に置くべきか。」

「否、臍下丹田に置くものは臍下丹田に心を奪はる。」

「畢竟、何れの處にか置くべき。」
澤庵終に斷案を下していふ、

「心を何れにも置くことなかれ、何れにも置かざる時、何れとして心ならざるなきを得べし。」
と。何れにも置かざる心、これ全心遍滿。事に應じ、機に臨みて顯現すべきものにあらずや。

陰晴共に可なり

毀譽常なきは浮世の常、陰晴定めなきは秋の空のみにあらず。徒らに心を勞して何かせん。

鐵舟、歌あり、

晴れてよし曇りてもよし富士の山

もとの姿は變らざりけり

もとの姿の變らざる所に、自己の眞骨頭は巍然として白雲の間に獨露するものあり。

借宅證

豪潮律師は近代の大徳、尾張の國龜崎正通寺に其の借宅證文なるものを藏す。文に、

借宅證文の事

一 地水火風空作り家 一 軒

右借用仕候處實證也、御入用の節は何時にても差上可申候、爲後日如件

サア、宿かへの御用心々々々

豪潮書

地水火風空は我身の要素、此の組合せになる生命、何時宿替を仰せ付かるやも知らず、御用心御用心の結尾大に振ふものあるを覺ゆ。

雅 懷

吾等の心の狭く且つ小さきことよ。一蚊一つに施しかぬる我身かな。一滴の血をも尚ほ且つ之を惜み、一握りの財も之を施す能はず、越後の良寛、飄逸にして清高、艸庵の下なる筍の縁を破つて生ひ伸びしを憫れみて之を除かず、却つて風流のすさびと喜び、落葉、庵を埋むるを見

ては、
焚くほどは風が持てくる落葉かな

と楽しむ。何ぞ其心の大なる。彼は自然を耙つて自家の用に供するの雅懐を有せるなり。

心の高さ

鏡は其形方寸なれども能く萬象の影を映す。我心小なるが如しと雖も、高く九天の上にも出づべし。此心を養ひて天地と合致するもの、何物か能く其高を争ふべき。人あり、富士見西行の圖に讀していふ、

見る人の心高きにくらぶれば

ひくさも低し富士のしほ山

と。心を把得する此の如くにして萬象を下瞰し、天地を小とするの氣宇を養ひ得んか。

人のつらさ

達觀の妙は順逆の二境を超越し、苦樂の岐路に彷徨せざるにあり。蓮月の歌に

宿かさぬ人のつらさを情にて

おぼろ月夜に花の下ふし

とあるは逆境を順化し、苦境を樂觀せるもの。しかも尙ほ故造作意の痕あり。人のつらさを強ひて情に曲解せんとする所、未だ此の二境に超越せるを見ず。近藤芳樹の之を改めて、

宿かさぬ人のつらさを忘れけり

おぼろ月夜に花の下ふし

とせば興趣一段深しといへるは、見地も亦一段高し。順逆相忘、自然にして却つて妙。

心の忙了

愚なりと知りながら、愚なることに心を勞し、想うて益なしと知りながら、益なきことに心を苦しむ。彼の迷妄の信に心裏を惑亂せらるゝ如き其の最も甚しきもの、京都の某公卿、元旦に福茶の禮を行はんとせられしに、給仕人の過つて其の土瓶を割りしかば、福破れたりとて大に怒り、其者を放逐せんと云はるゝに驚きて鄰家なる加茂幸長翁に訖を頼みしに、翁は「さてさて今朝の出来事は目出たき瑞相とこそ存じ候」とて、筆を執りて

元日にとん(鈍)とひん(貧)とを打破りて

あとに残るは金のつるなり

と認められしに、公の意も解けたりといふ。兒戯に等しき迷信に囚はれて達觀の明を缺くは凡夫の常情、よし此の如くに甚しからざるも、如何に左思右思するとも我力の左右し得べきにめらざる明日の天候を氣にして徒らに心を勞し、如何に追懐するとも還らざる過去に思ひ煩う

て苦慮百端す。吾等が心頭に掛り來る驢事馬事多くは此類。其の爲に忙殺せられて心裏一日の安なきは、寧ろ憫笑すべきにあらずや。

心の餘裕

雜念に忙了せられ、妄想に煩殺せられ、心内些の餘裕なきが故に、物に應じ事に臨みて自由なるを得ず、甲に囚はれ。乙に縛せられ、營々として獨り自から苦み、一生を空過し了る。古人いふ、

無事此靜坐。一日又兩日。

若活七十年。便是百四十。

心の餘裕

心を靜にせよ。これ心力の蓄積なり。物に應じて迷り、事に臨みて現る。常に心力を徒費するもの事に専らなる能はず、物に精なるを得ず。然らば如何に之を蓄ふべき、天地の秩序整然たるが如く我が心象を整理するより善きはなし。心象既に整理せらる。求むるに従つて出で、尋

ぬるに任せて現る。かくて閑事の心頭に掛くるなくんば、春は百花あり、秋は月あり、夏は涼風あり、冬は雪あり。便ち是れ人間の好時節たるを得んか。

春は花夏ほととぎす秋は月

冬雪さえて涼しかりけり

古歌此の福音を傳ふ。

心に任す

上來縷々として婆説し來る所、人の心の左觀右觀、讀む人、長しとするか、短かしとするか。長とし短とする、もと其人の心に任す。先賢いふ「清話濃かなる時、尺還短かく、安禪倦む處寸猶長し」と。長しと見るも可、短かしとするも亦不可なし。唯だ自から拈得する所ならば婆説の中に清話の濃かなるを聞き、冗舌の中に安禪の倦むなきものあらんか。

録附 生活と心

現實問題

修養を論じ、道徳を語る、其の云ふ所は立派であるが、さて之を實際に應用せんとすると、なか／＼困難で、理論と實際との間に非常な距離があるといふことは、現代の弊であると思ふのであります。理論は立派であるが、之を實際に應用しては如何かといふと、直ちに應用する事は、なか／＼出来ないといふやうな場合があるので、人生の根本問題を研究するといふことに就いては、高遠なる理想の問題は固より必要であるが、現實の問題としては、非常に距離があるが爲に、常に修養を論じ、道徳を語るものが、迂儒として實際家に笑はれるは免れない事でありませぬ。昔希臘の或哲學者が渡し船に乗りながら船頭に向つて、汝はオントロジイといふ事を知つて居るかと問うた。オントロジイといふのは、實體學とでも譯すべきもので、天地人生

の根本問題を研究するところの、高遠なる學問である。そんな事は固より船頭の知るところでないから、船頭は、私はそんなものは知りませんといふと、哲學者先生は、オントロジイを知らざるものは、人生の半を空過するものであるというて笑つた。さて其船が對岸に着かうとした場合に、波の煽りを喰つて、船が動揺した。其時に船頭が、貴方は水泳を御存じであるかといふ。いや俺はそんなものは知らぬといふと、水泳を知らぬものは、目下の急を救ふことが出来ぬというて笑つたといふ話を聞いたことがある。私の茲にお話するのは、高遠な理想の問題でなく、又根本の深い問題でもなくして、實際的の現實の問題に付いて、少しばかり愚見を述べて見ようと思ふのであります。

獨立生活の意義

此頃簡易生活とか質素な生活といふ事をいひますが、私は是よりも必要なのは、獨立生活といふ事であると思ひます。質素儉約といふ事は必要ではありませんが、非常な金持で、一等の汽

車にでも乗れるものが、儉約をして三等の汽車に乗るといふ、是は如何にも質素のやう、儉約のやうであります。其の爲に乗車賃を工面して、僅に三等に乗り得た人の座席を侵略するといふ傾きがあります。矢張一等に乗り得る資格の人は一等に乗り、二等に乗り得る人は二等に乗り、初めに社會の秩序も保たれて行くのではあるまいか。平等といふ思想からいへば、一等、二等など、分けるのは可怪しいけれども、既に金銭を以て分けてある以上、財産の程度で一等に乗り得る人が二等ならば、まだよいが、それが三等に乗るといふ事は、三等の人の座席を奪ふといふ弊があるのであるから、質素儉約も其人により、其の身分によるべきものがあらうと思ひます。勿論三等にしか乗り得ない人が無理算段をして、二等に乗り、一等に乗るといふやうな事は、斷じて不可であるけれども、又其の反對に一等に乗り得る人が三等に乗るといふことを考へて見ると、必ずしも褒めた事とはいへないやうに思はれます。(これも其人が自から節して他に施すといふ公の心からならば結構ですが) 要は其人が充分一等なら一等、二等なら二等に乗り得る資格があるならばそれでよい、資格がないのに乗るといふ事は

悪いといふのであるから、先づ獨立といふ事を思うて我が行動が他に迷惑をかけるか、かけないかといふ事の方を初めに考ふべき事ではあるまいかと思ふのであります。抑も人間といふものは、獨立々々というても、眞の獨立といふ事は出来るものではないので、是を自分の生活の上に見ても、衣食住ともに他人の力によつて出来て居るのでありますから、自分の喰ふ物、着る物、住ふ家、皆自分の力ばかりでは出来ないであります。只自分がそれに對して、相當の報酬を拂つて他より得て居るものでありますから、自分の力で出来たやうに思ふのであります。が、何もかも自分でするといふ眞の獨立ではないのであります。さればこゝで獨立といふのは、他に厄介をかけずして自分が生活して行くといふことを程度として見ねばなりません。他に厄介をかけず、眞に社會の共同生活たる、持ちつ持たれつして行く事が出来るものを、初めて獨立といひ得るので、自己の利益の爲に他に迷惑をかけ、若くは自己の行爲の爲に社會に害を流すといふやうなものは、眞の獨立ではないのである。如何に自分勝手であつても、其事が人に害を及ぼす以上、我々は是を止めなければならぬ。他に厄介をかけるやうであつては、

是は即ち依頼であり、依立であつて、獨立ではないのであります。さて此の獨立生活をしようとするにつきましては、第一に考へなければならぬ事は、生計の獨立であります。

生計の獨立

即ち他の厄介にならずして自分が生活して行くといふ事、更に委しく云へば、自分の額に汗を流した金錢を以て自分の生活費を支へて行くといふ事であります。自分は何等の勞力を爲さず徒食して世にある人であるならば、假令巨萬の富ありといへども是等は是を以て獨立生活をして居るとは云ひ得ないのであります。獨立生活といふのは、自分の額に汗して自分が生活して行くといふ事であるならば、獨立生活の第一には借金をせぬといふ事を要件とせなければなりません。

借金

借金といふものは必ずしも悪いものではない。若しそれが生産的に融通せられるのであるならば、それは資本となるもので自己に労力ありといへども資本なし、他に資本ありといへども労力なしといふ場合に、他の資本を借り来りて、これに自己の労力を参加して、さうして富の生産を計るといふ事は誠に結構な事でありませうけれども、單に自分の衣食住の生活の爲に他に金を借りるといふ事が茲に所謂借金で、其の借金は他人の金錢を以て自己の生計を営むのでありますから、他に依つて立つので獨立ではありませぬ。かく云へば、イヤ如何に借金をするとも、それは利子を自己が支拂ふのであるから決して厄介を掛けるのではないといふ人があるかも知れぬが、それは借金を返済して後に揚言し得べき事で、借金中に云ふべき事ではない。それが果して返し得るか否か返した後でなければ判らぬのでありますから、借金をして居る場合には矢張り厄介になつて居るのであります。殊に自分の生活費に供するが爲に人に金錢を借りた者が立派に其借金を返すだけの餘裕が何時來るであらう。借りる時は返すつもりでも、生活の餘裕はなか／＼生ずるものではないのでありますから、獨立生活の劈頭には借金をせぬといふ

事を第一番に考へなければなりません。と斯ういふと、イヤ人間には不時の事がある、自分の病氣もあれば、又家族の者に病氣もある。其の不時の場合に借金をするといふ事は已むを得ぬ事ではないかといふ人もありますが、是は一應御尤もな事ではありますが、併し己に人生に不時の事があるといふ事が豫想せられるのであるなら、何故豫め其の不時に備へて置く所の貯蓄をせぬのでありませう。

貯蓄

不時の事があるから借金をする権利があるといふのは決して主張にはならぬので、己に不時の事があるといふ事が分るなれば、何故豫め貯蓄をして置かなかつたかといふ反問が來るのであります。といふと、それは餘裕があれば貯蓄も出来るけれども、日々の生活に追はれて餘裕がないから貯蓄などは到底思ひもよらぬといふ人がある。併しそれも妙な議論で、日々に餘裕がある人であるならば貯蓄を爲なくてもよい譯である。餘裕がないから貯蓄の必要があるのち

やないか。實際人間の生活といふものは其の仕方がいろ／＼あつて、十圓でも生活は出来るが百圓でも生活は出来る。少しの収入でも貯蓄をして居る人もあれば、多くの収入でも借金をして居る人もあるのである。人生不時の事があるといふ事が明白の道理であるならば、其の不時の事に備へるといふ事は我々の豫算の中に加はるべき當然の事ではありますまいか。されば如何にして貯蓄すべきか、それには生活費を成るべく減少して行くといふ事、いはゆる簡易生活とか、質素生活といふことの必要なは此處のことでもあります。百圓の収入を得る者が九十圓で生活するとか、若しくは八十圓で生活するといふやうに多少餘裕を置くといふ事を考へなければならぬのであります。かくして其の残つた處、其の差額を以て不時の費用に備へるといふ風にして貯蓄が出来るのであります。確か金森通倫氏の「貯金のすゝめ」に書いてあつたことだと思ひますが、人間の身體は濡手拭のやうなもので、一見すると水は無いやうであるが搾れば水が出る。我々の生活といふものは一寸見ると金がかゝつて居らぬやうであるが、凡て皆金銭で出来て居るのであるから、何處でも搾れば即ち金が出て来るのである。喰ふ所の飲食

物も二汁五菜を一汁三菜にし、一汁三菜を一汁一菜にし、着る着物も、御召を絲織に、絲織を銘仙にすれば皆些少の儉約によつて、貯金の金はこぼれ出るのであります。然るに生活を自分の思ふ儘にして、さて残れば貯金を爲ようとするから餘裕の生ずる時がないのであります。貯金を先にして了つて後の残りで生活するといふやうな事にしたならば、生活の方は如何やうにも加減せられるのであります。是は借金に對しても同一のことで、借金のある人が自己の金も餘つてから返さうとしては逆も返せるものではない。生計費は幾らにも縮少が出来し、又膨脹も出来る、膨脹し縮少し得る所のものを先にして、如何ともすべからざる借金を後にするといふのは大なる過りである。先づ初めに借金の返済すべきものを引いて残りを以て生活する。即ち縮少し得べからざるものを先にして、縮少し得べきものを後にするといふ事が必要ではあるまいかと思ふのであります。是が出来て初めて生計の獨立が出来るのであります。

三 養 生

古人が三養生の説といふものを説いて、第一は心の養生、第二が身の養生、第三が身代の養生というて居る。身代が悪くなれば心が悪くなる。心が悪くなれば身體が悪くなる。身體が悪くなれば心配をするから心が悪くなる。心が悪くなれば身體が悪くなる。身體が悪くなれば身代が悪くなると、いふやうに此の三つは恰度一つの輪の如くにくるく廻つて居るものであるというて居ます。曩に云うた生計の獨立は所謂身代の獨立で、此の身代の獨立といふものを計らうとするには矢張り身體の獨立といふ事を考へなければならぬ。身體の獨立といふのは外の事ではない、即ち我が身體をして他の厄介とならしめぬやうにするといふのでありますから、常に身體を健全にして、額に汗して生活し得るやうにせねばならぬので、彼の病氣になつて醫者の厄介にたる場合には、已に獨立でないのは云ふまでもなく、其間は自己の生産が杜絶して居るのであるから、其の生活は他の厄介にならなければならぬこととなるのでありますから、眞に獨立生活を營まうとするには、衛生を重んじて身體を健康にするといふ事を忘れてはなりません。何うせ人間は死ぬる身體と

極つて居つても、生きて居る間は世の中の爲め、人の爲に働かなければならぬのが人の義務である。「磯までは海人も養着る時雨かな」海人は海中に飛び込むのであるから、別に雨が降つたからというて蓑を着て行くには及ばないのであるが、いづれは海に飛び込むべき者でも磯までは蓑を着て行かなければならぬ如くに、いづれは死の大海に没するものであつても、生きて居る内は衛生を重んじて行かなければならぬのである。何が故に衛生を重んじなければならぬか、即ち吾々が生きて居る間は社會の爲め、人の爲に働くといふ事が人間の本務であるからであります。若し世の中の爲め、人の爲に働くといふ事がなければ、自分は世の人々に多くの恵みを受けて居つて、それに報ゆる處がないから、他の厄介になつて居る事になる。即ち獨立生活でなくなるのでありますから、獨立生活を完全にしようといふのには所謂世の中の爲め、人の爲に働かなければならぬ。昔、盤珪禪師は、「君子、一日生れば一日世に利あり」というて、身體を重んぜられたといふ事でありませう。かくて身體の獨立を計り、而して精神の獨立が出来るのであります。

精神の獨立

「健康なる精神は健康なる身體に宿る」で、矢張り身體が丈夫でないところに弱い所があり、金を人に借りて居ると云ひたい事も云はれぬやうな目に遭ふ事がないとは云はれぬのであるから、眞に思想の獨立を計らうとするには、身體に於て、生計に於て他の厄介にならぬといふ事が最も必要であります。思想の獨立とは、人を對手にせずして自分を對手にして仕事する事で、人に譽められたい、人に悪くいはれまいとか、人に誇りたいとか、人に誹られまいとかいふやうな考へでする仕事は、外見皮相の爲の仕事となつて、自己の爲の仕事ではなくなる。人は如何に言はうとも、世の中は如何に我を笑ふとも、自己の衷心に満足する所があればそれでよいので、此の自己衷心の満足といふ事を主眼として行くなれば、眞に思想の獨立を計ることが出来るのであります。人が如何に悪く云はうとも、自己の衷心に満足する處があるならば、人間是れ程貴ぶべき事はないので、萬金を以てしても奪ふべからざるものは自己の衷心の満足であ

公共の思想

る。古來の豪傑が白刃の下に立つて從容として死についた所以のものは、自己の衷心に満足があつたからであります。人間の仕事には様々ある、其の様々な仕事に於て自分が誠心誠意を盡して、それに自己の衷心の満足を得て居つたならば、實に是れ貴ぶべきものであります。吾は此の千金萬金を以ても買ひ難き衷心の満足といふ事を主要として世を渡らなければならぬのであります。仰いで天に恥ぢず、伏して地に恥ぢずで、自己自から自己の爲すべき所を以て敢て他に累せられぬといふ事が大丈夫の本懐である。此の精神を以て働いて行く上に於て、此處に獨立生活は完成するのであります。即ち心の獨立は身の獨立であり、身の獨立は身代の獨立である。身代の獨立は身の獨立であり、身の獨立は心の獨立となつて行く。即ち三養生が一つである如く、此の一致によつて思想の獨立が完成せられるといふ事が出来るのであります。

併し是は目前の境遇に就いて自己を推論したので、更に眼を開いて見ると我々の生活といふ

ものは、二重三重に世の中の厄介になつて居るもので吾等は家族の厄介になつて居るばかりでなく、町村自治體の一員として、町村の厄介になつて居るのであるし、更に國家の一員として國家の恩恵に浴して居るのであり、更に廣く世界人類の一員として世界の文明の恩澤に浴して居るのであります。之を考へると考へないとで人物の大小が別れるので、自分だけの獨立も出來ない人は論外であるが、自分だけの獨立が出來て居るといふだけでは未だ大とするに足らぬ。自分を思ふが如く其家を思ひ、其家を思ふが如くに其の町村を思ふ者は稍大であり、一歩進んで自分を思ふが如く國家を思ふ者に至つて、眞に國民として立派な獨立の人格を有つて居るといふことが出來ます。今一層廣くして自分を思ふが如く、世界人類を思ふ、即ち釋尊が「一切衆生は我子なり」と觀ぜられた如く、其の大なる慈悲、大なる抱負を以て行くといふ事が大人物の爲すべき處であつて、また爲された處であります。であるからして、これを世界的偉人といひ、之に次ぐを國家的偉人といひ、更に郷土的偉人とも云はれるのであるから、只だ自己の事をのみ計らずして、進んでは町村、國家、世界の人類といふやうに、廣く世の中の爲を計

る。即ち公共心を以て行くといふ事も、また獨立生活をなすに必要なことであります。我々が世界、國家、町村に厄介になつて居る以上は、それに對して報ゆる所があつて初めて獨立が出來るのであるから、獨立心と公共心とは決して相背くものではない。先づ自己の足下を定めて、而して漸次に公共事業に及ぶといふのは現實から立つて居たのである。昔の志士仁人が、自己を振捨て、公共の爲に盡したいといふのは自己の志す所の爲に一身を犠牲に供したのである。我々は是等を手本として先づ手近い所から、人の厄介にならぬといふ事を第一に考へて行くといふ事が尤も必要であります。此の精神があつて、簡易生活も出來れば、國家の良民として立つて行く事も出來るのである。我々は此の卑近の事、此の平凡な事を先づ第一に心掛けて行くといふことを忘れてはならぬと思ひます。

生活を樂しめ

さて此の心掛けを持つて生活するのに、いろ／＼の區別がある。こんなことを爲るのは嫌だ

が爲ねば人が悪くいふからやるといふのは、人を相手とするので獨立の精神から出たのではないのは云ふまでもなく、これは人間の義務であるからせねばならぬといふのも、尙苦痛が之に伴うて眞に自己衷心の満足を得て居るのではない。今日も亦働かねばならぬかと思へば義務の觀念が遺つて苦痛の情が伴ひますが、何の幸ひぞ、今日も亦健全に働けるかとの感謝の念を以て暮して行けば心は常に樂めるのであります。物は心の持ちやう、嫌と思つてもやらねばならぬ、寧ろ樂しく面白く此の生を計るといふのが必要ではありませんまいか。それには心寛く體胖かに、各々其業を樂み此の生活をして趣味あらしむるといふことを第一とせねばなりません。

修養小品

生は力なり

如何に生くべきか

生の執着

人生喫緊の問題は如何にして生くべきかの問題である。「生きんが爲めに努力するとも終極は死の外はない。死は人生の大團圓、吾等の生活は一步々々此の大團圓に近づくに過ぎない。夢の如き生何かあらん」と悟り済ました説教を聴いても、吾等の本能は直ちに生の努力を抛つて死に就くを許すほど薄弱なものではない。「夢と諦めりや何でもないが、其處が凡夫でねえ貴方。」吾等は悟り済ました哲人ではない。深く生に執着を有する凡夫である。凡夫の凡情と笑はば笑へ、吾等の努力の大部分は、——否、寧ろ全般は——生きんが爲めの努力である。渴して飲を求め、餓えて食を求むる、此の自然の衝動も其の根柢には生を欲する吾等の根本本能が

存するからである。此點に於て吾等は他の動物と何の異なる所もない。たゞ吾等の異なる所は此の生を有意義ならしめ、此の努力を有效ならしめ、此の生活に一段の進歩を求めんとする意識を有するからである。此の意識あるが故に吾等は禽獸の如く蟲魚の如く、徒らに食ひ徒らに飲むことを思はずして、其の中に自己生存の意義を求めんとする高尚なる情操を有し、此の情操と生の執着との紛糾葛藤は幾多の人生問題を惹起し、世態をして益々複雑ならしめ、此の自から複雑ならしめたる世態の中に立つて如何にして生くべきかの問題は、更に新に吾等の當面に肉薄し來る。自繩自縛、自から結んで自から解けず。此の難問題の迷宮に没頭して出づる能はざるが現代生活の實狀ではないか。

自繩自縛

吾等は自由を愛す、しかも吾等をして心の儘なる自由を遂げしめざるに至りしは、吾等自らが組織せる社會の規制ではないか。道德は人類の自らなる情操の開展として生み出され、善に隨喜する吾等が自然の性情より造り成されたるもの、而して吾等が生活の自由は之が爲めに縛らるゝことなきか。吾等は吾等が生活の利便を思つて人と協同し、相寄り相集つて此に社會を形成し、此の社會の爲めに多くの義務を負担せられ、吾等の自由は之によつて制限せられ、吾等の擧手投足は之によつて意の如くならざるに至りしにあらざりしか。

吾等の求めて已まざる欲望は我が生活の範圍を擴充して今日の文明を現出し、此の文明の爲めに吾等自から其の生活を壓迫せらるゝに至りしにあらざるか。最も自由なる生活は文明と絶ち社會と絶ち、獨り自から世外に超然として吾、我が生を營むにあり。此時に當りては遠慮なく會釋なく、吾は獨り我が思ふがまゝに行動し、所謂飢ゑ來れば食ひ渴し來れば飲み、醒睡二つながら意の欲するに任し得べけれど、其の飢渴を醫するの料は、如何にして求め、其の雨露を防ぐの具は、如何にして備はるべき。こも吾自から之を供給すとせば、我が努力は尋常にあらず、尋常にあらざる努力を以て漸くに贏ち得る所は僅に飢渴を防ぎ雨露を凌ぐのみ。情を矯め意を殺すにあらざれば満足は得難く、沉んや外より來つて我が生を妨げんとするものある

に至つては、吾自から鋒を取つて之に對せざるべからざるをや。他に累せられざる生活は尤も自由なるが如くにして尤も不便なる生活である。吾等の社會は此の不便を補はんとして起り、現代の文明は此の缺陷を救はんとして出づ、世と絶つて満足なる能はず、世に處するも自由なるを得ず、吾等は何れにするも自縊自縛を免れざる生存の渦中に没在するのである。

自由と束縛

吾等は吾等が生活を利用ならしめんが爲めに社會團結の中にあり。其の社會の更に其の結束を鞏固にして國家組織となるや、吾等は其の權威の下に生活の安固を得べけれど、此の生活の安固のためには吾等の自由は或點まで束縛を餘儀なくせらる。國家若し絶對の自由を許さば各人其の自由の爲めに相軋らざるを得ない。自由は束縛に伴ひ、他の束縛は我の自由となり、我の束縛は他に自由の範圍を與ふ。一人の自由の爲めに他の凡てが束縛に甘んぜざるを得ざりしは專制政治の弊害にして、其の時代に於て民衆の自由は、君主の恩恵、生殺與奪、常に一人の自

由意志に存せしも、吾等が自由の要求は此の不合理を許さずして終に立憲の政治となつて治者と被治者との權限を明かにして、漫りに個人の自由を傷つけられず、吾、我が自由を尊重する如く、又他の自由を尊重せざるべからずて相互的なる社會を産み出すに至つたのであるが。其の我が自由を尊重するが如く、他の自由を尊重するは、これ我が自由に制限を付し束縛を與へるものたるは疑ひを要せない。現代の規制は相互的である。吾、他によつて我が權利を擁護せらるゝが如く、吾も亦他の權利を擁護せねばならず、吾、他によつて我が人格を尊重し得るが如く、我も亦他の人格を尊重せねばならぬ。此の相互的なるもの即ち相互の束縛となり犠牲となるのではないか。

脱離を許さず

かゝる小面倒なる社會に生存するを欲せずとして、全く脱離の生活を企てたる哲人は、古代に於て之なきにあらざりし。彼等は情を矯め意を殺し、草根木皮に生を營みたれど、文明の

風は津々浦々を訪れ、野の末、山の端までも生活難の迫り來つては、又此の世と離るゝを許さず。仙人も食を求むるには努力を要し、哲人も生きるが爲めには世と接せざるを得ざるなりては、厭はうとしても厭ひきれぬものにあらず。箕山の下にありし許由も今ならば立退きを請求せられ、首陽の山に蕨を食ふ伯夷叔齊も、蕨の所有權を云々せらるゝを免れず。所詮生きたんが爲めには山を下り、食はんが爲めには何等かの努力を費さざるを得ない。哲人已に然り、況んや生に執着深き吾等に於てをや。此に於て如何にして生くべきかの問題は二たび吾等に肉薄し來る。

職業の選擇

利便を求めて人類の産み成せる社會は、さほど厭ふべきものではない。吾等が生を営むの道は多くの方面に開かれて居る。吾等は最早自から耕し自から織り自から築くの不便を脱離して、細密に區別せられたる分業の恩澤によつて吾一事の社會に貢献するあれば、社會は之に酬ゆる

に我が生存の資を以てし、此に我が生活の安固を興ふ。此に於て如何に生くべきかの問題は如何なる業に就くべきかの問題と轉化し來らざるを得ない。必要は發明を生む。社會の進歩は必要に應じて新なる職業を分化し來り、複雑より單純に向ひ、分化に分化を生じ、分業に分業を産み、單に農といひ商といひ工といふ中にも幾多の分類あり。これら經濟機能に關するもの、外に、政治機能に屬する官吏あり公吏あり、其の官吏の中に分科あり、公吏の中に種類あり、教化機能に關する教師あり僧侶あり、其の中亦多くの分類を生じ、其他自由業と呼べるもの、趣味娛樂に關するもの等、殆んど算し盡されざるほどの多數に達し、尙ほ新たな必要は新たな發明を産みて、新しき職業は續々頭を擡げ來らんとす。されど仔細に社會は何が故に此の如く、多くの職業を生み、又生まんとするを考ふるの時、吾等は凡てを通じて同一目的の下に存するを認めざるを得ない。それは協同生活を利便ならしめんとする必然の要求が齎せる結果にして、苟も其の利便を傷つけ、其の利便を妨げんとするものあらんか、社會は其の權力によつて之を除外し、若くは自然の法則は其の不適者を劣敗せしめねば止まぬからである。業

に貴賤はなく、苟も社會の協同生活を利便ならしむるものであるならば、社會は之に相當の敬意を拂ひ、其の努力に酬ゆる所あるべきである。吾等の業を選ぶは此の一點に着眼するを必要とする。併しこゝに問題は残る。それは社會は果して公平に其の努力に酬ゆるか如何かである。

問題の社會化

社會を公平ならしめんとするは人類の努力である。併し今は尙ほ其の理想には達して居らぬ。過去の因襲や、現在の習慣に囚はれて幾多の不公平は其の間に存在して、功なくして多くの報を得、功あつて酬いられて居らぬものもある。彼の經濟上に於ける資本家と労働者との生産分配の問題も社會上に於ける貧富懸隔の問題もこれから起るので、努力と報酬との均衡を得せしむるは社會改良の根本問題で、吾等の生活は之によつて平安を得るのであるから、吾等は生活問題の根柢として此の社會を改良して行くといふことに努力せねばならぬ。此の社會

は他人の社會にあらずして吾等の社會である。吾等の社會は吾等の手によつて改められねばならぬ。漫りに世は是れ缺陷、不公平は社會の常習として超然たるを許さない。吾等は社會に生くるのである。社會は吾等の身であり、家である。濟世利民の思想は此に於て起り、國を愛し時を憂ふるの氣概は之によつて生ずるのである。吾等が我が生を執着するが如く、此の國家に執着し、社會に執着せねばならぬ。

理想體現の努力

此の執着は、やがて吾等をして國家の爲め社會の爲めに生の執着をも抛たしむる最高道義を生み來るのではないか。吾等の命は短く國家の命は長く、吾等の生は須臾にして社會の生存は永劫なり。個人に死して國家に生き、個人に没して社會に存し、其の生命をして永劫ならしめ、其の生存をして意義あらしむる氣高き情操は、これより送り出づるではないか。此の情操に立つて、さて吾等が日常の生活を回想し見よ。吾等が營々として働くは吾等が爲めのみにあらず

して、更に大なる吾等が團體生活たる國家と呼び、社會と呼ぶ永劫の生命の爲めではないか。國家と呼び社會と呼ぶを以て卑近なりとせば、吾等は更に廣く更に長へなる天地と呼び宇宙と呼ぶも亦可し、蓋し、天地に生を稟くるものゝ生活には自から三段の階級あり。草木は唯だ無意識的に生活し、動物は稍意識的なるも目的意識の存するなく、たゞ人のみ目的を立て、其の生活を意識す。其の目的なるもの、やがて是れ天地の心、宇宙意識の顯現したるものにあらざるなきか。宇宙の意識を體し、天地の心を心とする。こゝに人類の絶えざる進歩の要求となり、理想を追隨して止まざる此の心、直ちに宇宙と恒久に天地と永遠なるべく。吾等が社會の協同生活を助くる經營は直ちに是れ天地の化育を助くるではないか。吾等が生活を利用ならしめんとする努力は直ちに宇宙の理想を體現せんとするの努力ではないか。吾等能く此の理想に安住するを得ば、如何に生くべきかの問題は直ちに解決せらるゝのではなからうか。

自由の天地

乞ふ吾等をして高遠の理想を藉り來つて當面の問題を瞞過せんとするものと爲す勿れ。此の理想の體現は、吾等が日常生活に於て營み得べきことではないか、吾等は吾等が生存する社會の一員として、其の協同生活を利用ならしむるの業を選び、心を専らにして之を勵む、此の簡單なる道心は、やがて衣食を生み、吾等の生存を支持するの料を供給するの本となるのではないか。唯だこゝに考ふべきは、吾等が生活の向上を希圖する絶えざる欲求は、常に現在に満足を感じて、煩悶し懊惱し、單なる生活の支持に満足せず其の爲めに現在の職業を外にして、已に生きつゝ尙ほ如何に生くべきかの問題を提呈し來るの面倒を敢てするの一事である。不満足は進歩の母、これによつて社會は改良せられ、人類は發展するのであるから、不満足必ずしも不可なしであるが、自から進むの道を講ぜずして進まんと欲し、自から伸びるの策を講ぜずして伸びんとしても、發展の門は開かるべきではない。吾等は吾等が現在の境遇に於て其の生活を支持するの計を立て、こゝに安立の地歩を占めて徐るに向上の策を立つるの心的修養を要する。此の修養なきものは心に一日の安なく、功を急いで其の生活の根柢を失ひ、流離困頓、

徒らに苦みて何の爲すなく、終には自己の爲めに協同生活を犠牲に供し、社會より疎隔せらるるに至るか、終身怨嗟の聲を絶たずして何の意義なき生活を送らざるを得ない。吾等の生活は如何ほどにも低減せらるべく、吾等の心は如何ほどにも高尚ならしむべし。高尚ならしむべき心を低減し、低減せらるべき生活を向上せしめんとする無謀の計畫は自から自己を苦むるの外に何の功はない。カーライルいふ。「人生は分數の如く分母を小さくすれば分子を大にしたると同じく其の價値を増すことを得べし、吾等の幸福も慾望てふ分母を小さくすることに於て其の價値を増加することを得」と。二分の一も、四分の一も、八分の一も其の分子は等しく一であるが其の價値は同日の談でない。此の價値の差は全く分母に由るので、分母の小なるほど其の價値を高め得る如く、吾等が慾望を小ならしむるに従ひ、吾等の生活の價値は増大するのである。吾等は此點に於て克己生活の放縱生活に優るものあるを認む。更に此の分數の譬喩を精神生活と物質生活とに見るを許さば、分母たる物質生活を簡易にすれば爲るほど分子たる精神生活を高くし深くすること、彼の所謂財に貧にして道に富ましむる高尚なる生活を営み得ること

を標示したものと云ふことが出来る。吾等を繫縛するものは物質生活の妄想である。吾等は此の妄想の爲めに斷えざる苦痛を受けて居る。此の妄想を除却して眞に生活の意義を捕捉する時、吾等の前に自由の天地は開かるるのである。現實生活に於ける吾等の解脱は暫くこゝに止め、更に社會的解脱の方面に考を運らさねばならぬ。(乙卯六月)

機械化せられたる人生

機械の奴隸

人は靈的活物、他によつて枉げられざる意志の自由もあれば、強力によつて動かされざる崇高の氣節もある。此の靈的活物を強ひて人爲の淘鑄に容れ、物質の如くに取扱ひ、機械の如くに動かしめんとするが現代文明の弊害ではないか。

文明の進歩は自然の克服なりといふ。しかも其の克服し得たる自然力は、これを機械なる物

質的死物の中に捕へ、これに活力を與へ、人は却つて第二位に立つて其の補助者たるに甘んぜざるを得ざりしに至つたのではないか。機械の發明は人の靈力なるべきも、多數の人は其の奴隸となつて生を送つて居るのではないか。手工は機械に奪はれ、屹々として一人一日一個を製し得たりし工藝品も機械の力は能く一人——然り機械の奴隸となる一人——を使用して幾百個を生産し得るに至つたのは文明の進歩に相違ないが、手工時代の古雅な、其の一人に製作者の個性の仄見えたるものは、悉く均一せられ一樣の形式を以て市場に上る。便といへば便なるも、人としての力は多く没却せられ、機械としての力のみ認めらるゝに至つたのは、人、機械を作り、機械、能く人を征服する奇態の現象を示しつゝあるためではないか。善く云へば機械の補助者、悪く云へば機械の奴隸たる職工の生活は全く機械的である。彼等は毎朝定められたる時間に出で、定められたる機械を動かし、定められたる時間に退き、一日又兩日、同一事を繰返して、其の以外に一步を出す能はず、其の職工を監督するものも亦職工をして機械の如くに働かしめんとして、自己も亦機械の如く動く、此間何の靈的活物の權威の認めらるべきものがあるか。

堅い人

らうか。しかし之は單に所謂職工のみではない。現代人は皆廣き意味の職工である。

これらは狭義の機械、目に見ゆる機械、更に廣く人生を見れば、世の進むに従つて吾等は無形の機械たる規律といひ、順序といふものに縛られて、心ならずも定められたる徑路を辿り、強ひられたる規律に服せざるを得ない。文明の紳士は訓練せられざるべからずと、自己の本能を抑制し、個性を屈服せしめ、他と相同じき淘鑄の中に入り、定められたる規律以外一步を出でざる所に、其の面目ありと云はゞ、これ自由奔放の靈力を奪ひ去られたものではないか。今の世に珍重せらるゝ氣頂面の人とは機械の如くに動くべきに動き止るべきに止り、與へられたる規律を守り、定められたる順序による人の別名であり、堅い人とは木石の如く物質的に存在して居るものではないか。規律なき自由は放縱、順序を無視したる奔放は紊亂の本、吾等の取る所では無いが、何事も機械的にのみ之を定めて、人を見ること物の如き觀あるは決して人生

の幸福ではない。

生活の眞義

便利を望むは人の世の常であるが、五十三躰、一簣一笠、長汀曲浦を歩みつくすの趣味と、貨物の如く汽車の中に箱詰せられて眠るがまゝに送らるゝ便利とは、人間生活を意義あらしむる上に於て、何れを長とすべきでめらう。時は金なりとして飯食ふ時間も惜みて營々として働き、働き終つて墳墓に赴くこと、活力衰へて機械の破れ了るが如き人生と、我が好む所に従ひて毫も他に拘束せられず、悠々として生を送るものと何れを生甲斐ありとすべきか、何者にか追はれ追はれて終に疲れ果て、倒るゝ人生と、心の欲する所に従うて財貨にして道富むを誇る生活とは、何れか貴ぶべきであらう。人生の爲めの機械、人間の爲めの物質、これに役せられて之を役するを知らざる現代生活は禍なる哉と云はざるを得ない。自由の爲めに設けた規律であるのに、此の規律の爲めに縛られて自由を享受する能はざるは本末輕重を誤るものと云はざるを得ない。

と云はざるを得ない。

物を以て人を計る

今の世の本末輕重を誤るは、嘗に之のみではない。物を以て人を計り収入の多寡によつて人物を上下し、財産の程度に應じて其の持主の人格を定め、甚しきは衣服によつて其人を評價し、持物によつて其人の優劣を判断し、見得べき外形をのみ頼んで、見易からざる人の靈格を重んぜず、これ全く人を物質化するものではないか。既に物質を以て人を見る、其の動作を機械的ならしめんとするは自然の結果にして、人の靈力は、かくて日に月に葬り去らるゝにあらざるか。

死物と活物

治者の自由意志を以て法を定め、これによつて個人を規定するの横暴なるを認めて、容易に

變改すべからざる法律を制定し、法に明文なきものは之を論ぜずとしたるは、一段の進歩であるが、死物の法を以て活物の棲息せる社會を規定し、裁判官を以て法典の字引の如くする現時の制度は、必ずしも活社會の活事實を裁斷すべき適當のものとは云ひ難い。活用は人にあるべきに、人の却つて法に束縛せらるゝ現代の制度は、靈的活物を容るゝには充分の安排を試みねばならぬ。安排なくして萬事を之に律せんとするは人を機械視するものと云はねばならぬ。刑法上の新主義の唱道せられ、新しき唯心説の法曹界に認めらるゝに至つたのは偶然のことではない。

弊を矯めて弊に陥る

現代の文明は確に過去の弊を矯めて一段の進歩を計つたのであるが、其の爲めに長所をも併せ葬つて人生を物質化し機械化し、暖かき人の世を殺風景ならしめ、靈的活物を扱ふこと死物同様に爲したのは、角を矯めて牛を殺すと同じき現代の弊である。新しき文明は人をして人

たらしむる自覺に出發せねばならぬ。機械化せられたる人生に一段の靈力を與へ、意義あり生命ある眞人生を現出せしむるは吾等の任務である。(乙卯三月)

人生の矛盾

人生の二面

赫々たる太陽の光、我が地球を熱して、地上の水蒸氣は空中に吸収せられ、寒冷なる空氣に遇うては凝結し、雨となつて我が堅硬なる地殻を潤して細微の土壤たらしめ、植物は其の土壤の上に生育し動物は此の植物によつて生を保つ。宇宙は整齊統一せられ、微も相通じ、細も相和す。草の葉に置く露も、全遊星の排置に基因し、風に玉散る光景も、天地の運動に關せざるはない。自己を中心として宇宙を考察すれば、萬物皆來つて我を助け、我を補ひ、我を養ひ、我を育す。青葉若葉の日の光、蕭々として降る夜の雨、野を驅ける獸、空飛ぶ鳥、道の邊の一本

の花、鬱蒼たる山頂の木も、或は食卓の上に来り、我は防寒の具となり、雨露を凌ぐの料となる。更に眼横鼻直我と類を同じうするものに見よ。業を異にし職を別にし、皆我が生活を助くるものにあらずや。天地は慈悲の顯現、社會は同情の結合、我は此の慈悲の懷に抱かれ、同情の手に育まれる。此の如くに天地人生を觀察するは確に其の一面たるに相違なきも、他の一面には全然これと趣を異にする觀察の逸すべからざるあり。太陽の求心力、地球の遠心力、今しばしは相互の均衡によつて悠悠として我が地球は其の周圍を運轉すれど、弱の遂に強に及ぶべくもあらざれば、我が地球の終局は氣水の吸収によつて寥々たる荒野と變ずるか、陸地の磨滅によつて海洋の氾濫を蒙るか、抑も亦太陽の燃料に供せられたるかの外なきは科學の推定する所、よしや是れ遠き將來の出來事とするも、一切の生物は常に自然と争ひ、風雪と戦ひ、雨露と闘ひ、幾多の危害は生命の上に加へられ、多大の犠牲は自然力の爲めに拂はれ、其の又生物は互に相争うて弱の肉は常に強の食となり、生存の軋轢は彼の草の葉に棲む小蟲を捕へんとて戰鬥準備せる蟻螂あれば、これを覘ふ小蛇の身構ふるあり、其の虛に乗じて小蛇を突かん

とする鳥あれば、其の鳥に空氣銃を懐せる小兒あり、殊に其の生活方法を同じうする同類の間に於ては互に他を排して自から保たんとする競争は日夜に絶えずして、修羅の巷に等しきは天地人生の當相にして、もし寸毫だに心を許せば一敗地に塗れて其の生存だも保つ能はざるに至る。何の慈悲ぞ、何の同情ぞ。天地は我を壓迫し、萬物は我を危害す。

此の二面の觀察は古來人生觀の岐るゝ所にして、臆げに協同の方面を見たるものは人生を樂觀し、痛切に競争の方面を見たるものは人生を悲觀す。如何に悲觀すればとて人生の協同の方面あるを逸すべからず、如何に樂觀すればとて人生に競争の方面あるを忘るべからず。悲觀するものは其の協同をも外敵に當るの必要によつて産み出されたるものとし、樂觀するものは其の競争をも樂境に至るの道程とす。其の立脚する所異なりと雖も、所詮人生に此の矛盾あるを認めざるを得ず。

二面の交錯

徐ろに社會成立の起原を辿れば、吾等微弱なる動物が此の廣漠たる地球の上に生れ、他の巨大にして有力なる動物の侵害を防ぎ、僅に食を求めて生存せんとするに當りて、個々の力の足らざるを思ふにつけて血族相結び、其の集合の力を以て外敵に當り、同類は同類と意識して人は人と相依り、こゝに共同生活の萌芽を生じたるは疑ひなけれど、其の協同に於ても優強なるものは常に劣弱なるものを統率して、こゝにも競争の實を寓し、其の統率によつて協同を鞏固にし、此の鞏固なる力によつて他の協同の軟弱なるものを服し、部落と部落との争鬭となり、勝ちたるものは之を併せて同一協同の範圍に置き、漸次膨脹して名づけて以て國家と爲すべきものに至り、一の國家は又他の國家と争ひ、興亡起伏幾千年、或は分裂して數個の國家となり、或は合致して一國を成す。過去の歴史は協同と競争との錯綜にして、時に競争によりて協同の道を開けて鼓腹の樂みあるかと見れば、時に協同の爲めに競争の端を生じて鮮血淋漓の慘狀を呈す。これ實に部落と部落、國家と國家との間のみにあらず、個人と個人との生活狀態に於て此の二様の形式は常に繰返されつゝ現代に至りしなり。然れども、人類は多くの時日を同一事に繰

返すほど愚ならず、繰返し繰返しある間に協同の範圍は次第に擴張せられ、競争の方法は漸次に進歩し、初めは單に異人種異民族と見れば直ちに劍戟に訴へしもの、今は相互に争ふべきの理由を提示し、鮮血の範圍を滅殺せんとし、其の慘禍を防止せんとするに至れるも事實なり、平和の爲に戦ひ、戦ふによつて平和を維持す。和戰交錯、人類の歴史を大成す。こゝにも亦人生の矛盾を見ずや。人類道德の進歩は四海同胞主義を標榜し、敵を愛する慈仁の教義は、赤十字事業となつて一方に負傷病者を看護しつゝ、人智の發達は一發に敵を粉碎するの巨砲を發明することを忘れず。右の手に人を殺すの刃を擬しつゝ左の手に救恤を試みんとす。現代の文明は矛盾の文明なり、世界列國の大勢は明かに此の一大矛盾を表白す。推議は如何に美德なりとも國を擧げて之を計れば亡國の悲運は忽ち其の頭上に下り、平和は人類の理想なりともこれのみ隨喜するものは屈辱も亦甘んぜざるべからず。フィンランドは平和の國なり、彼には自から守るの軍隊なく、國民に兵役の義務なし。彼等は年々一千万マルクの兵役税を露國に拂うて劍戟を手をせざるの民となり、國民的自尊心は消耗して露國の治下に推議の美を示す。

しかも彼等は其の國を失へるにあらすや。之に比すれば露國は實に暴横なり。不凍海に出でんとする國民的希望は東に西に他と争うて辭せず。自己の發展の爲には他の平和を攪亂し、毫も推讓の美あるなし。而して彼は此に服従し、此は彼を併吞す。見るべし、争ふものは榮え讓るものは亡ぶ。然らば文明は常に野蠻に征服せらるゝか。歐洲に國して最も野蠻性を有するものは土耳其なりし、彼は戦ひを好むの民たりき。しかも文明此國を疎外し、會て有したりし歐洲の領土は日に月に侵略せられて、今は全く歐洲に其の領土を失ふに至る。武にして暗きものは、文にして明かなるものに及ばず。争ふが是か、讓るが非か、抑も亦文を貴ぶべきか、武を喜ぶべきか、我一步を讓れば彼一步を進む。渾圓球上、國を建つる此の千番に一番のかね合ひなる矛盾の調和に於て苦慮せざるべからず。

矛盾せる教訓

吾等が社會生活に見よ。漫りに自由の競争に委ねんか、弱者は常に倒れ、強者は常に蔓り、

其の強者も亦他の更に強きものに壓せられて、社會一日の寧なく、人は瞬時も其の生活の安きを保ち難し。國家なる社會結合は實に此の競争の緩和劑として、其の激甚なるものを阻止し、相互の利害を打算して強弱各々其の所得せしめ、強ひて其の協同を害するものは團體の力を以て之に制裁を施し、或は之を協同生活より隔離し、或は全く其の生存を剝奪し了る。所謂國法なるもの即ち是れ。其の初めは統率者たる君主の自由意志に出で、次いで優勝者たる貴族等の階級の利害より打算せられ、終には國民全體の利害に立脚し、幾段かの進歩を経て今日に至れるも、もと協同の利害に立脚せるもの、個人々々の利害に就いては尙十分に自由の餘地を有し、苟も全體としての協同生活を害せざる限り、個人と個人とは依然として激甚なる競争を持続す。既にこれ競争なり、幾多の敗殘者を生ずるは免れざる所。テニス、ハードの進化論は好個の譬喩を示していふ「或一村に大工を業とするもの一人あり、彼は其業によりて家族を養ひ、之に安慰の材料を供給するに十分なりしと假定せよ。此の場合に於て突然他の同業者の此村に入り來らば、此の二の同業者の中、何れか一人飢餓に瀕するか、或は二人の間に激烈なる競争

を生じて、共に大困難に陥り、彼等の家族は生活難を來し、彼等の兒童は營養不良となるを免れず」と。更に又例を示していふ「此に一人商人あり、非常の勞役と先見と注意とを以て二人の小兒を教育せりとせよ。若しそが三人となり四人となれる場合は此の家族の全歴史に一大變化を與ふるにあらずや」と。斷えざる人口の増加と、生活の競争とは寸毫の油斷をも吾等に許さず。此に於て教ふるものはいふ。奮闘せよ、努力せよ、他に劣る勿れと。人皆此の教旨を奉ぜば世に敗殘者の生ずべき理なけれど、人々體質を異にし、個々才能を同じうせざるが故に、窮巷に呻吟するもの、聲は何時の世にも絶ゆることなし。此に於て教ふるものは又いふ。弱きを扶けよ、苦めるを救へよと。人皆救はるべきを知らば誰か又奮闘努力せん。此の二個の教訓は同一講堂の下に訓諭せらるゝ一大矛盾にあらずや。奮闘若し是ならば他を排する何の不可かある。敗れて苦境に沈む自業自得のみ。吾は我が才能を發揮して進むべきに進む、他の困厄、顧みずして可なり。救恤若し可ならば、甘んじて之を受くる何の恥とする所ぞ。

背反せる一大思想

生存競争は自然の理法、優勝劣敗は必然の勢ひ、此の如くにして底止するなくんば、世は紛擾の巷たるを免れず、聖者此に着眼して慈悲の教へを垂れ、博愛の實を示す。克く徹底して此説を唱ふるものは露のトルストイなり。彼の目指す所は社會の救済にして、其の爲には自己を棄つる大慈悲に住せざるべからざるをいひ、現代の社會組織に就いて根本的改革の斧鉞を振ひ、富の私有を以て遊蕩の階級を造り出し、人の精神を汚毒する根本罪惡なりとし、暴力を以て少數者の利益を計る國家組織を以て第二の罪惡とし、社會はたゞ愛を以てのみ結ばるべく、人はたゞ平等によつてのみ樂しかるべし、愛の爲には自己を棄て、顧みずとせるに對し、之と對比せらるべきはニイチエの思想なり。彼は他の一面を深酷に洞察して民衆論平和論に反對して奮闘主義努力主義を標榜し、服従を旨とする従來の道德を奴隸道德、他人の爲に自己を犠牲とする弱者の道德なりと喝破し、自己の優越を企つる苦闘力争を以て人類活動の本意なりと主張

す。前者は民衆を本位とし後者は自我を中心とす。前者は平和を樂まんとし、後者は奮闘に力あらしめんとす。前者に美しき情の輝きあれば、後者に勇ましき意の力あり。吾等抑も此の何れに就くべき。人生の矛盾は吾等をして其の一面に安住することを許さず、協同生活の爲には自己を棄てざるべからず。生存競争の爲には自己を立てざるべからず。吾等は此の二力相互の錯綜せる徑路を辿りて現代の文明を生み來れるに非ざるか。

凡俗の自覺

之を社會學者に聞く、社會の進歩は發明と模倣との斷えざる反覆に由ると。凡俗はたゞ模倣することを知つて何等時代のレコードを破るべき新計畫を立てるなく、當該時代の不備を補ふべき發明なきも、向上の心堅く、進取の氣盛んなるものは、凡俗の安んずる所に安んぜず。時代の甘んずる所に甘んぜず、更に一段の發展を試みんとして新計畫を立て、新發明を成就す。其の計畫の時代の好尚に適し、其の發明の不備を補ふものあらんか、我も彼もと之を模倣して

一般の需要となるに及び、更に新しきものゝ發明せられ、其の發明は模倣せられて繰返し繰返して世は次第に進み行く、たゞ時代の模倣を知つて其の水平線以上一步も出づる能はざるものは凡俗の徒、彼は協同生活に不自由なかるべきも、世若し此の如きもののみならば社會は常に同一文明の程度を越ゆる能はざるべし。偉人、天才、英雄、先覺者等、一步其の水平線を超越せるものゝあるあつて其の進歩と向上とは企畫せらる。是等の人々は皆自己を時代より超越せしめんとする奮闘の生活に入らざるなし。支那には智、萬人に過ぐるを英といひ、千人に過ぐるを俊といひ、百人に過ぐるを豪といひ、十人に過ぐるを傑といふ。此の如く凡俗を超越せる英雄傑のあるあつて凡俗は之に従ひ行くが、すべて世の慣ひなり。此點より見て吾等はカーライルと共に世界の歴史は英雄の傳記なりと云ひ得んも、其の英雄の崇拜せらるゝ程度は民衆協同の利便に貢献せし程度と比例し、其の感銘も亦凡俗の心裏と共鳴するものゝ多寡に關するを思へば、凡俗の價値も亦閑却すべからず。否、寧ろ近代に於ては凡俗の勢力の英雄を支配する多きを感じざるを得ず。若し上世を以て英雄の時代なりと云ひ得べくんば、近代は實に凡俗の時

代なり。一個人若くは四五の人の専有に歸したる政權を一般民衆に共有せしめんとしたる政治運動も、從來は僧侶のみの専有したりし教權を公衆の前に展開したる宗教改革の運動も、少數者の壟斷したりし富を多數に分配せんとする社會運動も、弱者敗者に對する救濟事業も、皆凡俗主義の發現にあらざるなし。彼等は其の英雄主義の如く、一切の權力を少數者に専有せしむることを許さず、公平に分賦せんとす。故に一切の差別的なる階級制度を打破し平等的なる無階級の中に協同生活を樂まんとす。しかも唯これ偷安と横倣とを事とする凡俗主義にあらずして實は人々英雄の資あり、個々豪傑の能ありて凡俗の自覺に外ならず。凡俗の自覺は一面に於ては英雄主義の覆滅の如きも、他面に於ては寧ろ英雄主義の一般的普及と見るべし。英雄主義の一般的普及、これ豈社會一段の進歩にあらずや。

矛盾と進歩

社會一段の進歩を経たりとて、人類向上の精神の沮止すべきにあらず、求めて止まざる慾望

は理想を追求して一段又一段、一層又一層、進まんとして此に競争の跡を絶たざるあり。英雄主義の如何に一般に普及したりとも、人は相争うて和するを知らざるものにあらず。人には愛の本能あり、慈仁の賦性あり。協同の美德は日に月に普からんとす。一は自己を中心とし、他は利他を本位とす。人心に此の矛盾あり、發して人生の矛盾となるか、人生に此の矛盾あり、入つて人心の矛盾となるか、如何に自己を中心としたればとて、全く他と没交渉には其の生存を全うする能はざるは社會協同生活の事實これを證明し、如何に利他を本位としたりとも、他に食を與へて自からの餓を醫する能はず、獨り生れ獨り死し、一生の行爲、自己其の責任を負ふの外、他に嫁すべきなし、自から生くるには自から働かざるべからず、生存の競争此に於て起る。競争は必然の結果にして何の咎むべきなきのみならず、寧ろ之あるが故に社會は進歩する。吾等は極力此の負けじ魂を鼓吹し奮闘的生活を推贊すと雖も、其の争ひをして君子たらしめんには、其の競争が協同生活の利便を害するなきや否やに顧慮するあらんことを望み、たゞ協同の美を樂み自己を没却して他を愛するの高きを知ると共に、其の爲には奮闘努力、更に此の協

同生活を利便にし、此の社會を進歩せしめんとする向上の思想の常に伴はんことを望み、他を救ふの美德を稱揚すると共に自から救はるゝの意氣地なきを罵倒して憚らず、他に優越せんとする努力の勇偉なるを讃嘆すると共に、自から撞にせんとするの暴横を打碎せざるを得ず。他を救へ、自から救はるゝ勿れ、自から勵め、他を害する勿れてふ平凡なる教訓を以て人生の矛盾を一身に調和し、高く理想の炬火を掲げて其の照らす所に一歩一歩進み行くの恰好なるを思はざるを得ず。人生其の美所を認むれば樂からざるはなく、其の缺陷を指摘すれば苦しからざるはなし。謂ふ所の厭世と樂天と、見る人の心と説く人の性格とによりて尙楯の半面に執着するもの、如何に最良目に見るとも現代の社會を完備せりとは云ひ得ざれど、如何に悲觀するとも人生を其儘にして些毫の進歩なしとは云ふ能はじ。されば此の完備せざる社會をして層一層完備の境に進ましめ、此の缺陷ある人生をして理想の境に入らしむるが人類の任務にして、人生は人の力によつて進めらるべしとする改善説(Meliorism)は吾等が修養路上に於て服膺すべき人生觀にあらざるなきか。改善説はジョージ・エリオットの創意に出で、サリーこれを襲

用せしより世に用ひらるゝに至りしといふ。此説は此の世界を以て最善なるものともせず、最悪なるものともせず、人類の努力によつて其悪を減じ善を進めらるべきものとし、吾等をして熱心に永遠に努力すべきことを奨励する信條にして、過去の歴史は此の人類努力の空しからずして、終に現代の文化を産出したるの疑ふべからざるを示すに足るあることを知らば、吾等が現代に於ける努力の、やがて來るべき文明に進歩の實を擧ぐるを疑ふべからず。まことや世は進みつゝあり、現代の缺陷も終に補はるべきを思ひて、努力する所に人生の價値は存するにあらずや。(乙卯二月)

我力を秤量せよ

生の秤量

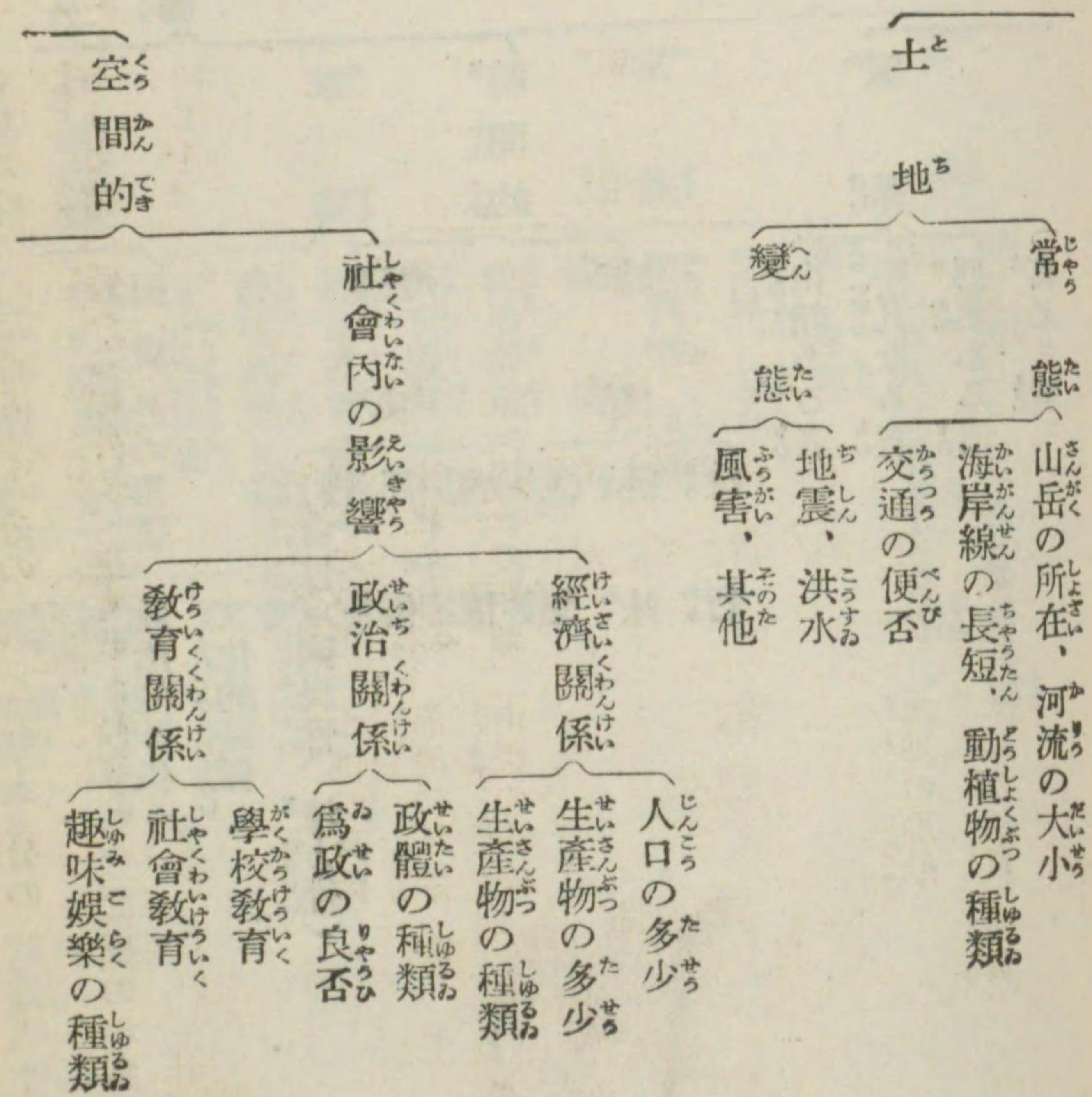
現代の文明を築成せるものは人の力なりといふ。人抑も幾許の力がある、試みに之を秤量

し見よ。宇宙は大にして我身は小。天地は悠久にして我生は短かし。露の如くに聚り、泡の如くに消ゆ。まことに西の國の詩人の謳へる如く、吾等の一呼一吸は墳墓に赴く進軍の曲ならんのみ。彼の赤染衛門が『夢や夢まほろしや夢とわかぬ哉いかなる世にか覺めんとすらん』といへる夢、これ我生を譬喩する最も恰好のものにあらずや。既に是れ夢、抑も何のある所ぞ。科學者は物質元素の抱合といひ、佛者は四大の假和合と説く、炭、酸、窒、水等の諸元素を除きて我身なく、地水火風の四大の外、何の所に我を求むべき。しかも其の我生を受くる百歳に満たず、刻々に老いて刹那に死に近づく、生老病死の四苦は脱し難く、無常の風の吹かぬ時なし。其の生命と呼ぶものは僅に心臓の鼓動に支持せられ、其心といふものも、傳へ得たる本能と知り得たる經驗の外、何物かある。生きて何事をか爲さんとし、自我を立て、何をか執せんとする。我より一切を除き去れ、終に我なきに至るべく、生より死の徑路を奪ひ見よ、終に生なきに了るべし。一切の罪惡は自我を固執するに初り、一切の禍害は生を愛着するが故に起る。此の自我の存在を否定せよ、其處に空寂涅槃の境あらんとは、小乗教徒の屢々立言するところ、

吾等は之を厭世の福音として一笑に付するを止め、靜に其の云ふ所を味ひ、説く所を考へて一面の眞理の其間に伏在するを認めざるを得ず。

力の秤量

生は蜚蜚の如く身は幻に似たり。認めて以て我が行爲となすもの、抑も我力なるか。吾等は過去の宿習に捕へられし先祖の遺傳を身に受け、四圍の境遇によつて左右せらる。我より遺傳を取り去り境遇を除きて其の何の行爲かある。生物學者の語る所によれば、吾等は通常父より二分の一と母より二分の一とを受け、所謂精卵の核は母の特質を傳へ、精蟲の核は父の特質を傳へ、此の二回の生殖細胞の融合によつて生じ來りたるなれど、ガルトンの法則に従へば、其の父母も亦各々其の兩親の特質を二分の一づつを受け得たるを以て、吾等は祖父母より四分の一、其の又祖父母は曾祖父母より各々二分の一を受け得たるを以て、吾等は之より八分の一を受け、更に遡れば玄祖父母より十六分の一、其の先代より三十二分の一、其の又先代より六十四分の一



一、^{さかのぼ}遡れば百二十八分の一、^{ふん}二百五十六分の一、^{ふん}五百十二分の一、^{ふん}千二十四分の一と遂に無窮に達する永劫の昔より傳へ傳へる以外に、毫も我が特質なく、四圍の境遇を點檢すれば、^そ其の主要なるものゝみにても、

